

---

# 風吹くまま、のらりくらり

十姉妹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風吹くまま、のらりくらり

### 【Nコード】

N3094J

### 【作者名】

十姉妹

### 【あらすじ】

初投稿です。初めまして。嘘です。

初めての方は初めまして。お久しぶりの方と言うより覚えていらっしゃる方、お久しぶりです。

とりあえず、投稿したくなかったので投稿します。誰得と言われれば、自分得ですので、時間を損したくない方は回れ右で。それでも読んでやっていいぞと言う、菩薩様がいらしたら、ふつつか者ですが、宜しく願います。

ちなみに、思いつきを勢いそのまま書いておりますので、当然プロットもなく、読まない方が人生において損はありません。読むと損です。

## ハルとヒメ（前書き）

前回投稿させて頂いていた作品の修正版です。

## ハルとヒメ

夏が始まり出した日のことです。お日様から感じられる熱も上がり、羽化したセミの鳴き声を、二人の少女が、川沿いの丘で座りながら並んで聞いていました。彼女たちは、髪形こそ違いますが、お揃いの服を着ています。

一人は、長い髪で顔を隠しながらうつむき、もう一人は、短い髪を風で揺らし、健康そうな顔を空に向けていました。

「ハル、見てみなよ。あの雲、なんか魚に似てない？」

空を見上げている少女は、ハルと呼んだ少女へ明るく話しかけました。ですが、ハルの反応はあまり良いものではありません。

「ごめん、ヒメちゃん。私、見えないや」

「そう……だったね」

残念そうな声をヒメは出しました。が、すぐにまた同じように接します。

「今日は良い天気ね。こう暖かいと気持ちも良くなるわ」

「そうかな？ 私は少し暑いや。もう少し涼しい方が嬉しいよ」

「暑いのが良いんじゃない。それに、風はまだ涼しいし、丁度良いわよ。ほら」

そう言うと、ヒメが呼んだかのように、優しい風が彼女たちを包みました。

ほんの数秒間の風でしたが、ハルたちにはそれで十分です。うつむいているハルの肩を叩き、一緒に遊ぼうと言ったかのようにでした。

風の後押しされたハルは、顔を少し上げました。

「ほんとだ。風が気持ち良いね。それに川もすごく綺麗」

太陽の光を反射して、宝石のように輝く川を見たハルは嬉しそうです。ヒメも彼女が少し明るくなったので、自分のことのように喜びました。

ですが、ハルにはそれが限界でした。

風が通り過ぎ、再び俯いてしまいます。

「でも、私には眩し過ぎるよ。川も、空も、ヒメちゃんも……」  
「なんで？」

「だって、私はみんなに取り残されちゃうようなノロマだし、それでも成長しないマヌケ。でも諦めることさえ怖くてできない半端者なんだもん」

さびしそうな眼差しを足元に向け、ハルは自らを卑下します。

しかしヒメが、違うと叫びます。

「ハルは半端者なんかじゃない！ 一生懸命がんばってるじゃない。ハルの仲間がみんないなくなっても、独りで一人前になろうと努力してるじゃない。」

「そ、それはヒメちゃんがそばにいてくれるから」

「あたしの力なんかほんの些細なものよ。ハルが今それだけ成長しているのは、ハル自身の力なの」

ヒメの言葉にハルは少し慌てて、違うよと今までにない声を出しました。

「些細なんかじゃないよ！ ヒメちゃんのおかげだよ！」

必死に否定するハルは気がつきませんでした。自分が今どのような状態なのか。

ヒメは彼女の様子を嬉しそうに見つめます。

「なんだ、やっぱりできるじゃない」

「なんのこと？」

と、ハルは首を傾げ、気づきました。

顔を、ヒメに向けていることに。

自分だけの力でヒメの姿を見ていることに。

なにより、ヒメを直接見られるまで、顔を上げていたことに。

「わ、私、こんなに……」

驚いているハルは、長い髪の間隙から、どこか誇らしげな顔をしているヒメを呆然と見つめます。

「ね？ あたしの言った通りでしょ？ ハルはやればできるのよ。」

ほら、あともう少しで空がぜんぶ見えるはずよ。がんばりなさい」「う、うん！」

励まされ、弱気だったハルは全身に力を入れます。

ここでまた俯きたくない。ヒメちゃんと同じ世界を見てみたい。その一心でハルは少しずつ、少しずつ顔を上げていきます。

今までがんばろうとしていた気持ちを初めて表に出したハル。ヒメは優しくハルを見守ります。

がんばれ、あともう少しよ。

応援してくれているヒメの声ハルに届きました。実際に聞こえたわけではありません。ですが、はつきりとヒメの思いがハルの心に届きました。心強い友の声です。

できる、できる。今の私にならできるはず。

身体を大きく、激しく揺らしながらも、ハルは夢を成し遂げようとしています。

今まで臆病な自分を打ち込んでいた楔を引き抜くため、一心不乱に顔を上げます。割れてしまえとすら思っていた夢。希望なんて、もう見えなくなって良いとさえ幾度となくハルは思っていました。打って、打って、そしていつか打ち抜いて。甲高い音だけを残して、自分は消えるんだと思い込んでいました。

しかし、できるようになりました。楔を打つ手を止め、逆に引っ張ります。尖った楔の先にあるヒメの笑顔を見るために。

ゆっくりと瞼を開け、ハルの眼に飛び込んできたモノ、それは

「青い……綺麗な青」

白い雲が優雅に泳ぎ、彼らを護っている、青く、澄んだ空。こんなにはつきりとハルが空を眺めたのは、生まれて初めてでした。じわじわと身体の奥の奥から湧き上がってきます。かつてない喜びが、あまりの嬉しさに、ハルははしゃぎます。子供のように明るく、とてもとても楽しそうに。

ふと、ハルはヒメが気になりました。同じように喜んでくれるとばかり思っていたのですが、ヒメからはなにも言ってきてませんでし

た。

ハルは不安に駆られます。

なにかいけないことでもしたのだろうか？

無意識のうちに、ヒメを不快にするなにかをしたのではないかな？  
なぜかそんなことばかりハルは考えてしまい、ヒメを見るのが怖  
くなってしまいました。ですが、怖がるばかりではダメだとい  
うことをハルは学びました。行動に動かさなければ、永遠にそのまま  
ということを経験しました。それに、ハルにとってヒメは無二の親  
友です。嫌われたままで居たくありませんでした。

勇気を持ってハルは視線をヒメに向けます。

と、瞳に映ったのは、惚けているヒメの姿でした。これにはさ  
すがに予想外で、どうしたら良いのか、ハルは悩んでしまいます。

とりあえず、声をかけてみよう。そうハルが思った時、突然、ヒ  
メがブンブンと首を振りました。ハルがその行為に驚き、喉まで込  
み上げていた言葉を飲み込むと、続け様にヒメは言います。

「凄じくない、ヒメ。あの突風のなかでなんて、あたしにもでき  
ないわよ」

「突風？ なにそれ？」

先ほどとは違う呆け方をヒメはしました。ですが、仕方がありま  
せん。ハルは無我夢中で頑張っていたのですから。

「あなた、さっきの、気づかなかったの？」

「え、え〜と……。そ、そうみたいだね」

もしかして、さっき身体が大きく揺れていたのはそのせいかな、  
とハルは恥ずかしそうに笑い、ヒメは深いため息を吐きました。そ  
のあと、ヒメはじつと含みのある眼でハルを見ます。ハルも彼女の  
考えを察し、慌てて言います。

「ほら、鈍感な方が良い時があるんだって。うん。大器晩成型なん  
だよ、私。うん。絶対。絶対したら絶対」

「へえ、大器晩成型ねえ。ついさっきまで暗い事しか言っていなかつ  
たあなたが、ねえ。へえ」



ハルはぐうの音も出ません。

彼女の様子を見て、ヒメは豪快に声を上げて笑います。元気なヒメにはその姿が良く似合っています。しかし、笑われた張本人であるハルはいじけてしまいました。

「ほらほら、いじけないの。今のハルはとても綺麗なんだから、もつたいないわよ」

「え、えへへ。そうかな？ 私、綺麗になったかな？」

「ええ」

頷くヒメに向かって、嬉し恥ずかしくハルは声を弾ませます。

今までの暗い影など彼女にはどこにもいません。明るい彼女こそ、本当のハルなのです。

ヒメはそのことを知っていました。でも、なかなかハルはその姿を見せてくれませんでした。しかし、それはもう過去の話です。ヒメの目の前にはとても綺麗なハルがいるのです。

「本当よ、ハル。とても、とても綺麗に咲いたわね」

天に向かい力強く咲いた一輪の花。川を流れる水より美しく太陽の光を反射し、優雅に空を泳ぐ雲より、白く、細い花卉が円に集まった花冠。そして、その中心を笑顔の黄色で染めるハルは、王女となっていました。ハルの夢であった存在に。

生まれ変わったハルを見て、ヒメは、それじゃあと呟きます。

「次はあたしの番。お願いだからあたしが一人前になるまで枯れないですよ？」

「もちろんだよ。ヒメちゃんがもつともつと綺麗になる姿を見ないまま散りたくなんてない」

「言ってくれるじゃない。ノロマでマヌケで半端者な上に鈍感なハルが」

「ひどいよ。ノロマやマヌケや鈍感が良いけど、もう半端者なんかじゃないんだから」

むくれるハルを、ヒメは笑います。

ハルもつられるように笑ったあと、眼を細めて、ぼつりとこぼし

ました。

「空を眺めながら浴びる風って、気持ち良いね」

「あたしの言った通りでしょ？」

「うん、本当に……」

なにもかもヒメちゃんの言った通りだった、とハルは彼女に感謝しました。いつもよりもありがとう、と。

風に身体を預けながら空を見上げる春女苑と姫女苑。偶然重なった穏やかな時間の流れが、彼女たちを優しく包み込みます。

川沿いの丘で、種類は異なれども同じ笑顔を持つ草花が二本、明るい花をたくさん見せ合っていたのは、また別のお話し。

ハルとヒメ（後書き）

お疲れさまでした。

菖蒲（アヤメ）の便り（前書き）

時間を無駄にしたい人用です。即バック推進小説第二弾

## 菖蒲（アヤメ）の便り

暑苦しい日差しがアスファルトを焦がす道を、スーツ姿の女性が頬に汗を伝わせながら歩いていった。肩甲骨を軽く超える長い黒髪が、熱風と規則正しい足取りで、左右に小さく、時々大きく揺れる。

ふと、花屋の前に立つと、動きとは反対に暑く苦しそうにしていた表情を引き締めた女性は、薄いシヨルダーバックからパンフレットを取りだし、色とりどりの花が迎える店内へ脚を進めた。ガラスの自動ドアが開くと、心地良い冷気の風が、汗が伝う女性の頬を撫でた。ほぼ同時に機械的な音が鳴り、女性が入店したことを店内の誰かに伝える。

「いらっしやいませ」

店奥のカウンター辺りから定番のセリフが女性に届いた。低いというより老年を取った老人のように渋い男の声だった。だが、声の主は女性から見えず、数歩前に進む。後ろで自動ドアが閉まった。

「どちらにいらっしやるのですか？」

「すみません、今手が離せないもので。少々お待ち下さい」

女性は男の言葉に従い、店内を見回して待つことにした。

外見より広々とした空間、というのが女性の持った最初の感想だった。商品である花々を無駄に詰め込み、足場すら狭く、歩き難いなどということはない。数としては非常に少ないのだろうが、種類としては他店に負けず劣らず、多種多様在った。並べ方も綺麗で、壁一面から、天井まで優美に彩るように飾られている。なにより、中心には二人掛けのテーブルが置かれていた。丸いガラスを、器用に交差された四本の金属棒で構成される脚で支えている机に、シンブルな白い椅子は、この場で腰を落ち着けさせるのに向いていた。これに紅茶があれば、心身を癒すのにとても向いていそうだった。先程まで外の灼熱地獄を歩いていた女性も座りたくて仕方がなかったが、ここでは耐えた。

「これでよし」

奥で男がそう言うと、女性は姿勢を正して声のした方へ向いた。すると、レジの置かれているカウンターの裏から、手首のリストバンドで額の汗を拭う男が現れた。

少し背の高い男だった。身体つきも痩せ過ぎず、太り過ぎず、一般的にはがたいの良い、健康的な者だ。声に似合っていないのか、いるのか、年齢は二十後半から三十前半といった感じである。顔つきも線が細く、いかにもといった美男子ではないものの、短い髪が良く似合う好青年であった。肌は浅黒く、一昔前でいうと、麦わら帽子を日射病予防に野良仕事をするのが向いていそうだと女性は思う。

「お待たせしました。今日はどのようなお花をお探しに？」

土汚れが残る軍手を外しながら、男は笑顔で女性に近づいた。正面から見ると、黄色い生地、店名である文字が可愛らしくプリントされているエプロンが汚れているのにも気づいた。下には長袖の青いハイネックシャツを着ており、少々暑苦しかった。

「いえ、申し訳ありませんが、私はお客として立ち寄らせていただけたわけではありません。私、五十嵐 彩芽と申しまして、我が社の保険を皆さまにお知らせさせて頂いております」

そう言って彩芽は用意していたパンフレットを男に渡した。表紙の左上には、彼女の名刺がホッチキスで止められている。

受け取った男は、簡単に眼を通し始めた。

「今お渡ししたパンフレットにも書いておりますが、傷害を始めとして、医療に生命、癌に自動車まで幅広く取り扱っております。内容も、決して他社に負けるものではなく、有名所にも勝っていると自負しております」

「そうですか。いえ、僕はとんとそういったものには疎くて、有名も弱小も正直区別がつきませんね。一応社会保険と年金には入っています、それとどう違うのか、そもそもそこからわからないのが正直なところですよ」

開いていたパンフレットを閉じた男は、言葉の通り困ったように眉の端を落とした。すかさず彩芽は胸に手を添えた。

「その為の私共です。もし少しでも興味が御有りでありますなら、一からお教えいたします」

「それはありがたい。僕の店は見ての通りいつも暇でしてね。閑古鳥も鳴くどころか、呆れて飛び去ってしまうほどですから、ぜひお願いします。あ、立ち話をさせてすみません。どうぞお掛けになつてください。すぐに冷たい飲み物をご用意しますので」

「いえ、お気になさらず。決して難しいお話ではありません。それに、このお店の営業に差し支えるようなことをするわけにもいきませんし。お手透きの時にお呼び頂ければ、いつでも駆けつけますので」

「それこそお気になさらず。先程もいった通り、時間はいくらでも余っていますから。では、少々お待ち下さい」

「急に押しかけておいて、恐縮です」

嫌味にならない軽快な笑い声を残し、男はカウンターの後ろにあるドアの奥に消えた。それを確認した彩芽は、椅子に腰を下ろし、少し口元を緩めた。脈ありと彩芽は見たのだ。大抵は、そうですが、なるほどといわれて断られるのがほとんどだが、ここまで深く入り込める場合は、十割に限りなく近い確率で交渉を成功させてきた。それだけの話術を、経験と元々の才能で彩芽は持ち合わせていた。なので、今回も成功するだろう、とこの時点で強く自信が持てた。安心感すらあった。だが、自分の安心をどれだけ殺し、相手をどれだけ安心させるかが腕の見せ所であるこの仕事、一息で表情をナチユラルに硬く、それでいて柔らかい笑みを作った。三流ファンタジー小説でいうところの、嘘の仮面を貼りつけたのだ。

金属製のトレーを手に持ち、男は帰ってきた。なんらかの花の模様全体に彫られている、花屋らしいものだ。その上に乗せて運んでいるカップにはハーブの絵が描かれており、セットのソーサーにもワンポイントで可愛らしく描かれている。氷の音も涼しげだった。

「お待たせしました、アイスティーです。茶葉はディンブラを使用しました。一応、ミルクもお持ちしましたが、要りますか？」

「わざわざすみません。遠慮なく頂きます」

失礼にならない程度の動作で頭を下げた彩芽の前に、笑顔の男はティーカップとソーサーを置いた。自分の前にも同様に置き、トレイをテーブルの端に寄せて男も椅子に座る。

営業スマイルを崩さないまま、彩芽は男が持ってきた物を観察し、次の言葉を考えた。

「このカップ、可愛い模様のですね。それにそのトレーの模様。とても草花がお好きなのですね」

「はい、特にこのトレーの花なんかはお気に入りです。知っています？ この彫られた花の名前」

「もちろん、知っています」

彩芽が作る笑みの輝きが増した。ツイている。そう思わざるを得なかった。

「菖蒲あやぶですよ。私の同じ呼び名の花。小さな頃から好きでした。

自分と共通点のある物って、どんなものでも惹かれますし。なににより綺麗な花なら尚更です」

本心である。頭に浮かぶ、網目状の模様がある紫の花弁。実は花に詳しくない彩芽でもよく覚えていた。紅茶の味利きなんて出来そうもないが、菖蒲を似た花の中から見極めることができるほどだ。

答えに満足した男は、その通りですと声を弾ませた。

「共通点で興味を持つことって多いですね。僕も自分の名字に華って文字がつかまして、花に関心を持つようになりましたから。あ、申し遅れました。トリーと申します。華麗の華に、表と書いて華表といいます」

「珍しいですね」

「よくいわれます」

「まあ、その点では私も負けていませんね。五十の嵐でどうして五十嵐なのかよくわかりませんので。昔の方はどうしてこんな読み方



をしたのでしよう」

「物好きはいつの時代もいますよ。人生の楽しみ方は様々ですし」  
二人は小さく笑った。この時、できるだけ愛想笑いではなく、素  
の笑みを作るように彩芽は心がけている。

「そうそう、菖蒲で一つ思い出しました。もし時間が許すのであれ  
ば、お話したいところなのですが、よろしいですか？」

華表の提案。これには少し躊躇いが出た。彩芽が今日回る場所は  
ここだけではないのだ。なるべく時間のロスは控えたい。だが、華  
表という、一見変わった名字の男を取り逃がして次があるかは怪し  
い。

この者と、先にいるかもしれない何人かの客を天秤にかけた彩芽  
は、急な回答に迫られた。そして出した答えは、はい、だった。

ロスと引き換えに交渉が上手くいくのであれば、対等な等価交換  
だと結論に達した。見えない先より、指先が触れているものを選ん  
だ。

「よかった。少し長くなりますが、暇人の戯言としてお聞きくださ  
い」

「構いませんよ。お付き合います」

「ありがとうございます。これは知人が書いた小説の話なんです  
ね」

そう言っつて、華表は紅茶を飲んだ。眺めた彩芽も、喉が渴いてい  
たことを思い出し、一口だけ口に含んだ。紅茶は嫌味にならないま  
るやかな苦味があり、バラの香りに似た香りが口内に広がる。飲み  
込むと、火照っている身体の芯から冷やす冷たさが快感だった。華  
表の話に耳を傾けなければならぬ時間が気にならなくなるほどだ。

昔、小学校高学年の兄弟がいた。双子というわけではないが、兄  
弟は同じ学年だった。兄は四月に生まれ、弟は三月生まれだったた  
めである。その為、文字通り、二人はいつも一緒に、同じだった。

背格好はほとんど変わりなく、趣味も、当然勉強の内容も同じだ。学力なんかは共によくはなかった。宿題もやらずに二人で誰かに悪戯する方が多かった、典型的な悪童だ。しかも双子のように息がぴたりで、周りの者には手に負えなかった。

その日も、いつものように近くの交番まで足を運び、適当な嘘を熱演して見せていた。

「近くで動物を殺そうとしていた奴がいたんだ。早く行ってあげて可哀想だよ！」

夏を間近に控えてなお、赤の長袖シャツに迷彩柄のカーゴパンツ姿の兄が、切羽詰まった様子でいう。隣では、涙を流し、しゃつくりを上げて声が出ない弟がいた。弟も兄と同じ服装で、シャツの色が青いことだけが唯一の相違点だった。いつもと変わらない様子だ。兄弟に対応していた若い警察官が、面倒そうな表情を隠しもせず、帽子から出ている後頭部の髪をぼりぼり搔く。

「あのね、君たち。ここで嘘をついたらいけないんだよ。君たちのご両親にも迷惑がかかったちゃうしさ」

「嘘じゃないよ。本当だ」

交番の外まで響く兄の声に、若い警察官は迷惑そうに顔をしかめた。もう何度もこの兄弟の嘘に付き合わされているため、今回もそつだろつとわかっていた。しかし、大声で怒鳴るわけにも、無理やり外に連れ出すわけにもいかない。いくら悪童で有名な兄弟でも、警察としても面目上、身体に傷一つ付けるわけにはいかない。怒鳴るにしても、嘘である確定的証拠がなければ、下手をすればこれも警察としての面子に関わる。嘘つきであっても、本当でない可能性が零ではないのだ。

兄弟を見つめる若い警察官は、どうしたもんか、といった風に腕を組む。すると、兄弟の目当ての者が現れた。

「どうしたんだい？ 外まで声が響いていたよ」

初老の男性警察官だった。元々優しそうな顔つきに、でき始めた皺が、一層彼を温厚な者に見せた。性格も、詐欺の被害者になれば

こつちが悪いんだから、といいそうなほど温和だ。それにつけ込んで、兄弟はここに時折顔を出している。

「小倉さん、聞いて。近くで知らない人が動物を殺そうとしていたんだ。早く助けてあげて」

先程と同じように兄はいい、弟はすすり泣く。後ろで若い警察官は、やれやれと肩を竦めた。小倉が現れた時点で諦めたのだ。

「本当かい？ それはどこなんだ。急いでいかないと」

心底驚いて、小倉は声を上げた。視線は今入ったばかりの交番の外に向けられる。

「オレたちが案内するよ」

「いいや、危ないから君たちはここで待っていなさい」

「オレたちもなんかの手伝いがしたいんだ。だって、可哀想だったし。ねえ、良いでしょ？」

少しの間考えた小倉は、わかった、と優しい顔を強張らせ、真剣な顔で兄弟にいう。

「でも、私の指示にはちゃんと従うんだよ。わかったね」

兄弟は無言で頷く。そして、三人は交番の外へ駆けだした。残された警察官は深い溜め息と共に平和になった空間で疲れるとこぼした。

こつちだよという先頭の兄に弟が続ぎ、その後ろで二人を追いかける小倉の三人が町中を走る。細い道を右へ左へ曲がり、ここだよと兄弟は草木が数多に茂る公園に駆け込んだ。遅れて小倉も公園に入ると、そこにはすでに兄弟たちの姿がなくなっていた。見失った、と小倉は慌てて公園内を走る。一周するのに十分以上は軽くかかった。小倉の脚は決して遅くない。公園がそれだけ広がった。周囲に警戒しながら入口にまで戻った小倉は、そこでようやく気がついた。「また騙されちゃったか。まあしょうがない。平和な証拠だ」

息を切らし、さわやかな汗を流す小倉は、公園の緑を一瞥し、優しいな笑みと共にこの場をあとにした。人を疑うことを知らない小倉は、警察としては無能で、いつまで経っても交番勤務から抜け出

せないが、他人を疑う人間の歴史において、間違いなく稀有な存在だ。なんらかの教徒であろうとも、他教徒を疑うにも関わらず、である。

その様子を眺めていた兄弟は笑いを殺し、茂みに隠れていた。確かに小倉がいなくなったのを確認して、兄弟はとうとう嘖き出した。二人して笑い転げ、辛そうな呼吸を整える。

「小倉さん、ほんと面白い人だなあ」

「いつつも騙されるもんね、兄ちゃん」

「まったくだ」

二人は一通り笑ったあと、茂みから出て、のんびりと公園内を歩き始めた。お気に入りの場所がここにはあり、そこに向かっていく。

しばらく歩いた兄弟は、目的地に辿り着いた。そこには、誰が手入れをしているのか、いくつかのプランターが並んでいた。長方形のプランターには、パンジーや水仙といった数種類の花が植えられている。その中で、兄弟は紫色の花、菖蒲の前でしゃがみ込んだ。

嘘つきな兄弟の本当。それは花が好きであるということだった。

自分たちがどれだけ好きかを証明するため、二人はいつも菖蒲を真っ先に見つめる。知っていたからだ。菖蒲にいくつかある花ことばの内『あなたを大切にします』というものがあるのを。正確には？あなたたち？であるが、そこまで気にはしなかった。

菖蒲に満足した二人は、順に色とりどりの花を眺める。まだ成長が発展途上の兄弟の背中は、儂いほど小さかった。今この時の安らぎをその身全体で味わう。

次の日は学校で、悪童という通り名に負けぬ悪戯つぶりを働いた。担任の薄くなつた頭髪に霧吹きで水を与えながら、よく育て、とっては笑い、学校で飼っている鶏の卵を拾っては、グラウンドで遊んでいる誰かに向かって投げて楽しみ、給食で出たスープに、兎は自分の糞を食べるんだ、と試してみんなに配る前に混入したりと、

思いつく限りやった。ずっと楽しそうに二人は笑った。皆に嫌われようとも、笑っていない時などないかのように。

だが、放課後、二人の炎のように明るい笑みは鎮火した。親が呼び出されたのだ。

兄弟の頭を掴み、無理やり頭を下げさせて謝る母親。教師は彼女に念を込めて、善悪の区別をつけさせて下さいと叱った。謝りなさいと母親にいわれ、その度に兄弟は小さな声で謝り、それで叱られては大声で謝罪を口にした。

何度かそういう日が続き、いつの間にか兄弟の様子が変わった。弟は相変わらずの悪童で通ったが、兄は大人しく真面目な生徒になった。兄が弟に制止の声をかけるところが目撃されるようにもなった。それでも二人の仲の良さは相変わらずだったのは、太く繋がる絆によるものだ。並んで公園の花を眺める日課も欠かしていない。

しかし、夏も終わりの兆しを見せ始めた黄昏時、兄が交番に駆け込んだ。一人だった。

「助けて下さい！ 弟が、弟が殺されちゃう！」

中にいたのは若い警察官のみだった。小倉はその時いなかった。パトロールかなにかで不在だったのだ。

若い警察官は、兄を一瞥し、またかと小さく呟きながら立ち上がった。

「君、君は最近、大人しい良い子になってくれたと思っていたんだけどね」

「嘘じゃない！ 嘘じゃないんだ！」

裸足の兄を見て、よく考えると若い警察官は思う。これだけ用意周到で必死さをアピールされたら、知らない者であればうるたえらだろう。だが、この兄弟の悪戯に対する頭の切れは、時々大人を超越するものであった。現に、若い警察官も数度騙された。なので、今回もそうだとしか考えられなかった。

「弟が大変なんだ！ お願いだよ、一緒に来て！」

「前も言ったけどね、ここで嘘はご法度なんだよ。法律に触れちゃ

うよ？ 君は捕まっても良いの？」

脅し半分で、若い警察官は手錠を出して見せた。だが、兄は引かない。逮捕してもいいからついてきてよ、と騒ぎ続けた。小学生でここまで肝が座っているのには、流石に若い警察官も驚いた。手錠を見せるのは最終手段でもあった。これ以上のカードを若い警察官は持ち合わせておらず、以前にも増して困惑した。とりあえず宿めるという方法で時間を伸ばしていると、息を切らした夫婦が交番にやって来た。

「すみません、うちの息子をご迷惑をおかけして。なんと謝罪していいものやら」

兄の両親であった。上半身を何度も上げたり下げたりして謝る夫婦が、巨大な助け船に見えた若い警察官は、いえいえ、と気をよくしてかぶりを振る。

「慣れてますから。君、もうこんな悪戯したら駄目だよ。ほら、ご両親がこんなに困っているじゃないか」

そついいながら若い警察官は兄の小さな震える背を押し、夫婦の前に立たせた。

「今は平和ですしね。警察の仕事も田舎じゃ減る一方ですよ。なので、いい方は悪いのですが、ちょうど良い遊び相手になってくれましたよ。君、今度来る時は、悪戯目当てできたら駄目だからね。普通に遊びに来るなら、いつでも相手してあげるから」

「本当に申し訳ありません」

何度目かわからないほど頭を下げる夫婦に、謝らなくても大丈夫ですよ、と若い警察官はいう。

「子供は元気でないよ。この子や弟君は少し元気過ぎましたけど、もう大丈夫でしょう」

申し訳ありませんでしたともう一度呟き、夫婦と兄は交番を去った。すると、代わりにと言わんばかりに、奥から小倉が顔を出した。寝惚け眼を右手で擦り、若い警察官に、おはよう、と挨拶した。

あの騒ぎの中、よくこの人は起きなかつたな、と若い警察官は心

から思った。

若い警察官が、小倉と入れ替わり仮眠室に入ってしまったら、時間が過ぎた。濃い紫の空には、僅かに欠けた月と、数え切れそうなほど少ない星々、そしてそれらを隠しては、もったいぶるかのように見せる雲があった。事務の仕事しながら、小倉は時折、窓越しにその空を眺める。今回は、窓とは反対の壁に掛けられている丸時計を確認した。大体、もうすぐに一時になりそうだった。事務の方ももう少しで一段落がつき、若い警察官も多分三十分程度で起きるだろう、と計算した小倉は、あとで外回りでもするか、と考える。

と、勢いよく交番のドアが開けられた。現れたのは、赤い長袖のシャツを着た兄だった。ただ、いつもとは明らかに違っていた。左足を引きずり、右腕を力なく垂らしている。顔にも、破れている服の間から覗く身体にも、いくつかの生傷があり、とても痛々しかった。そして叫んだ。悲鳴より、断末魔に近い叫び声だった。

「助けて、小倉さん！ 殺されちゃう！ お、弟が殺されちゃう！」  
身体に残る力を兄はすべて使い果たした。叫んですぐに兄の膝が折れ、その場に倒れてしまった。小倉は椅子を倒して兄に駆け寄り、なるべく優しく身体を支えた。

「どうしたんだ！ いったいなにがあったんだ！」  
小倉の問いに答える力はもう兄に残っていなかった。ただうわ言で、殺される、殺されると呟くだけだ。下手に揺することもできずにいると、兄は別の言葉を口にした。

父さん、母さん、ごめんなさい。もうしません。痛いのは嫌だ。  
途切れ途切れで、その上間に、殺されちゃうなどと挟まっていたので聞き取り辛かったが、兄は確かにそうだった。

「騒いだりしてどうしたんですか、小倉さん？」

場違いな若い警察官が、欠伸をしながら奥から現れた。そして、重症の兄を見た途端、顎が外れそうなほど驚き、思わずこぼしてし

まった。

「夕方のあれ、本当だったんだ」

小倉の肩が微かに揺れた。優しく兄を寝かせる。その時、破れている服の隙間から、古い傷をいくつか見た。ハイネックで隠れていたが、首に大きな火傷もあった。それを見て、小倉は思わず涙を流した。

雑に目元を拭った小倉は立ち上がり、背中越しに若い警察官へ問う。

「知って、いたのか？」

「え？ いえ、いや、はい」

曖昧過ぎる返答を聞いた小倉は、硬く拳を握った。

「何故知って、その時に動かなかった」

いつもは柔らかくて温かい小倉の声が、悲しいほど、聞いている側が辛くなるほど冷たかった。

「い、いつもの嘘かと思ったんですよ。親御さんも謝りに来ましたし。それに」

そのあとは続かなかった。振り向き様に、小倉の拳が若い警察官の頬を殴り飛ばしたからだ。倒れた場所が悪く、小倉がすでに倒れていた椅子の上に背中を打ちつけてしまい、若い警察官は悶える。が、小倉はそのまま横にさせない。胸ぐらを掴み、強制的に上半身を起こさせる。文字通り、眼と鼻の先に迫った小倉の顔は、般若のそれだった。

「お前の戯言なんかはもうどうでも良い。今すぐ救急車を呼べ。それが終わったらもうここには顔を出すな。いいな」

有無をいわせずに、小倉は交番を飛び出した。

「……それで、結局弟さんは？」

いつの間にか、華表の話に夢中になっていた彩芽は、紅茶を飲むのも忘れて次の展開を求めた。反対に、華表は氷で薄くなった最後



の一口を飲み干す。

「まあ、最後はなんでもないのでね。弟は死に、両親は殺人及び虐待の罪で逮捕。兄はその後、新しい家族と共に、幸せに暮らしましたとき、つてね。まあ、まだ続くんですけど、それは内緒にしておきます」

「ええー。そんなあ。気になっちゃいますよう」

姿や職種から二十代前半と予想される彩芽は、それよりも若く見える童顔を不満げにした。自分の仕事など、すっかり忘れてしまっている。

「楽しみはずっと取っておいた方が、得た時の喜びが大きくなりますから。っと、すみません。こちらの話を長々と語っておいてなんですが、配達の間です。説明を受けようと呼び止めてしまったのに、申し訳ありません」

そういつて華表は立ち上がり、カウンターに歩いて行つたしまった。思い出した彩芽は、しまった、と思い、なんの考えもなくあとを追った。

「あ、あの、なんなら配達のお手伝いをしますよ？ 歩きながらでも出来る簡単なものですよ」

「好意はありがたいのですが、少し遠い場所なので、お付き合いさせるわけにはいきませんよ。歩いて片道一時間くらいは軽やかかりますし」

無理だった。話に夢中になり過ぎて、もう五時を回っている。彩芽が務めている会社は、時間にするさく、例外を除いて七時までしか働けないのだ。会社に戻る時間を計算すると、早く見積もってもあと三十分ぐらいしか時間に余裕がなかった。

うまくいくと思いついていただけに、彩芽は心底落ち込む。華表は苦笑しながら、足元に用意していた花を持ったためにしゃがんだ。力なくその様子を眺めていると、彩芽は見ってしまった。緩んだ八イネットの隙間から覗く、痛々しい火傷を。

「あ、あの……つかぬことをお伺いしますが、どちらに配達を？」

震える口を動かして訊ねた彩芽に、にっこりと笑みを向け、華表はいう。

「兄の所へ。今日が命日なんです。ではすみません、急ぎますので」花を抱えた華表は、脚早に奥の部屋へいつてしまった。悪戯をした少年が、逃げ出すようだった。胸にある菖蒲を大切に抱えて。その背を、彩音は見送ることしかできなかった。

呆然とそこに立ちつくしていると、背後の自動ドアが開き、機械音が店内に響いた。彩芽が振り返ると、そこには年老いた男性警察官の姿があった。皺だらけの顔は優しく緩んでおり、今聞いた話に出た初老の警察官がさらに年を取ったようだった。

「あれ、お客さん？ 珍しいな」

「い、いえ。私は保険会社の者で、我が社の保険をお知らせに参りました」

「保険？ ああ、なるほど。私はこの近くの交番で長年務めている小倉と申します。以後お見知り置きを」

小倉と聞いて、彩芽は心臓が飛び出る思いだった。華表の話は小説ではなく、実体験の者だと証明されたからだ。驚くことなどないもなはずだが、とにかく慌てた。両腕を変に動かし、口をパクパクさせる。

いきなり挙動不審になった彩芽を、不思議そうに眺めていた小倉は、一呼吸おいて、なるほど、と呟いた。

「彼の話を聞いたんだね」

彩芽の身体は大きく跳ねた。なにも悪いことなどしていないのに、逃げ出したい心境に陥ってしまった。逃げることはできないが。

華表と同じように、穏やかな笑みを崩さない小倉は、そうかそうか、と一人ごちる。

「君、名前は？」

「あ、彩芽です！ 五十嵐 彩芽です！」

「うん、良い名前だ。それで君、彼の話は最後まで聞けたかな？」音が鳴るほど彩芽はかぶりを振る。

「そうかそうか。なら、続きは気になる？」

首を振り続けていた彩芽だったが、ぴたりと動きを止めた。気にはなる。だが、道徳として聞いてはいけない。それでも気になる。腕を組んだ彩芽は、首を傾げてうなりだした。

「君は自分に正直だね」

「そ、そうでしょうか？」

「うん、そうだよ。なにに悩んでいるのかすぐ分かる。だからすぐ騙されるんだね」

「なんのことでしょうか？」

疑問をそのまま口に出した彩芽を無視して、小倉は飾られている紫のアイリスへ眼を向けた。そして、静かに口を動かし始めた。眼に見えない小説を朗読しているような口調であった。

「両親から虐待を受けていた弟は亡くなった、と思われていた」

「え？」

「実は、亡くなってしまったというのは、兄の方だった。無能な初老の警察官はその時気付かなかったが、本物の兄が帰ったあと、満身創痍で交番に駆け込んだのは兄の服を着た弟だった。兄の格好をした弟が、必死に救援を無能な初老警察官に求めた時、弟という所だけ一瞬言葉を詰まらせたのはいい証拠だった」

驚きで、彩芽は固まってしまった。しかし、頭は晴天のように澄んでいた。先程、華表がいった兄という言葉も、この時になってようやく気付き、そういうことだったのか、と思った。

横目で彩芽を一瞥した小倉は、頬をさらに緩め、語り続けた。

「親の眼を盗み、服を交換し、その上弟を逃がしたのは兄の知恵だった。悪戯に回っていた知恵を弟のためだけに使ったのだ。痛いのは嫌だと改心した兄より、悪戯を続けていた弟への暴力が酷く、いつ殺されるかわからなくなったことを知った時に。時はすでに遅く、弟は右腕と左脚の骨を折られてしまった。だが、逃げ出させることに成功した兄は満足したのだろう。無残な死に方だったが、顔だけは安らかだった」

「そうだったのですか」

「そして、数年の時が流れた」

無意識に身体が強張るのを彩芽は感じずにはいられなかった。これからの話が、華表のいつていた？続き？であったからだ。

この時ばかりは聴覚以外の五感を全て失っていいとさえ思った。

アイリスを眺めながら話す小倉の　いや、華表の物語を聞き逃さないために。

「毎年欠かさず通っていた兄の命日。その日も弟は学校が始まる前の明朝、墓参りにいった。そして見つけた。一枚の手紙が添えられた一輪の菖蒲を。菖蒲は、可哀想なことに、縦に裂かれていた。弟は当然怒った。花が兄の次に大好きであるから。けど、手紙を読んだ瞬間、全てを察した。ごめんなさいと別々に書かれた文字と下にあった、元父と元母より、という内容で」

「何故、わざわざ花を？　手紙だけで十分では？」

アイリスの花弁を撫でた小倉は、ゆっくりと彩芽に振り向いて訊ねた。

「菖蒲の花ことばには色々あってね。そのうちの 하나가『消息』なんだ。それを断つとどうなるかな？」

考える必要のない問題を、彩芽は素直に答えた。

「消息を絶つ。つまり、もう二度と関わらない、ということですね。手紙も恐らく最後の一通」

「正解。ただちよつとだけ訂正しておくよ。手紙は、最初で最後のとても悲しい？良き便り？だってね」

胸が締め付けられる想いだった。身近にそこまで不幸な者がいなかった彩芽は、苦しくて仕方がない。他人事なのに、涙がこぼれそう。駄目だとわかつているのに俯いてしまう。

徐々に重みを増す空気の中、小倉は外を一瞥すると、場違いな明るい声で彩芽に問題を出した。

「さてここでクイズです。何故悪童兄弟は悪戯を始めたでしょう？」  
安易に答えられなかった。それどころか、考えることさえ彩芽に

は辛かった。顔を上げることさえできない。

「正解は、楽しい時間をたくさん二人で作ってたから。捻くれていますが、兄弟にとって悪戯している時は本当に楽しかったのでしょうか。いつも笑顔でしたしね。それで第二問、これはあなたにも関係する問題ですよ？」

眼を見開き、彩芽は驚いたままの顔を小倉に向けた。とても意地悪そうな笑みに見えた。

「最後まで悪戯を止めなかった正真正銘の悪童である弟。彼は大人になって改心したでしょうか？ 三択です。一、相も変わらず嘘を吐き続け、綺麗な店なお客が誰も寄り付かない。二、改心しても尚、近所の子供たちに悪戯を教え、大人たちから邪険にされている。三、詳しいはずの保険をよく知らないといい、長い話を聞かせた拳句、契約は絶対にしない」

外でクラクションが鳴った。ガラスのドア越しに、車の運転席に座って手を振る嘘つき少年、もとい、嘘つき青年がいた。

どんなリアクションも取り辛くなり、身動きが取れない彩芽に背を向けて、小倉は立ち上がり、自動ドアへ向かう。と、一度足を止めて彩芽にいった。

「そうそう、四択目があった。徒歩で一時間かかるといって、その癖自分は車で十分ほどの時間でいってしまうという、遠回りな嘘も平気で吐く、成長した悪童。さてどれでしょうね？」

振り返った小倉の顔はとても嬉しそうで、楽しそうだった。彩芽の返答も待たずに小倉は、自動ドアの前へ移動した。ガラスのドアが開くと、華表も助手席の窓を開ける。そして、彩芽に聞こえるように大声でいう。

「人生笑った者の勝ちですよ」

小倉が助手席に乗り込み、短く二回クラクションを鳴らした車は、そのまま去ってしまった。

彩芽の指が触れていたのは、華表に似せて作られた巧妙な嘘の人の形であった。この嘘に溢れた花屋。中でそっと咲き誇る本当の花々

を知る者は数少ない。その少ない者の一人となつた彩芽であるが、華表たちとすれ違って入つて来た子供たちを、自分の姿を見せただけで泣かすほど怒り狂つていたのは、また別のお話。

頼りなく排気ガスを吐き出しながら進む車の中で、華表は静かに口を開く。

「小倉さん、彼女に余計なことといったらる」

「余計なこととはなにかな？」

共に笑顔を絶やさない。親子が他愛のない会話をしているようだ。「せつかく、あの人が悩み苦しむところを想像して、笑い転げたかつたのに。無駄に感情移入する彼女みたいな人、あんまりいないのに」

「相変わらず人が悪いな、君は。政治家と保険の営業に関しては時にだ。やけに詳しいのに」

「敵の情報は多い方が得だから。共に人を騙して金を得る職業のナンバーワンとツーだ」

「それは否定せんよ」

「だろ？」

穏やかな笑みをいつも浮かべているだけに、それが含みのある物に変わると、とても恐ろしくなつた。天使のような悪魔の笑みとは、まさしくこのことだ。

「少し訊ねても良いかい？」

「どうぞどうぞ」

「どうして君の嫌いな人種ナンバーツーである彼女にあの話さ？」

一呼吸置いた華表は、そうですね、と撫でられた猫のように目を細めた。この先にいる兄を懐かしんで。

「今日は兄の命日。その日にアヤメという名の人 came。それだけ」なるほど、わかりやすい答えだ。君も、君の兄も菖蒲が好きだったからね。私を公園に騙して連れて行つては、私が帰つたあと、並

んで菖蒲を眺めるくらいだったし」

思わずブレーキを踏みそうになった。それほど華表は動揺した。小倉が自分たちのそんなところまで見ていたのを今まで知らなかったからだ。

表情と態度では平静を装う。真実をいつも嘘で隠してきた華表の、職業病的な対応だ。

だが、小倉の眼は誤魔化せなかった。幼い頃の兄弟が浮かべていた、悪戯が達成した時の笑みが移ったと思えるような笑顔でいう。

「私が知っていたのに驚いたかい？」

意地悪な質問だ、と思いつつも、どうだろうね、と他人事のようにかわした。

「そうか、それは良かった」

華表の心の声を聞いていた小倉は、そう答え、声に出して笑った。年の功には勝てないな、と二十年以上に渡って騙されていた真実を知った華表は肩を竦めた。

菖蒲（アヤメ）の便り（後書き）

お疲れさまでした。



子から見た親（前書き）

即バック小説第三段。

## 子から見た親

子にとって完璧な親とは何だろうか。それを話す。  
経済的に裕福。

間違いいではない。が、正解ではないだろうよ。俺の知り合いに社長の息子がいるが、奴は大学生である身分であるにもかかわらず、ゴールドカードを財布に入れて、高級車を乗り回している。きつとあいつは今幸せだろうな。羨ましいとも思う。俺も人間だ。反面、可哀想な奴だとも思う。まだ学生であるガキだ。金を持って余して何が楽しいのかよくわからない。寄ってくる連中の大半は金目当てだろうに。自分でそうさせているのだから、自業自得ともいえる。

それに、なに不自由なく育ってきたんだ。社会人としての能力は、下から数えた方が早いんじゃないか。この不景気、どの会社でもいつ潰れるか、わかったもんじゃないしな。大学に通ってはいるものの、そこは三流。正直、高卒との大差なんてない。就職先も親の会社に転がり込むだろうよ。そんなもって、仕事量に反比例の高給料を得る。堂々と遅刻して、仕事中にエロサイトでも眺め、威張り散らして帰宅するのが容易に眼に浮かぶぜ。

もう一度言おう。今の世の中、どの会社も潰れるのは一瞬だ。さて、奴は世間という名の海に一人放り出された時、なにを思うだろうな。何通りもある。そして、そのうちの一つがこれだ。

甘やかして育てた親が悪い。

まさしくその通りだ。ガキに金を、しかも大金に持たせた親がクズなんだ。怠けていた奴も悪いが、諸悪の根源はやはり親だろう。となれば、完璧な親は経済的に裕福とイコールで結ばれない。

ならば逆に駄目な親なんかどうだろう。

父親はリストラされ、平日休日関係なしに家でゴロゴロ。それでも家庭に金は必要であり、母親はダメ親父に文句一つ洩らさず、パートに勤しむ。溜まったストレスは、些細なヘソクリを片手にホス

トへ貢ぎに。なんてな。そんな親を見て育った子。そいつは俺の友人に一人いる。

とても良い奴だ。些細なところまで気が利く。親が最高の反面教師になっっているためか、仲間内の誰よりも勤勉だ。仕事にしても、勉強にしても、人間関係にしても。けど、その分損をしている。だらしない親を見捨てることのできないあいつは、生活費を削ってまで、親に仕送りをしているんだ。高校に通わせてもくれなかった親にだ。職场上、一人暮らしを余儀なくされたあいつは、家賃や光熱費、さらに一生懸命勉強している資格に必要な経費。金なんて、あつても足りないくらいなのにな。

余計な心情が混ざったが、つまりはそういうことだ。子供の育て方としてはある意味最強だ。けど、親自身は駄目過ぎる。この件も、完璧な親とは呼べない。

次は家庭円満な家族。

これは正しい。俺個人の見解だが、ほとんど正解だろう。驚くほど金持ちでもないが、毎日幸せに暮らし、時には些細な喧嘩をする。なんとも微笑ましいではないか。

しかし、あくまでこれは正解の一部ではないか、と俺は思っている。

ならば、本当の答えはなんだ。と、誰かに急かされそうだから、発表しよう。

答えは、？子に心配をさせない親？。これに尽きる。

そうじゃないか。子が親になにも心配しないなど、幸せの極みだと俺は思う。当然、寿命や、老けに伴って得てしまう病気などは例外だ。親は子より先に死ぬ。当たり前だ。親より先に死ぬガキなんて、爪を全て剥ぎ取られ、四肢を切り落とされ、汚物をまき散らしながら死ねば良いんだ。事故だから、病気だから、誰かに殺されたから、しょうがない。なんて言い訳は肥溜めにでも捨てる。親不孝者には、そのぐらいの結末が最低限だ。

閑話休題。

完璧な親を持つ子。俺にもそんな知り合いがいる。そいつのことを少し話そうと思う。

大学生の頃、僕の両親は死んだ。不慮の事故だ。マンホールの蓋が、満ちていた水の圧力で数メートル飛び、二人を巻き込んで地面に落ちるなどと、誰が想像できるだろうか。出来るという者がいたら是非教えてほしい。そいつの頭めがけて、ビルの屋上から砲丸をばら撒くから。

それはさておき、僕の両親は、本当に僕に心配をかけさせない親だった。

横断歩道を歩く、赤信号では止まるなんて、初歩中の初歩は当たり前だ。常識だ。だが、父や母の安全性はそれに留まらない。

歩道橋は使わない。崩れない可能性が十割でないから。

自動車及び、電車や飛行機には乗らない。事故らないとは限らない。それに伴って、会社は徒歩で十数分の場所にある。仕事内容も、外回り中心の営業や、肉体労働の製造業ではなく、デスクワーク。身の危険を考えて選んだ職だ、と父に訊いた。一日中パソコンと睨めっこだから、父の眼の疲労は大きい。そこは母のフォロー。帰ってすぐに温めて置いたタオルを眼に当てたり、身体のマッサージなどをする。僕も良く父の肩や腰を揉んだものだ。勿論、母の。

買った物は、片手で軽く持ち運べる量のみ。スーパーの袋にぎっしり詰まった物を両手にぶら下げながら転んだら、荷物がある分、ポケットに手を入れている時よりも危険だ。

住居は、完全に安全とは言い切れないが、一軒家である。家がなければ何もできない。それでも危険を限りなく零にするため、昔から鼻肩させて頂いている建築業の会社に、年一で点検、必要であれば補強を行って貰う。一番の出費だが、生活費以外に使う金など、そうそうないので問題ない。むしろ、家が崩れる方が心配だ。

他にも様々。風呂の水量や入浴時間。常識の範疇でいえば、規則

正しい生活に、バランスの良い食事。それらに僕も協力をしていた。まるで軍隊だと友人にいわれたが、安全に生活をするためだ。やむ得ない、といえば聞こえは悪いが、必要なことだと僕は疑わない。旅行にいったことがないのか？ といわれたこともあるが、むしろ他県、もしくは他国にいつてなになが得られるのか、と僕はその時に言い返した。身の危険を顧みず飛行機に乗って行き来し、無駄な疲労が身体に圧しかかるだけではないか、と。思い出ができるのは素晴らしいと素直に思う。が、思い出の代わりに自分の命を失ったら本末転倒もいいところだ。

ビビり過ぎだろ。心配し過ぎ。お前の家は、お前を含めて時代が江戸だ。

それらに僕はいう。  
うるさい。

心からそう思っていた。否。今もそう思っている。

絶対なんてことは、人為的以外にあり得なく、僕自身が好きじゃないので口にしないが、僕は正しいと胸を張る。父や母はなにも間違っていない、と。

葬式が終わり、広くなってしまった我が家で、僕は初めて自分の通帳を見つけた。父と母の荷物を片づけている時に見つかった。

財布の中に納まる程度で金は足りたので、僕には無縁の物だった。それを、父と母は僕名義で作っていた。

通帳を開いて中を見ると、僕は呼吸が止まりそうになった。一般市民が手に入れられるような額ではなかったからである。僕の通帳と同じ場所にあった両親の通帳を、恐る恐る見てみると、残高は零だった。いや、それだけではなかった。零になった日付と、僕の通帳に初めて振り込まれた日が同じだ。それは、僕が大学に入学した日。もうこの時から父と母は、自分の身にながあっても良いようにと考えていたのだらう。この金で遊んで暮せばよかったのに、と僕でも思ったほどだ。

膨大な額が記入されている通帳を胸に、僕は涙を流した。親の死

体を眼にした時以来に泣いた。子供みたいに、大声で、馬鹿だよと叫びながら。

と、まあこんな感じの話だ。ちなみに、そいつはその金を生活費以外に使ってないぜ。未だに大事に保管してる。あれは家宝だな、あいつにとつて。いろいろ苦労したみたいだがな。けど、あいつももう一児の親。生活は変わらず安全最優先だけだな。笑っていつてたぜ。これから僕がもっと増やして、将来大学生になったあの子にこっそりプレゼントするんだ、つてな。渡すのはもっと後になるだろうけど、ともいつてたな。

そういう家系なんだろう。子に心配をかけないよう、墮落に生きず、平凡という名の幸せを常に噛み締める。カリスマだとか、風雲児だとか呼ばれてるだけの金持ちとは比べもんならないほど、あいつはすごいよ。俺の憧れといつても良い。尊敬だ。まあ、ただあいつみたいな生活を、俺は送れそうにないがな。

とにかく、俺からの話は終わりだ。

ん？　なんでこんな話をしたかって？

決まってんだろ？　おつと、悪い、電話だ。

はい、\*\*です。本当ですか！　ありがとうございます。ええ、ええ。すぐに行きます。はい、はい。では、また後ほど。

本当に悪いな。俺、ちよっくら出かけないといけなくなっちゃまった。

どこに行くつて？

決まってんだろ。

俺のクソガキに逢いに、だ。

子から見た親（後書き）

お疲れさまでした。

さあ（前書き）

セリフだけ



## さあ

「幾千、幾万の月日が経とうとも儂らは変わらぬ」

「変わるはずがありません。私たちは、出逢った瞬間から終わっているのですから」

「終焉などありません。永久に続くのみ」

「永遠なんてありません。全て平等に土へ還ります。行き着く場所は存じませんが」

「儂の鼓動を何故聞かぬ。張り裂け、血潮吹く激動の音色を。何故見ぬ。闇を喰らわんとする貴様の光を。何故感じぬ。儂らの虚空を抜ける風の咆哮を」

「触れるだけの力がありません。あっても興味が湧かない」

「その眼はなんだ。黒いだけの宝石か？ 役に立たぬその辺の石ころと同じか？ 耳は？ 鼻は？ 肌は？ 神経は？ 下らぬことをぬかすその口、引き裂いて本性を晒してやろう」

「私の魂はいつも漏れています。貴女が耳を傾けないだけ」

「うつけ。儂の髪先一寸まで貴様の魂を感じておる。そのガラクタの眼で刮眼せよ。我が髪が喜びに荒れ狂っておる様を」

「よく見ておりますよ、いつも。その妖艶な長き黒髪。残念で仕方がありません。私のような者と出逢っていないければ、男を魅了する清艶なそのままだったのでしょうか」

「我が美に一部の狂いなし。なにを残念がる？ 儂は誇らしいぞ。」

胸を張ってこの四肢を晒し出せる。貴様もふんぞり返れ。霊峰すら及ばぬ儂の美に貢献したのだからな」

「できると？」

「思うわけ無かるう。貴様ほどの愚者、この世で他を見ぬ。あの世でもな」

「いるかもしれませぬよ。歴史には多くの魂が柱となっておりますから」

「ならばその者に逢い、還つて来い。感想を述懐しろ。儂は寛大だ。いつまでも待つておる。変わらぬ凄艶な姿でな」

「それでは逝けません。私の心は休まることを知りません。逢う前に還つて来てしまふ」

「それはそれで楽しい狂言だ。さあ狂え。お前を思い出せ。儂は覚えていゝるぞ。貴様と出逢う前の苦輪を。憎悪と憤怒を。貴様と出逢い、知つた歓喜と好奇心を。さあ、踊れ道化。舞え、愚者よ。さあ、さあ！ 儂と共に未来を祝福しようではないか」

「過去は過ぎたモノ。未来は定まらない不安定なモノ。私たちにできるのは今を抱くだけです」

「ならば儂が今を抱き潰そう。今も幸せ者よな。儂直々に抱擁され、死すことができるのだ」

「終わりましたよ。時間の無駄だ」

「無駄こそありはせぬ。儂らは永久。ただ積み重なるのみ。その重みに耐えうるだけの器を持つておる」

「……始めましょう」

「おうおう、そうでなければな。我が肢体も喜んでおる。心の臓が吐き出した血が、獄炎ように熱いぞ。地獄の宴だ。さあ、狂喜に舞うぞ」

「永遠の宿業を斬り裂くため」

「我が悲願を永久にせんため」

「大地が穿ち、私たちが裂かすその時まで」

「太陽が没し、儂らが昇るその時まで」

『さあ』

「踊ろうぞ」「抱きましよう」

なお（後書き）

お疲れさまでした。

## 紅茶の日記（前書き）

ついカッとなってやった。後悔している。反省もしている。完全に黒歴史orz

推敲する時、まさか自分で大爆笑するとは思ってもみませんでした。しかも、製作日数、約二週間。実稼働、大体二日強分。これだけ頑張ったのに……。ラブコメなんて二度と書きません。嘘です。気が向いたらたまには、ね。

## 紅茶の日記

心臓が張り裂けそうなほど動悸しました。胸を押さえても、治まる事を知りません。息が荒々しくなりました。これがなんなのか、良くわかりませんでした。けど、知っている気がしました。いえ、体験した事はありません。

そう、これは恐怖。

あなたを初めて見た、冬至の出来事です。

「付き合え」

暦では冬が始まり、時折吹く肌寒い風がなんだか心地良い、爽やかな朝。校門の前で告白されました。男らしい、単刀直入なセリフに惚れ惚れしそうです。ただ、同時に問題が多数発生しました。

実際は、告白なんていう生易しく、生温い未確認生物ではありません。相手の赤い髪のように暑いです。ワックスかなにかで逆立っているのです、炎にしか見えません。付け加えて、相手の頬も僅かに赤らんでいます。それは告白での緊張と高揚ではなく、鋭い眼光から感じられる怒気が証明しています。現に、胸ぐらを掴まれています。

そしてなにより、僕は男です。ちゃんとしています。中世的な顔といわれますが、そんな事はないと自負します。長身で、クールで、かつこいいです。嘘です。目指せ次世代ダンディを胸に秘める絶賛成長途中の小男です。毛が濃くなるようにと、いまだ生えないう髭や脛毛を剃っている日々を続けています。

さて相手。一言で言うなら不良です。上下共にだぼだぼな、スウェットスーツを着ています。耳にピアスが沢山ついていて痛そう。いやいや、そんなのはどうでも良い。

早い話が、いつも通り登校した僕を待ち構えていたらしいこの相

手に、カツアゲをされそうになっている、というわけです。

正直、怯えています。声が上手く発せられません。周りを見ると、他の生徒は見て見ぬふりです。中には興味を示して、携帯で写真を撮っている人がいましたが、相手の無言の眼まなこが向けられると、そそくさと校舎内に消えます。そんな方々に一言。

助けるよ、いや、本当に。

「ぼ、僕がなにかしましたか」

「したんじゃないよ。今からすんだ」

ああ、なるほど。僕はこれから万引きかなにかをさせられるんだ、と思いました。というより、それ以外に考えられません。お父さん、お母さん、すみません。あなた方の息子は、これより悪の道に引きずり込まれます。次に顔を合わせた時は、泣かないでください。代わりに思いつきり殴って、罵って下さるのを望みます。

「とりあえず行くぞ。ここじゃ色々とめんどくせエ」

正門前の細道が、悪の登竜門へ続く道に見えてなりませんでした。

初めてあなたに逢った時、声が震えるほど怖かったです。凄く、凄く怖かったです。

逃げ出したいと、この短い間で何度そう思ったでしょうか。けど、逃げる勇氣はありませんでした。だから進みました。ただ、震える脚を前に動かして。

着いた場所は、予想外にも図書館でした。コンビニの前で、なにを盗んで来い、とかいわれる心配はなくなり、ほっと一息吐きます。ですが、まだ安心はできません。いつもここに来るいけすかない人への鉄砲玉、という線も考えられます。なんらかの事情で手が出せない代わりに、僕に死んで来い、とか。良くない事しか想像できない僕を、笑ってやって下さい。

「飲まねエのか」

「あ、はい、頂きます」

語尾を弱めて、俯いたまま小さく頷いた僕は、眼の前に置かれているコーヒーの缶を見つめます。はつきりいつて飲みたくないです。なぜなら、これは相手が買った物だから。飲んだ瞬間、いくらぼったくられるか、わかったもんじゃありません。ですが、飲まないわけにはいきません。向かいに座っている相手の機嫌を損なわせるわけにはいかないからです。

ある種の賭けに勝つ事を切望しながら、僕は缶コーヒーを手に持ちます。冷たい手には、ちょうど良い暖かさだったのが、天国の光に感じました。比喻でもなんでもなく。

プルタブを開け、一口飲みます。

「おっし、飲んだな。んじゃ、本題に入るぞ」

思わず口の中に残っているコーヒーを噴き出しそうになりましたが、なんとか耐えました。恐る恐る相手に眼を向けると、僕の顔をじっと見つめていました。なんだが、切羽詰まったような、真剣な表情です。

なんだが、相談を受けているような気がして、変な感じになりました。なんともいい表せない、こっ、ねえ。

「お前に頼みがあんだ」

前言撤回。受けているような気ではなく、相談を受けさせられるみたいです。

しかし、まだ安心はできません。このあとの言葉が、金がなくて銀行を襲って来い、という可能性もまだ残っていますから。あいて風にいうのであれば、疑心暗鬼上等、です。

おどおどしながら、次の発言に対して、全力で構えます。

「あたしを女にしてくれ」

一つ間を置いて、は、と思わず疑問口調でいつてしまいました。けど反省はしていません。意味がさっぱりわかりませんので。

大体、と思いつつ、僕は目線は無意識に相手の顔から下げ、胸辺

りを見つめました。

英語の羅列が描かれている丈の合っていない厚手のトレーナーは、至る所で波打っており、女性らしい胸の膨らみが見当たりません。

「どこを見てんだ、テメエは」

「いえ、ちよつと確認のほどを」  
いって後悔しました。

意表を突き抜かれた発言で気が抜けてしまったんだ、と客観的に思うより早く、相手は机を力強く叩き、立ち上がりました。コーヒの缶を両手で握っている僕の手では出せそうもない、大きな音が鳴ります。

不意に相手が、手をこちらに伸ばしてきました。怯えまくりの僕は、身動き一つ取れないまま、右手首を掴まれ、そのまま引き寄せられます。左手で握る缶を横に傾けないように意識できたのは、奇跡だと思えます。

相手との間にある机の幅は、そこまで広くはないものの、僕は前に倒れるような姿勢になってしまいました。引っ張られたのだから当然でしょう。そしてこのあと、後頭部を相手の拳で強打されるんだ、と身体を強張らせます。が、いつまで経っても痛みは襲ってきません。なんだか手に布のような物と、申し訳程度に膨らんでいる柔らかいなにかの感触があります。

怖々と視線を上げると、威風堂々と立っている相手が、僕を見下ろしていました。そして、相手の手は変わらず僕の手を握っており、自分の胸辺りを触らしていました。わかり辛いと思うので補足すると、触っているのは僕で、触られているのは相手。ですが、立場が逆な気がするので不思議です。これがいわゆる逆セクハラ、などとかだらない事まで考えてしまいました。

「これでどうだ。あたしが女だつてわかつただろ」

「え、ええ」

「それならよし」

そういって僕の手を解放した彼女は、満足そうに座りました。腕



を組んで座る彼女には、恥じらいもなにもありません。逆に、僕がだんだんと恥ずかしくなってきました。

「なに照れてんだ、オメエ。もしかすつと、女の胸触ったの初めてか」

当たり前です。心の中でのみ、そう叫んだ。高校二年生程度で、そんなに容易く触れる代物じゃありません。彼女もいないし、と続けて叫びますが、やはり声にはしません。

意地悪そうに笑う彼女から、視線を逸らした僕は、再び両手で握った缶コーヒーを見つめます。感動も感激ない初体験です。残ったのは、恥ずかしさと若干の屈辱感と敗北感でした。

「ははっ、気にすんな。あたしも男に触らしたのは初めてだ」

ちっともそんな気がしない、といたかったのですが、砂粒ほどの僕のプライドが、口を閉ざさせました。いじけている、といった方が正しいのかもしれませんが。

「まあ、あたしが女だってわかったんならそれで良い。んでな、さつきもいった通り、あたしを女らしくして欲しいんだ」

女にして欲しいってそういう事か、と僕はこの時に初めて気づきました。

「どうしてですか」

率直な疑問をそのまま僕は口にします。

彼女は自分でそういう恰好をしていたのではなく、なんらかの事情があつてやっているのかと考えました。さつきの出来事を、早々に脳内から消去したいという動機も混ざっています。そこは彼女のため、と口実を作つて無視します。

「実はよオ。家、ちよつと変わつてる家庭でな」

彼女がいうのであれば、相当変わっているのでしょうか。口にしたら失礼なので、これも喉を這い上がる前に圧死します。

「そんでな。そろそろ周りの眼も気になり始めてきてんだ。あたしももう良い歳だし」

「良い歳つて、まだお若いじゃないですか」

「おうよ。まだ十七だ」

「高校は」

「行つてんぞ。高二だ。ちなみに今日はサボリ。お前と一緒にだな」  
そういつて彼女は相好を崩しました。僕は笑えません。学校を無断欠席なんて、生まれてこの方、一度もないのですから。

それより、あなたは僕と同級生だったのですか。知りませんでした。ええ、それこそ敬語を想わず遣っちゃうくらい。いまさらタメ口に直すなんて軌道修正する度胸はありませんが。

「ま、そういうわけで考える」  
なにを、とは問いません。いわずもがな、女性らしくなるための方法でしょう。

少し話が逸れましたが、本題は間違いなくこちらなので、忘れるわけがありません。

「そうですね」

いつて、僕は彼女を改めて観察します。

うん、男前ですね。

「現在の状態で視るに、とてもカッコ良いと思います。身長が高くて、声は低くて、僕には羨ましい限りだ」と

「身長はそんなに高くないぞ。百七十ないからな。声もお前が高いだけだろ」

「ごもつとも。」

「ですが、口調も髪形も、ある種の風格みたいのがあって良いのはじゃないでしょうか」

「それは女らしいという意味でか」

「いいえ。逆に男らしいという意味で。あ、怒らないで下さい。今は現状の整理ですから」

机を再び叩きそうになる前に、僕はそういつて彼女の行動を制しました。あと一秒遅かったら、と思うと冷や汗が流れます。彼女の腰は、もう半分以上浮いていますから。

図書館ではご静かに。

「で、その観察結果、どういった対策が浮かんだか、ぜひともご教授承りたいところだ」

腰を落として、机の上で頬杖突く彼女の機嫌が悪くなっているの  
は一目瞭然。これ以上現況を先延ばしにすると、あとが怖いので一  
案を口にします。

「僕は女性ではないので、正確無比な答えではないのを念頭に置いて聞いて下さい。あくまで、僕がこんな方が女性らしいな、と思う事をいいますので」

前置きが長い、とばかりに彼女は鼻を鳴らしました。自分でも冗長し過ぎたかなと思います。

「では何点か。一つ目。髪は染め直すと痛んでしまうので、生え変わるまで放っておくとして、あまり立てずにそのまま背に流すなり、ゴムで纏めるなりした方が良いと思います」

「垂らすと首が痒くなんだよ。縛んのもめんどくせエシ」  
立てる方が大変だろうに、と思った事はやはり口にしません。

咳を一つ、僕は言葉を続けます。

「二つ目。カッコ良い言葉遣いなのですが、女性らしくありたいというのであれば、もう少し柔らかい口調に変えると良くなると思います」

「こういう喋り方で育ったんだ。文句ならあたしの親にいえ」  
どう言う育て方をなさったんですか、あなたのご両親は。

「三つ目。大変似合っていますが、服装を少し変えてみたらいかがでしょう。上着は詳しくわかりませんが、スカートを履くなり。スマートなズボンを履くなり。大分印象が変わると思いますよ」

「動き易いんだよ、この服。着替えも簡単だしな」  
それだけ大きければ、動き易そうだし、着替えはとても楽でしょう、きつと。

「四つ目。まあ、これは完全に個人的な意見なのですが、ピアスの数を減らしてみたらどうでしょう。左右に五、六個ずつリングがついて、その上カフスマでついていると、サイボーグ化しているよう

にも見えますし。それに、ない方が高印象だと思います。もちろん、女性的な意味で」

「痛い思いをして、火で炙った安全ピン刺したのにか」  
それは自業自得でしょう。

思わず溜息を漏らしてしまいました。親のいう事を聞かない子を持つと、こういう気持ちになるんでしょうね。

頬杖突いて、そっぽを向いたままの彼女をどうしたもんか、と悩みます。すると、彼女はゆっくりと口を開きます。

「もう終わりか」

「終わりといいますか、どう説得すれば納得して貰えるかを考えている、といえますか」

この短時間で、僕は彼女に少し慣れてきたみたいです。思った言葉をそのまま口に出せました。人間の環境適応能力はすごいです。

心の底からどうでも良い事に感動していると、彼女は鼻を鳴らし、ピアスを一個ずつ取り外し始めました。全部取り終えた彼女の耳は、穴だらけでなんだか痛々しいです。続けて、彼女は髪をガシガシと掻きます。これもまた終わると、炎のように立ち上がっていた髪は、ほとんど下を向きました。つけていたワックスかなにかの影響で、寝癖のように至る所が跳ねていますが、癖っ毛みたいで、なんだか可愛らしく見えます。つい数十秒前までは、ただの怖い人だったのですが。

僕が思っていた以上に髪が長く、耳がすべて覆い隠されたのも僥倖です。

二つの工程を終えた彼女は、再度頬杖を突いて、そっぽを向きま

した。  
「とりあえず、今はこれで良いだろ」

ぼそつとそういったのを、僕ははっきりと聞きました。一語一句聞き逃しません。

やんちゃな子が成長して、いう事を素直に聞いてくれた親の心境です。むしろ、もう僕がこの人の親なんじゃないか、と錯覚しそう

です。

耳と同様に、眼が見えなくなってしまうたのは残念ですが、彼女の横顔を、とても愛らしく思えてきました。いえ、実際彼女の顔立ちは元々とても綺麗だったんじゃないか、と一時間ほど前までの記憶を遡り、思い出してみればそうだった、という結果が出ました。

過去の映像が今に近づくと、意識せずに、彼女の胸を触った事も思い出してしまい、慌てて持っているコーヒーを飲みました。大分ぬるいですが、右手の感触は、何故かスチール缶ではなく、布と、その先にあつた柔らかいものを再現していて、顔が赤くなり、俯いてしまいました。

「なに顔赤くしてんだ、オメエ」

「な、なんでもありません。決して、はい、本当に、絶対」

何度同じような意味の言葉を口にしてているんだ、と自分に突っ込みたくなりました。顔は上げられません。今更ここまで恥ずかしくなるとは、予想外でした。もっとというと、校門でこの人に絡まれたり、意味不明な相談受たり、今までにない体験をしたな、としみじみ感じます。一部ハプニングもありましたが、刺激のある時間だった気がします。そして、それがもう少し続くと思うと、なんだか楽しくなってきました。

と、不意にある疑問が脳裏を掠めました。

「そういえば、どうして僕にこんな話を？ 内容から、もし相談するのであれば、女の子の方が良いと思うのですが」

「女はビビって、声をかけただけですぐに逃げ出す」

校門で、彼女に睨まれて逃げた生徒を思い出して納得します。ですが、僕も怯えていました。今だからいいですが、家を出る前にトイレで用を足していなかったら、と思うと恐ろしくて想像すらできません。冗談抜きに。だつてさ、怖かったんだよ。

「そんなんはどうでも良い。行くぞ」

「どこにですか」

すでに立ち上がってしまった彼女は、背を向けたまま僕にいいま

した。

「お前がいったんじゃないか」

なにをでしょう。

「服がどうのつてよオ。だから、これからあたしん家行く」

「い、いえ、僕が行っても。そうだ。お母さんに見て貰えば良いんじゃないんですか」

「母親を見て育った結果がこれだ」

ぐうの音も出ません。彼女のお母さん、あなたは一体なにしているんですか。

淡々と歩いて、離れていく彼女の背を眺めながら、肩を竦めてそんな事を思うと、一つ聞いていないのに気づきました。

「あ、すみません。ちょっと待って下さい」

席を立った僕は、椅子を戻して、学校指定のバッグと缶コーヒ―を持ち、競歩の選手のように急ぎ足で彼女に近づきます。走ると足音が響くので恥ずかしいから、できるだけ歩く。

彼女が呼び止めに応じてくれたおかげで、すぐに辿り着きました。なんだかんだで優しい人なんだ、と改めて思います。

彼女の真正面に立った僕は、赤い髪で眼が見えなくなった彼女の顔を見ながら、気づいた事を口にします。

「僕、蒼風 玲央っていいいます。お名前、まだ聞いていなかったですよね」

名乗った僕を、少しの間、彼女は黙って見下ろしていました。身長的な差で、だけど。ですが、次第に彼女の口端が持ち上がりました。笑い声も徐々に漏れ出します。

名前を笑われたのは初めてで、僕は戸惑いました。突然肩を叩き出しました。もちろん、僕の。ただでさえ小さいのに、さらに縮みそうな勢いです。感想をいえば、撫で肩になるくらいに痛い。

「奇遇だな。いや、奇遇だ」

「な、なにがです」

「いや、これを奇遇といわずして、なんというんだ」

そういつて、一頻り笑う彼女に、肩を叩かれ続けた僕はもう涙眼です。恥ずかしながら、数滴零れました。頑張つて眼を瞑っていたのですが、無念です。

ようやく暴力から解放された僕が肩を擦っていると、彼女は自慢げに、自分の胸に親指を当てました。さっきの感触は忘れる、あれは夢だ、そうに決まっている、と自分に言い聞かせて、顔が赤くならないよう堪えます。無理です。

「あたしの名前はな、獅子だ。赤羽 獅子。面白いな。お前とあたしの名前をくつつけて訳すと、蒼い風に乗って、赤い羽根の獅子が二頭、空を飛んでるってわけだ。こいつはア傑作だ」

「ああ、なるほど」

いわれてみれば確かに面白い。けど、そこまで笑うほどかと疑問が湧きました。それ以前に、女の子の名前で獅子つて。日本人の名前としても違和感を覚えます。恐らく、赤羽さんの母親のネーミングセンスの問題でしょう。ですが、僕が人の名前に口を出す事はできません。玲央つて、絶対現代の人が外国人の名前のレオに、無理やり漢字を当てたようにしか思えません。

「おかしな偶然もあるもんだなア」

「そうですねえ」

笑い過ぎて涙が浮かんだ眼を、赤羽さんは指で拭きます。その時に見えた彼女の眼は、本当に無垢で、鼻筋が通って輪郭の線が綺麗な顔に、溜息が零れるほど良く似合っていました。見惚れてしまった、という事です。

「どうしたよ」

「い、いえ、なんでもありません」

「そうか。まあ良いや。行くぞ、玲央」

今日出逢ったばかりで、ついさっき名前を教えたばかりの赤羽さんに、最初から名前を呼ばれても嫌な気はしませんでした。恐らく、校門での出来事がインパクトあり過ぎて、赤羽さんの言動に慣れてしまったのだという事もあります。それを除いても、不思議な魅

力のある女性だからだと思えます。僕が想像する女性という架空の人物とは、進んでいる道が斜め四十五度くらい違いますが。

「はい」

自分でびっくりするほどの音量で返事をした僕に、八重歯がむき出しの笑みを赤羽さんは向けてくれました。

手の感触は、今でもはっきりと覚えています。恥ずかしかったです。

そのあと、少し話しましたね。机を挟んでいたとはいえ、空気を伝って、動悸が聞こえているんじゃないかと、心配でなりません。けど、照れを必死に隠しましたが、あなたは気づいていたと思います。そう思えるシチュエーションが何度もありましたから。

「あ、あの、赤羽さん。何度も同じ質問で申し訳ないんですが、本当に赤羽さんのお家に僕がお邪魔しても良いのですか」

「獅子で良いってんだろ。それに、本当に何度その質問してんだ」

「恐縮です」

二つの意味を込めて僕はそういいました。

一つは名前を呼ばない事。初対面の女性の名前を、いきなり呼ぶのには流石に抵抗があります。へたれですみません。

もう一つは、くどさの件。この質問は、ゆうに十を超えていると思います。

だって仕方がないじゃないか。女の子の家に行くなんて、小学校低学年振りなんだ。しかも、クラスの三分の一ほど呼んだパーティでだよ。個人的に行くのなんて初めてなんだからさ。マンガみたいに幼馴染がいたわけでもないんだ。

失礼、取り乱しました。



現状は、図書館を出て、空になった缶を捨てつつ数十分ほど歩いた、といった感じです。当然僕は赤羽さん宅を知らないの、後ろについて案内して貰っています。決して、パシリではありません。すれ違った人にそう思われた可能性を否定しませんが、決して違います。

「ここだ、ここ。今更逃げて帰んなよ」

逃げるどころか、ここで心臓を吐き出して死にそうです。血反吐くらいならすぐに出せそうです。ですが、赤羽さんのご迷惑になりますし、なにより父さんや母さんに心配をかけたくないので、じつと耐えます。そして、赤羽さんの家へ視線を移しました。

とくにいう事はありません。二階建ての普通の家だからです。今風で、若干洋式染みた極々普通のお宅。リアクションの取りようがありません。

「別に荘厳でも、瀟洒でもなんでもない、ふつつつの家だろ」

「はい」

「だろ。だからお前が遠慮する事はねえんだよ」

僕の背中に張り手一発、彼女はご機嫌な様子で家に歩き出しました。仰け反り、歯を喰いしばって涙を流さないようにしながら、僕は彼女に続きました。叫び声を上げながら地面でのた打ち回っている方がどれだけ楽だったか。

「おい、帰ったぞ」

赤羽さんの勇ましい挨拶に戸惑いつつ、僕も小さく、お邪魔します、と呟いた。

「誰かいねエのか。客だ、客。茶でも用意してくれ」

「い、いえ、赤羽さん。そんな事しなくても」

「獅子で良いって何度いわせんだ」

「すみません。いえ、そうではなくてですね」

抗議が終わる前に、玄関からすぐ左の部屋で、スリッパの音が鳴り出したのを聞いて、僕は色々な事を諦めた。

「お帰りなさい、獅子ちゃん」

ガラスが升目状にはめられているドアから出てきたのは、とても可愛らしい女性でした。腰まである長い黒髪を背に流し、切れ長の眼をしている赤羽さんとは反対に、大きく、丸い眼をしています。スマートなズボンや上着を着用していますが、着物を着て、牡丹の花がついたかんざしを挿したら、それだけで見事な大和撫子になりそうです。見た目、二十歳か、前後くらいに見えますので、恐らく赤羽さんのお姉さんなのでしょう。

一礼をした僕に、お姉さんもにっこりと微笑んで返してくれました。ですが、どこか浮かない顔でお姉さんは、赤羽さんを見つめます。

「んだよ」

「あなた、獅子ちゃん」

「だからなんだよ」

お姉さんは、眼を擦って赤羽さんを見直します。もう一度同じ事をします。今度はかぶりを振りました。そこまで勢いをつけたように見えませんでした。若干眼を回したみたいで、眉間を指で摘み見直します。

「あたしが髪を下ろしたら、そんなに变かよ」

声のトーンを落として赤羽さんがさういうと、お姉さんは完全な円に限りなく近くなるほど眼を見開きました。そして、なんだか嬉しそくに頬を緩め、口元を両手で隠した。

「あらあら、いえいえ。フフフ」

「気持ち悪い声で笑うな」

「だって、あの獅子ちゃんが。フフ。お父さん。獅子ちゃんが女の子になった。どうしよう。すっごく可愛い。久しぶりにお友達も連れてきているし、今日はお赤飯にしましょう」

喜々として部屋に戻りながら、お姉さんはそんなことを口走りました。本気で止めて欲しいです。

横眼で赤羽さんを見ると、彼女は額に手を当てて溜息を吐いていました。

「あんのクソ兄貴」

自分の耳を疑いました。腐っているんじゃないかと、耳を軽く叩きます。正常でした。いえ、そんな事、きつとありません。きつと空耳です。

「玲央、兄貴がうつせエから早くあたしの部屋に行くぞ」

聞き間違いではありませんでした。絶望しかありません。僕自身、よく女顔とも、男らしくないともいわれますが、あの人はおかしい。絶対に性別を間違えて生まれたんだ。そうに違いない。

ぶつぶつと自分の世界に入っている僕を、赤羽さんは担いで連れて行ってくれたと、彼女の部屋で自我を取り戻した時に聞きました。靴まで脱がして貰ったらしく、自己嫌悪に陥りました。でも、あの人が、赤羽さんのお兄さんが悪い。なんで男の人なのにあんなに可愛いんだ。下手をすれば、違う世界の住人になるところだったじゃないか。

勝手に解釈した事によって生まれた鬱憤を晴らす場所は、僕の脳内データに登録されていませんでした。

「落ち着いたか」

「はい、また飲み物を頂いてしまつてすみません」

「アホか。そこはすみませんじゃねエ。ありがとうございます、だ」

「ごもつとも。では改めて、ありがとうございます」

「おう、敬え、奉れ。我を崇めよ」

満足そうに赤羽さんは胸を張りました。冗談だと僕がわかりやすくするために、ガキ大将が威張る時のような笑みを浮かべています。

眼の前に置かれているカップを手にとって、僕は真つ赤な紅茶を口に含みました。コーヒーならよく飲むのですが、紅茶はペットボトルで売っているミルクティーしか飲まないのです、善し悪しがわからないのですが、とりあえず苦かったです。

「飲んだあとでいうのもなんだけどよオ。砂糖とミルク、入れなくて良かったのか」

「この香<sup>かぐわ</sup>しい芳香を損なわせないためには、ストレートが一番ですよ。透明感のある赤で眼も楽しめますし、このままで大丈夫です」  
なんとなく蟻の脚先ほどしかない意地を張ってみました。理由はなんとなく。こじつけるなら、多少の知識自慢でもしたかったんじゃないか、といい終わったあとに思いました。

「ふーん」

前屈みになって、ガラステーブルに頬杖を吐いた赤羽さんは、適当に髪をわけて見えるようになった眼を、意地悪そうにさせました。嫌な予感しかしません。

「なら聞くけどよオ。それに使ってる茶葉、当ててみな」

「すみません、にわか知識です」

「だろうな」

カカカッ、と笑う赤羽さんは、ただのインスタントだ、と答えを教えてくださいました。

物凄い自爆です。慣れない事をする、ろくな目に遭いません。

「ついでに一つ、どうでも良い豆知識をお前に教授してやる」

「なんですか」

「紅茶に限らず、茶の大本は中国だったのは知ってるな」

「そうだろうなあ、程度ですが」

「十分だ。で、その茶は、前漢といつてな、紀元前に劉邦が作った漢時代に生まれた。知ってるか、項羽と劉邦で有名な片割れだ」

「頭の隅の方ですが。確か、四面楚歌や、雌雄を決する、なんて言葉を創ったのが項羽と劉邦だった気がします。えっと、他には、三国志より前の時代ですよ。たしか、魏、呉、蜀ができたのは後漢だったはずですから」

「そうそう。でだ、前漢の時代。項羽と劉邦がもう死んじまってる、約紀元前五十九年前。そんぐらいに茶つてのは生まれた。現在で見つかっている記録によれば、な。中国じゃ、四千年前なんていわれ

てるが、証拠はないから省く。少なくとも、三国志時代には既にあったしな。そんな時は、かなり高級品だったみてエだけだよ。演義なんかじゃ、劉備が母親のために茶を買う、なんて話もあるくれエだ。本当かどうかなんて知んねエけど。ま、演義なんてのは、所詮作り話だから、あんま信用なんねエ。読んてる分には面白いけどな」  
相槌を打つ代わりに、僕は首を小さく上下させていました。こつても嬉しそうに語られると、こつちまで伝染してきます。

話を聞きながら、視線を彼女の背にある本棚に向けると、今出た項羽と劉邦や三国志、他にも水滸伝などといった中国歴史小説。上杉謙信、武田信玄、坂本竜馬などなど、日本の著名人の名がタイトルになってる日本歴史小説。それらが、ずらっと並んでいました。結構な量です。暇な上に、気が向いた時にしか本を読まない僕には、とてつもない数に見えました。

よほど群雄割拠の時代を描いた本が好きなのでしょう。教科書程度しか知らない僕なのですが、赤羽さんに感化されて、読みたくなってきました。

「オメエも読んだ事あんだろ、三国志」

「いえ、小説は読んだ事ありません。学校の授業で習った程度です。ですが、今すごく読みたくなりました」

「そっか、なら帰りに何冊か貸してやるよ。で、話は逸れたけどな、茶ってのはそんぐらい古くからあんだ」

「イエス・キリストより生まれたのは早いですしね」

「そうだ。んで、今までの話は前フリという名の予備知識で、これから本題だ。茶が生まれたはずとあと、大体千六百年頃に茶疏ちやそつて本ができた。そんな中で、飲時いんじつて題で詩がいくつか書かれてんだよ。その一つに、風が穏やかで天気が良い時つてあんだ」

「つまり、今日つて事です」

頷くでもなく、赤羽さんは穏やかに頬を緩ましました。お兄さんの笑みとそっくりです。

大人びたこんな表情もできるんだ、と内心驚きました。

「そんだけで茶つてのは美味くなんだ。ある意味最高の贅沢だぜ。金じゃ、天気は買えねエからな」

まったくもってその通りです。当たり前だけど、毎日が晴れて、風が大人しいなんて事はありません。たったそれだけですが、大変得難く、とてもかけがえのない一時です。

ふと、彼女前にあるカップを手を持った赤羽さんは、オレンジのカーテンが開いた窓の外を眺め、紅茶を喫しました。ソーサーに置き、子供っぽい笑みを浮かべていいいます。

「な」

笑みという一つの単語ですが、それをここまで使いこなす赤羽さんに影響されて、僕まで笑顔になります。

同じように僕も外を向いて紅茶を頂きます。気のせいかもしれませんが、さつきより美味しくなりました。苦味は減っていませんが、渋い顔をしてしまったのを、赤羽さんに見られてしまいました。

「お子ちゃまな玲央には少し早かったようだけどな。これであたしの講義は終わりだ」

というのが早いか、彼女は軽そうな腰を上げ、立ち上がりました。「砂糖とか取ってくる。飲み終わったら例の件、頼むぞ」

頷いた僕を確認した赤羽さんは、そのまま廊下に消えました。閉まったドアにお辞儀します。すみません。完全に忘れていました。

残された僕は、どうしたもんか、と考えて、本棚に移動しました。貸しても良いつていうぐらいですので、今少し読ませて貰っても問題ないだろう、という図々しい思考回路が働いたからです。

一通りタイトルを流し読みしてから、一番右上にある、太公望というハードカバーの本を抜き出しました。右上から左下に向かって、時代順に並べられているようなので、一番古い作品からが良い、と思っただからです。

と、抜き取った本の奥に、手帳のような物が落ちているのが見えました。赤羽さんの部屋は、いつてはなんです、想像以上に綺麗なので、意図的に置かれているとすぐに判断し、触れないようにし

ます。プライベートに、しかも女性の個人的な物に深入りしてはいけないと、全身が警告したからです。見ざる、知らざる、触らざる。後ろ二つは違いますがね。

元の場所に戻り、腰を落ち着かせた僕は、本を開きました。刹那、ノックもなしに部屋のドアが開きました。

「お疲れ様です、赤羽さん」

本人が現れる前に、僕がそういうと、ドアを開けた人は入ってきました。少なくとも、赤羽さんではなく、僕は口にした発言を訂正したくなりました。この家にいるので、赤羽さんで間違いのないのでしょうか、恥ずかしいものは恥ずかしいです。

「いや、別に疲れるような事はしていないけどね」

頭を掻きながら遠慮がちに入って来たのは、僕より少し大きいぐらいの男性でした。ですが、顔はいかにもな童顔で、個人的な見解では、僕より年下に見える事もあります。赤羽さんの弟さんでしょうか。お兄さんがあれで、赤羽さんがあれなので、この人は、普通の男の子であってくれ、と祈ります。

「正面に座っても良いかな」

「あ、はい、どうぞ。僕なんかにお気を使わず」

「君は礼儀正しい子だね」

「いえ、そんな。普通ですよ、きつと」

自分より年下かもしれない子に、礼儀正しい子、といわれると、嬉しいような悔しいような、複雑な気分になります。少し仕返しにと、彼が腰を下ろした瞬間、僕は訊ねます。

「あの、失礼かもしれませんが、あなたは男性、ですか」

「うん、私は本当に男だよ。息子と娘があれだからね。疑問に思うのは無理ないよ」

嫌味にならない、朗らかな笑い方をする人でした。それより、彼からの口からも、ある意味、聞いてはいけない言葉を耳にしてみました。気がします。

「度々申し訳ありません。もしよろしければ、お歳をお聞きになっ

ても宜しいでしょうか」

「私のかい。確か、先月の末で四十になったところかな。いや、年々時間が過ぎるのが早くなってるね。光陰矢の如くとは、本当に正鵠を射てるよ。もう私も初老の仲間入りだしね」

見えません。

ライオンの咆哮以上に、その声を上げたくありませんでした。しかし、それ以前に彼は赤羽さんの父親。不法な振る舞いはできません。

改めて背筋を伸ばして、僕は頭を下げた。

「赤羽さんに誘われてお邪魔致しました。僕は、蒼風 玲央と申します。先程の無礼の数々、平にご容赦を」

「ずいぶん重厚な挨拶をするね。君は娘の友達なんだ。そうだね。

例えば、三国志の劉備、関羽、張飛の三人は契りを結んで、義兄弟になった。昔の中国は、相手の技量や度量を共に認めたら、いつでも義理の兄弟になれるんだ。獅子が友達を家に誘うなんて幼稚園振りだから、玲央君はきっと友達として認められているはずだよ。君はどうだい」

「えっと、正直にいいますと、赤羽さんとは今日初めて出逢ったばかりです。でも、素直で良い子である事は、既に承知しております。彼女が僕を友達と思ってくれるなら、僕も彼女と友達です。それだけ、はつきりと申し上げられます」

「うん、それは私にとっても嬉しい事だ。でね、例えの話を戻すと、君たちはお互いを認め合った。つまり、義兄弟として充分成立するんだよ。もっというなら、私は獅子の父親であり、玲央君の義理の父親となったわけだ。自分の家と違ってくつろいで欲しいと、切に願うよ」

「あ、ありがとうございます」

頭を下げつつ、僕はお礼を口にしました。現状を理解できない事が、今日だけで何度あるだろうか、と不思議な縁を感じずにはいられません。

「よし、ならくつろぐための第一歩。まずは頭を上げよう。実は私、



あまり人に頭を下げられた事なんてないから、戸惑っているんだ。妻を筆頭に、頭を下げればっかりだから」

僕も同意見です。頭を下げられるくらいなら、下げた方が気分的に楽なので。

頭を上げると、変わらない表情で、お父さんは座っていました。ただ、なにを話したら良いのやら、さっぱりわかりません。煙が出るほど脳みそを回転させて、そういえば、と僕はいいいます。

「さつき、三国志で例え話をしましたよね」  
「したね」

「赤羽さんの歴史小説好きって、もしかしてお父さんから受け継がれたのですか」

「ううん、私はどちらかというミス터리分野が好きなんだ。

歴史は妻の方。ちなみに、麒麟は、獅子の兄は、私と同じミス터리。獅子は知ってるの通りってわけさ」

「綺麗に別れたのですね」

「まあ、私や麒麟は嫌いってわけじゃないんだけど、妻と獅子は頑固でね。変に頭を使う小説なんか読めるか、って断固拒否するんだ」  
「想像できます」

眼に浮かぶとは、この事でしょう。僕とお父さんは二人して苦笑しました。

それにしても、ようやくこの一家が少しだけわかりました。お兄さんはお父さん似で、赤羽さんはまだ見ぬお母さん似。それがわかっただけで、少し気が楽になります。これ以上の驚きはほとんどなくなりましたから。

「ところで、私からも質問したいんだけど、良いかな」

「僕に答えられる範疇であれば、いくらでも」

「ありがとう。それで質問なんだけど、玲央君は、今日獅子と初めて逢った、っていったよね」

「はい」

「なんで獅子が君と逢って話したのかな。玲央君の制服を見る限り、

獅子の通っている高校とは違つようだし」

「なんでも、相談したい事があつたそうです。僕が普段通り校門を抜けようとしたところ、赤羽さんに捕まり、そのあと図書館で少し話しました。流石に最初は怖かつたんですが、もう慣れましたね」

「君に相談、か。内容はもう聞いたのかい」

「ええ。ですが、僕の口からお話する事はできません。赤羽さん本人から許可を頂かない限り、道徳に反しますから。申しありませんが、ご了承のほどを」

間違つた発言をしたつもりはありませんが、お父さんはなにやら考え込んでしまいました。読心術がない僕に、文字通り、心を読む術はないので、なにを考えているのかわかりません。失礼な事でもいったらうか、と内心冷や冷やしています。平静を保とうと、力を入れている顔が攣りそうです。

お父さん、早く次の言葉を下さい。僕の顔が破裂します。変な汗が出そうです。

「なるほど。良くわかつたよ。ありがとう。君の人柄についても少しわかつたから、私はこれで失礼させて貰おうかな。もう少しで獅子が暴れ出すだろうしね」

立ち上がったお父さんを見て、心底安堵した僕は、全力で顔の力を抜きました。ですが、最後の言葉を聞き逃すほど脱力していません。なに朗らかな表情で恐ろしい事いつているんですか、お父さん。「クソ兄貴。さつさと砂糖出しやがれ。冷めちまうだろうが」

一階から響く赤羽さんの怒号。耳元で叫ばれているように、よく聞こえます。今から予想する赤羽さんの行動で最悪なパターンは、僕に八つ当たりする、これに限ります。対して僕が取る行動でいま最も有効的なパターンは、お父さんを仲間に引き入れる事。

「あの、お父さん」

「じゃあ、また今度ゆっくり話そう。じゃあね、玲央君」

僕がいい終えるより早く、お父さんはほぼ一息で喋り、脚早に姿を消しました。窮地で仲間に裏切られた心境です。

残された子羊の僕は、手を伸ばしたまま固まり、狼の赤羽さんに喰われる覚悟を密かに固めました。けど、やっぱり怖いものは怖いので、気持ちを落ち着かせるために苦い紅茶を一口飲んで、テーブルの上に放置していた本を読み始めます。

「たく、あのボケ。なに考えて隠してやがったんだよ、クソが」  
一階にも響きそうな音量で暴言を吐きながら、赤羽さんが戻ってきました。女の子がクソとかいったら駄目です、と考える僕は古い人間なのでしょう。

赤羽さんの神経をできるだけ逆立てないように、彼女の方へ僕はゆっくりと振り向きます。手には、ガムシロップとミルク、それと掻き混ぜる用の細いガラスの棒がありました。

「待たせたな」

「いえ、それより、なんだかお疲れ様です」

「ん、聞こえたのか」

「えっと、はい」

あれだけ大きければ、といえるはずもなく、とりあえず視線を本に戻します。長い間、今の赤羽さんを見続ける勇気なんてありません。

「お、もう読み始めたのか。持って帰って良いつつたんだから、家でのんびり読めば良いのによオ」

口調とは反対に、赤羽さんの機嫌はそれほど悪くありませんでした。胸を撫で下ろします。もちろん、頭の中でだけで。

ガムシロップとミルクを僕の前に置いた赤羽さんは、さっきお父さんが座っていた元の場所に座りました。

「そんで、なに読んでんだ」

頂いたガムシロップとミルクを遠慮なく紅茶に入れながら、僕は答えます。

「太公望という小説です。歴史順に読もうかと思いましたが」

最初は、へー、といった赤羽さんでしたが、突然血相を変えて本棚を見ました。続けて僕を睨みながら立ち上がりました。

「見たのか」

髪の色みたいに顔を真っ赤にさせて、そう叫んだ彼女の言葉が僕には良くわからないまま、手と顔を横に勢い良く振りました。

「み、見てません」

いいながら、僕は本棚になにかがあるか思い浮かべます。

歴史小説以外はなかったような気がしますが。いえ、ありました。太公望の後ろに見えた手帳のような物。やはりあれは意図的に置いていたのでしょうか。予想するに、日記の類だと思えます。

「本当か」

「本当です」

自然と僕の声も赤羽さんに合わせて、大きくなってしまいました。若干後悔します。

「そうか」

信じてくれたらしい赤羽さんは、力を抜いた勢いそのまま座りました。座布団があるのに、僕のお尻まで振動が伝わりました。

「本当だろうか」

今度は低い声で、赤羽さんはそういいました。完全には信じていなかったようで、髪の間から覗く切れ長の眼を僕に向けています。いわゆるジト眼です。これには、怖さは感じられず、なんだか微笑ましくなりました。

「本当ですよ。嘘を吐く道理がありません」

「そうか」

まだ訝しげな様子の赤羽さんは、おもむろにカップを手に取り、紅茶をグイッと飲みました。ガムシロップとミルクを入れ終えていた僕も、簡単に混ぜて喫します。ちょうど良い甘さで、問題ありませんでした。むしろ、僕好みの味です。

残り半分くらい残っていたのですが、一気に飲み干してしまいました。

「ご馳走様でした」

カップを置いた僕は、手を合わせて赤羽さんにお礼をいいました。

赤羽さんも飲み終えていたようで、カップは二つとも空になります。

「お粗末様だ。んじゃ、始めるぞ」

一瞬間をおいて、僕は、ああ、と呟きます。

この家に訪れた理由を完全に忘れていました。二度も忘れるなんて不覚ですが、常人には刺激が強過ぎる体験をしていたので仕方がない、と自分にいい聞かせます。それに、僕がいなくても問題ないですし。

テーブルに手を突きながら立ち上がった赤羽さんに、その点を伝えます。

「あの、僕ではなく、お兄さんに見て貰えれば万事解決ではありませんか。お兄さんなら女性物の洋服とか詳しそうですし」

玄関で見たお兄さんの服装は、僕の知識に誤りがなければ、膝丈のスキニーデニムに白のシャツ、上に黒のロングカーディガンを着用していましたが、違和感を覚えませんでした。当たり前ですが、女性としての眼線ではなく、男から見た印象で、ですが。

「あれにあたしが頭を下げると思ってるのか」  
僕にも下げてませんが、赤羽さんは心底嫌そうです。今にも唾を床に吐き捨てそうなほどです。

「絶対嫌だかな」

「そこまでですか」

「当たり前だ。玄関で兄貴が取った反応、見なかったのかよ」

いわれてみればそうでした。髪を下ろしただけの赤羽さんにずいぶんと驚いていましたので、家の中でもずっと今朝と変わらない姿だったんでしょう。定着した印象は難しいです。共にいた時間が長い家族なら尚更でしょう。相手がどうこうではなく、自分の気持ちの問題ですし。

「わかったか」

「はい。ですが、それだと問題があります」

「なにがだ」

「だって、服がないじゃないですか。赤羽さんは持ってますか」

言葉を詰まらせる赤羽さんを見て、やっぱり、と僕は呟きました。

「お兄さんに借りるのは、僕も難しいと理解しましたし」

「なら、買いに行くぞ」

「お金、ありますか」

「ない」

「威張りながらいう事ではないかと」

あと、僕も持っています、と付け足します。

短く唸り声を上げた赤羽さんは、腕を組んでは考え始めました。

人差し指で、二の腕をとんと叩いています。不規則に顎を上げて天井を見たり、逆に俯いたりもします。胡坐を掻いている脚を、貧乏揺すりさせたりもします。

不謹慎ですが、見ていて楽しいです。良い考えはないかと考えつつも、赤羽さんの様子を観察します。

しばらくこの状態を満喫していると、考えが纏まったらしい赤羽さんが口を開きました。

「よし、オメエは今日帰れ。んでもって、今週の土曜にまた家来い。そんなまでに金、用意すつから」

「僕は大丈夫ですが、当ての方はあるのですか」

「なんとかなるだろ。とりあえず、三日後の土曜。そうだな、大体九時頃にここで待ち合わせな」

「わかりました。なら、僕の方でも、どの辺で買ったら良いか調べておきますね」

「おう、頼んだ。できるだけ安いところだな。あたしも多少は調べておくからよ」

「はい」

大雑把な予定を頭に入れて、僕はこの日、大人しく家に帰りました。帰る前に、赤羽さんから携帯番号も教えて貰ったので、なにか問題が起きてても大丈夫でしょう。ただ、学校をサボったのがばれて、僕の母さんに怒られた事は報告できませんでした。

怒られながら、お父さんやお兄さんに挨拶ができなかったの思い出しましたが、それは次に行った時にでも改めてしよう、と思いました。

小一時間みっちり怒られた僕は、消沈したまま自分の部屋に戻って、パソコンの前に座りました。買い物先を探すためです。どんな服が赤羽さんに似合い、どんな色を好みそうか、起動中に考えます。例えば、女性の洋服を自分が真剣に考えるなんて初めてで、なんだか照れ臭くなりました。でも、それ以上に楽しみです。赤羽さんがどう変わるか、それを考えただけでわくわくします。

学校のバッグから、太公望とタイトルが入っている本を取り出します。次に会う日まで日数が少ないので、この一冊だけ借りました。本を眺めながら今日一日を振り返ります。うん、果てしなく色々あった日だなあ、と改めて感じます。それ以上に面白かったです。

「次に逢ったら、なにを話そうかなあ」  
いいながら、僕は自分で見たくないほど顔を緩ませました。

良く笑った一日でした。楽しかったです。最初は怖くて、恥ずかしい思いをして、それでも愉快な一日でした。また逢えると思うと、今からその日が待ち遠しくなります。幼い頃、参加する行事の前日は眠れない、というのに良く似ています。

本当に楽しみです。心から、本当に心からそう思います。この気持は嘘ではありません。

授業がすべて終わり、部活をやっていない僕は、残すところ帰るだけとなっていました。寄るべき場所もないので、真っ直ぐに家へ向かう予定でした。帰ったら、明日となった赤羽さんの買い物情報再度チェックし、内容を整理してプリントアウトしようと考えていました。ですが、校門で見知った方に呼び止められました。

「や、こんにちは、玲央君」

片手を上げて僕にそう挨拶したのは、赤羽さんのお兄さんでした。艶やかな黒髪を揺らすこの人は、変わらず綺麗で可愛らしかったです。男の人だけど。

「こんにちは、赤羽さんのお兄さん」

「麒麟で良いよ。もう名前を教えたくて、お父さんから聞いてる。獅子は私の名前を覚えていなかったみたいだね」

少し考えてから僕は頷きました。

赤羽さんは、もう赤羽さんと呼んでいるので、お兄さんの事まで名字で呼んだら、僕も二人もわけがわからなくなります。

「ところで、麒麟さんはどうしてここに。お知り合いでもいるのですか」

「ううん。今日は玲央君に逢いに、ね。少し話があるんだよ。まあ、歩きながら話そうか。近くに落ちつける店があるからそこまでね。

今日はお兄さんが奢るからさ」

獅子さんが、自分の事をお兄さんというと、多大な違和感を覚えますが、そこは突っ込みません。

「わかりました」

「素直で宜しい」

赤羽さんが紅茶を喫したあとに見せた、大人びた笑み。それに酷似した優しい笑みを、麒麟さんは浮かべました。思わず動悸させられます。悔しさより、照れの方が上回るほどです。

失礼を承知でいわせて貰うなら、男性であるのが、大変残念です。

十数分ほど歩いた僕らは、麒麟さんが案内してくれたお店の中で、他愛のない世間話をしていました。

内容は、話題のレパトリーが少ない僕をフォローしてくれる形で、麒麟さんが色々話してくれました。面白い本や流行っている話などです。世事に疎い僕でも、わかりやすく教えてくれました。時



々ユーモアを挟む話術に隙などなく、退屈する事はありません。いつそ、僕の講師になつて欲しいくらいです。

中でも面白かったのは、ご家族のお話です。

「お父さんは一応小説作家でね、いつも家にいるんだ。玲央君がきた時も平日なのに家にいたでしょ」

「作家さんでしたか。凄いですね」

「うん、私の憧れ。それで、お母さんはベテランのトラックの運転手でね、いつも家にいないからお父さんが家事をしてる。だから、兼業主婦もしてるってわけ」

「それじゃあ大変なのは」

「だと思つてしょ。けど、お父さんはパソコンの前で文字を打つより、料理や洗濯をする方が好きみたいで、私には一切合切家事をさせないんだ。お母さんはお母さんで仕事一本の人だから、夫婦の関係が逆転しちゃつてる。逆転夫婦つてやつかな。二人ともそれで満足しているから、子供としては良いんだけどね」

「ええ、互いに嫌悪しあつて、一緒にいるのも辛いつて関係よりはずっと良いです」

顔を見合せながら、僕たちは笑い合いました。校門から絶える事はありません。儂げで、眩しい麒麟さんの微笑みには、人を癒す力があります。少なくとも、僕は穏やかな気分になりました。

「えらく楽しそうに話すじゃない、麒麟」

コーヒーを二杯運んでくれたウェイトレスの女性が、気楽にそう話しかけました。彼女は美琴さんで、なんでも、麒麟さんの彼女さんらしいのです。失礼ながら、呆然とするくらい驚きました。

「楽しいんだから当たり前だよ」

「ごもつともなご意見、ありがたく承ります」

「ご丁寧にどうもありがとう」

そういい合つて、二人は慣れた様子で、またね、と話を終わらせました。仕事に戻る美琴さんの背を、僕は見送ります。

染めてない彼女の黒い髪は、雲みたいにふわふわしていて、肩辺

りで揺れていました。

「と、まあ、キリが良くなつたし、前置きはこのくらいで良いかな」視線を戻すと、麒麟さんはコーヒを飲んでいました。カップから見惚れるほど艶やかな唇を離し、溜息を溢します。

「相変わらず、このコーヒは美味しくないなあ」

なんとも答え難い言葉に、僕は苦笑する他ありませんでした。

「閑話休題。本題に入ろうか」

背筋を伸ばした麒麟さんの表情が、一変して険しくなりました。

微笑みの絶えない、穏やかな印象の方なので、このような姿を見ると、子を叱る前の母親のように見えます。男の人はずなのですが、いい切る自信がなくなります。

明らかに空気が変わり、思わず僕も姿勢を正しました。

「獅子ちゃんの事なんだけど、良いかな」

「赤羽さん、ですか」

「うん。知つての通り、私や獅子ちゃんって、普通とは少し違うでしょ。容姿とか、性格とか」

頷く事に躊躇いを覚え、僕は眼を逸らしてしまいました。

はつきりと答えなかつた僕の行為を予想できていたらしい麒麟さんは、柔らかな口調で続けます。

「優しい子だね。でも、私自身、皆とは違つて理解して、納得できているから大丈夫。けどね、私、実は友達が少ないんだ。美琴は初めての友達で、初めて私を理解してくれた人。だから好きになつた」

にわかには信じられませんでした。

確かに、外見は見事なまでに女性っぽい麒麟さんですが、それだけで周りから除外されるなんて、想像できません。一緒にいて不快になるような事ありませんし、むしろ、居心地が良いです。

無意識のうちに、麒麟さんを見つめていました。彼は、微笑んでいます。悲しみを必死に耐えて、無理やり浮かび上げている、痛々しい表情でした。

「変な眼で見られるのには、もう慣れてるけどね」

「そんなはずはない、と彼の顔を見れば一目瞭然です。だから僕はこういいます。」

「実はですね、僕も友達が少ないんです。人見知りが酷いし、流行には鈍重ですし、話を振って貰わなきゃ人と会話をするなんてできませんから。いや、お恥ずかしい限りです。きっと、ダメな部分だけ上げるなら、麒麟さんに勝っている自信がありますよ」

胸を張っていいました。空しくなりますが、まあ、実際その通りです。それに、直接肯定も否定もできないので、不幸自慢をする方が自虐ネタとして良かったんじゃないか、と思いました。

多少の効果はあったようで、麒麟さんは困ったように眼を細めました。

「自信を持つところを間違えてる、と思うのは私だけかな」

「僕もいつてから思いました」

「だろうなあ」

そついう麒麟さんの綺麗な顔の悲しみは薄れていました。心からいつて良かった、と満足します。自己満足だろうが、構いません。

「話が少し逸れちゃったな。戻すとね、獅子ちゃんも私と同じような感じなんだ。でも、獅子ちゃんは見ての通り負けず嫌いですよ。だからあんな風になっちゃった」

お母さんの血が濃いんだろうね、と麒麟さんは続けました。

なるほど、そんな理由が、と獅子さんの顔を思い浮かべます。一見、どこにでも一人はいそうな、不良と部類される容姿。それは、周りの眼から自分を護るために創り出した強固な殻だったのです。

「もったいないなあ」

思わず呟いてしまいました。

慌てて口を押さえましたが、麒麟さんの耳にしつかり届いていたようです。

「もったいないって」

聞こえてしまったので、もうどうしようもない、と素直に僕は

います。

「はい、僕は赤羽さんの全てを知っているわけではありませんが、もったいないと思いました。髪を下ろした時なんか、可愛かったですし」

「あらあら、それは獅子ちゃんに直接いった方が良いかな。私も赤羽だから、私が口説かれてるように感じるよ」

「そ、そんなわけではありませんが。ともかく、もったいないなあと。僕がどうこう思っても、僕が赤羽さんの意志を捻じ曲げるような事はしません」

「なら、捻じ曲げて欲しいと獅子ちゃんが望んだら、君はどうする」「どういう事ですか」

脳裏をかすめた言葉を、そのまま振動に変えました。今の僕では、麒麟さんの含蓄ある言葉を理解できないので。

ですが、麒麟さんは答えてくれませんでした。まるで、その言葉を伝えるために、今日僕の前に現れたかのようでした。

その後、他愛のない会話に戻り、僕と麒麟さんは、ひとまず別れました。コーヒー代は、麒麟さんが奢ってくれました。申し訳ないのと、感謝と、そして疑問でいっぱいになりました。

とうとう明日です。まだ悩みはありますが、それでも楽しみであるのには変わりません。気持ちが華やぐ、とはこの事でしょう。

ベッドで横になり、部屋を暗くしても瞼は軽く開いてしまっています。目尻が下がり、頬が緩みます。気持ち悪い、と自分でも思いますが、でも仕方がありません。楽しみだから。

忘れ物をしてはいけないので、もう一度確認します。これで何日目だろう、と呟いてしまうのは、お約束でしょう。

ああ、明日はきっと良い一日になるでしょう。

シヨルダーバッグの中を覗き、忘れ物がないかチェックします。今日のために、色々なお店の中から選定したお店の名前と場所などを印刷した紙が十数枚。読み終わった、太公望というタイトルの小説。携帯。問題はありませんでした。

ジーパンのお尻のポケットを触り、財布が入っている事も確認します。念のために、僕も少しばかり財布を潤してきました。何事も、最悪を考えて行動した方が、後々役に立つでしょう。

適当に服装を正して髪を手で梳いた僕は、腕時計で九時である事を確信したあと、深呼吸を一回、チャイムに指を伸ばします。そう、ここはもう赤羽さん宅の前です。付け加えて、今日は約束の当日。

麒麟さんの言葉の真相がいまだに気がかりですが、とりあえずは目先の約束からです。

チャイムの音が家の中から聞こえてきました。心臓が大きく跳ねます。ホラー映画を観ているわけでもないのに、驚いてしまいました。自分で鳴らしたのにもかかわらず、です。よほど僕は今緊張しているのでしょうか。今まで楽しみの方が強かった分、緊張に気づいてしまうと、冷凍されているかのように、身体が硬くなってしまいました。

こんな状態の僕を知ってか知らずか、玄関のドアが開きました。

「おう、きたか。時間丁度だな」

「お、お久しぶりです、赤羽さん」

指先を伸ばして直立不動のまま、僕はそう挨拶しました。声が裏返ったのは忘れて貰いたいところです。

「なに声を上擦らしてんだ、オメエ」

「突っ込んだら駄目です。負けです」

「ならよオ、突っ込まれた玲央は勝ちってか」

「僕は元々敗者なので、勝者のいない無益な戦いとして後世に伝えられるでしょう」

「朝っぱらからなにいつてんだ、アホか」

アホではありません、ただのバカです。脳内レベルが、現在馬や

鹿にも劣っている状態です。馬鹿の語源は違うと思いますが。

先日と変わらないスウェットスーツ姿で現れた赤羽さんは、庭を横切って僕の前で立ち止まりました。下げている髪も、どうやら癖っ毛は地だったようで、至る所が跳ねています。変わっているところを上げるなら、首にネックレスをかけているところでしょう。なにかの模様が刻まれている、ペンダントつきの黒いネックレスでした。

「んな事はともかくとして、だ。今から行くけど、なんか遣り残しはねエか」

「は、はい。あの、これをお返しします」

シヨルダーバッグの中から小説を取り出して、赤羽さんに返ししました。

「面白かったです。ありがとうございます」

「早エな。もう良いのか」

「読み終わりましたから大丈夫です」

「そっか。なら帰りに続きでもまた貸してやるよ」

「嬉しいです。でも、それじゃご迷惑になりませんか」

「なんであたしが迷惑すんだよ。もう読み終わってるつつたる。それともなにか。借りて、そのまま売っ払おうって計画でも立ててんのか」

「そんな事しませんよ」

「なら良いじゃねエか。ちょっと待ってな」

否定をするために声を大きくしてしまったのですが、赤羽さんは意に介した様子を見せず、代わりに悪戯っぽく口端を持ち上げて、一度家に入って行きました。一瞬、怒られてしまうのではないかと冷や冷やしましたが、そんな事はありませんでした。

「んじゃ行くぞ。他に用はねエだろ」

戻ってきて、開口一番、赤羽さんはそういいました。

頷いた僕を見て、良し、と付け足します。そして、先に歩き始めてしまいました。僕はその左後ろに続きます。決してパシリではあ

りません。天井でもありません。

「でもって、玲央はどこに行くか調べたのか」

歩きながら赤羽さんが訊ねてきたので、シヨルダーバッグからプリントアウトした紙を取り出して、渡しました。

「調べて纏めたお店がそこに載っています。最初はここからの距離が近くて、ページが変わるほど遠くなっていけますよ」

「オメエ、よくこんなに調べたな」

「そうですか」

そんなになかな、と疑問を覚えました。

女性向きのお店を、赤羽さんの家から半径百キロで検索した結果、大体二百件を軽く超えていました。それから若者向けなどの条件や、写真に載っているお店の雰囲気で、二十三件にまで減らしました。もしかして、良いと思ったお店は、口コミ情報などから更に掘り下げて、詳しく記載したせいなのでしょうか。

「念のために、一軒一軒詳しく書いたのですが、駄目でしたか」

「いや、駄目って事はねエけどよ」

なんとなく歯切れの悪い言い方で、赤羽さんはいいました。若干頬が引きつっているのはなぜでしょう。

「玲央、オメエは探偵にでもなれよ。きっと儲けるぜ」

「はは、無理ですよ」

「いや、大丈夫だろ。あたしにはこんなマネできねエよ」

「そうですよ。結構簡単でしたが」

「そうです。店だけじゃなくて、店員の仔細まで調べれ奴なんて、そうそういねエ」

「店員の方の感じが悪かったら気分を害するだろうと思って、簡単に調べただけですよ。仔細なんて大げさな」

紙をめくっていく赤羽さんは、明らかに肩を竦めました。

顔写真を載せたのがまずかったのでしょうか。それとも、過去の賞罰や職業でしょうか。

残念ながら、僕にはわからず、赤羽さんも教えてくれなかったの

で、迷宮入りとなりました。

うーん。年齢や誕生日、出身校や職歴ではないでしょうし、バイトの方も含めて、住所とか、電話番号まで調べたのがいけなかったのかなあ。なにかあった時、知っていると便利そうなんだけど。

赤羽さん宅から、大体一時間をかけて県庁所在地である街にまで来ました。これは赤羽さんの意見です。なんでも、地元の人にあまり見られたくない、との事でしたので、僕はすぐに納得しました。それに、僕が調べた中でもこの界隈が一番お店が纏まっているので、色々と巡れそうです。

「にしても、人が多いな。鬱陶しい」

「まあまあ、今日一だけですので、そこは耐えてください。僕も人込みはあんまり好きではないので、一緒に我慢しましょう」

「面倒だ」

苦笑いしかできません。

確かに人が多いとは調べていたのですが、直接体験するとかかなり大変です。途中で曲がりたいと思っても、人の流れに流されそうです。街には滅多に足を運んだ事がないので、知りませんでした。迂闊です。今度からは、直接その場に足を運んで、下見しないといけません。

「ところで、最初の店はどこだ」

「えっとですね」

途中で返してもらった紙をフォルダーバッグから取り出して、歩きながら一番近いところを探します。

見つけました。地図と、載せている写真から、大体この辺りである事がわかり、看板を探します。

「ありました。あそこです。ほら、赤い文字で撫子って書いてあるお店」

「撫子って、着物の店じゃねエだろうな。んな高エもん買えねエぞ」



「私服を買うのに、着物のお店を探すわけありませんよ」

といいつつ、実は最終候補まで着物屋が一軒残っていた事は口が裂けても言えません。

だってさ、赤衣着物とか似合いそうなんだから。僕は悪くない。

「なら良いか」

そういつて、赤羽さんは僕の手を握ってきました。思っていた以上に小さくて、温かい手です。

急な事で、僕の蚤のように小さな心臓は破裂寸前です。でも、離したくありませんでした。愛しく、幻想的で、儂い瞬間に思えてなりませんでした。

「ちゃんと握ってるよ。玲央はすぐに逸れ<sup>はぐ</sup>そうだからな」

ご迷惑をおかけします。

掌に伝わる温もり。赤ん坊の頃、母に抱かれていた温もりと同じだと思いました。離したくありませんでした。でも、壊したくもありません。ほんの少し、本当に僅かな力を込めただけで、溶け崩れてしまいそうでした。

どうしたら良いのかわからず、誤って、ぎゅっと握ってしまいました。あの瞬間は後悔してなりませんでした。でも、握り返してくれました。自分よりもずっと強い力で。

ここにいます。そういつてくれているように聞こえました。

ありがとうございます。

涙が零れそうになりました。

一通り、買い物が終わりました。腕時計を見ると、まだ二時前で、予想していたより早く終わってしまいました。少し残念です。今までの数時間は、本当に充実していましたから。

大きな要因としては、赤羽さんが楽しんでくれていたと、僕の眼

で見てもわかった事です。試着した姿を見えなかったのは残念ですが、それは瑣末事です。

僕の足元には、大きめの紙袋が三つほどあります。今日の収穫です。これを今度から着ている赤羽さんと逢えます。どんな物を購入したのかは知っているのです、自分なりにコーディネートしてみても、それを着た赤羽さんを想像してみます。変態ではありません。顔が緩んでいるのは最初からです。生まれつきです。そういう事にして下さい。

「楽しかったな」

紅茶を喫しながら、赤羽さんはそういつてくれました。実際にその言葉を口にして貰えると、歓喜極まります。

僕たちが今いるのは、駅近くのファミリレストランです。遅めの昼食をとっていました。現在は食後の口直しをコーヒーと紅茶でしています。赤羽さんは本当に紅茶が好きなようです。

「なによりです。僕も楽しかったです」

「にしても、今更だけだよ。今日は悪かったな。無理やり付き合わせてよ」

「いえいえ、そんな事ありませんよ。また一緒に買い物に行きましよう」

「そうだな。そうだ。今日の報酬を玲央に贈呈する。有難く受け取んな」

そういつて、赤羽さんはネックレスと外し、僕に差し出してきました。

お礼をいわれるような事をしていない僕は、両手を前に出してかぶりを振ります。

「そんな。受け取るわけにはいきませんよ」

長い髪で眼元は見えませんが、口元で赤羽さんが機嫌を損ねたとわかりました。

まずいと思つたのが早いか、前に出していた片手を掴まれ、無理やり渡されました。絶対に返させないためか、僕の手を彼女の両手

が握らせます。

掌に感じるひんやりとした冷たい感触。僕の手を覆う赤羽さんの手の温もり。二極の温度が、見事なコントラストを創り出しています。

思えば、ほとんどずっと赤羽さんと手を繋いでいました。嬉し恥ずかして顔が赤くなりつつ、手に滲んだ汗で気持ち悪くなかったかと不安にもなってきました。

「渡したからな。失くすな、捨てるな、いつもつけてろ」

「受け取ってしまいましたね。なのでこれは今日から僕の宝物です。大切にさせて頂きます」

「それで良いんだよ」

不機嫌そうな口調とは反対に、赤羽さんの口端は上がっています。これで良かったんだ。なにも、無理に赤羽さんの好意を無下にする必要はありませんでした。反省すべき点です。

「はい、すみませんでした。あと、ありがとうございます」

お礼をいって、僕はこの場でネックレスをつけました。アクセサリーをつけた経験がないので、自信はありませんが、それでも構いません。赤羽さんのプレゼントを使わせて頂いている。その事が大切です。

「似合ってる、似合ってる。馬子にも衣装だ」

いって、赤羽さんは相好を崩しました。決して嫌味にならない、彼女らしい笑みに、僕は顔を赤くして俯きました。これではどっちが男性か女性かわかりません。これこそ今更ですね。

「照れんな、照れんな」

むしろ、照れずにいられる方法を教えて下さい。

そんなやり取りをして時間を潰していると、突然僕たちは話しかけられました。正確には、赤羽さんに声がかかりました。

「お前、獅子か」

声の方に顔を向けてみると、そこには今風の男性がいました。

身長が高くて、女性のように綺麗な顔立ち。左右非対称ながらも

綺麗に纏まった髪形。それらと完全にマッチさせて、着こなしている服。素人眼ですが、テレビで歌って踊っているアイドルと相違ないように見えます。

隣には、少しだけ化粧が濃い女性が、男性の腕を組んでいました。刺激が強い香水の匂いは、残念ながら僕には合わないようです。

赤羽さんに目を移し直すと、明らかに彼女は敵意を出していました。不快なんてレベルではありません。初めて逢った時以上に、怖いと感じるほどです。

「ねえ、ター君。こいつら誰」

「ああ、片方は俺の知り合いだ。そっちのガキは知らねエけどな。獅子、お前の弟か」

赤羽さんはなにも答えません。頬杖を突いて、外を眺め始めました。その行為に腹が立った様子の女性は、眉間にしわを寄せています。

「ちよつと、その赤毛。ター君が質問してるのになに無視してんの。失礼だと思わないの。常識がないの」

挑発的な女性の言葉にも、赤羽さんは耳を貸そうとしません。台風が過ぎるのを待つように、じつとしています。

女性の顔が、一層険しくなりました。流石にこれ以上は他のお客さんのご迷惑になるので、僕が口を挟みます。

「あ、あの。僕、蒼風っていいいます。あなたたちは」

「俺は山口っていう」

「あたしはター君の彼女よ。それより、アンタ、赤毛の彼氏なんですよ。そいつになんかいいなさいよ。マナー知らずにもほどがあるじゃない」

どっちがですか、といたくなる彼女さんの口調ですが、それ以前に彼氏であるという認識を改めさせようと思いました。しかし、不要だったようで、僕より早く山口さんが口を開きます。

「んなはずはねエ。こいつは生粋の男嫌いだからなア。いや、そうじゃねエか。男どころか、女すら獅子を敬遠すんだよな。女のくせ

に、くだらねエ意地なんか張るからなア」

山口さんの言い方に不快を覚えながら、赤羽さんの肩が微動したのを僕は見逃しませんでした。

これ以上は僕にとつても、なにより赤羽さんにとつて、なにも得る物がありません。早々にこの場から離れられるよう、僕はいいます。

「すみません、山口さんと彼女さん。お話をしたいのは僕としても山々なのですが、大変申し訳ありません。そろそろ出てしまう電車に乗らないといけないので、僕たちはこれで失礼します。本当にすみません」

荷物を左手に、赤羽さんの手を右手に僕は立ち上がります。無理やりなのでいささか負い目を感じつつ、赤羽さんも立たせませす。そして、手を繋いだまま、山口さんたちの横を過ぎようとなりました。が、赤羽さんがバランスを崩してしまいました。倒れそうになつたので、慌てて支えようとしたのですが、いかんせん、僕にそれだけの力がなく、二人共々ワックスの利いた床に倒れてしまいました。幸い、僕が下になつたので、赤羽さんを踏んでしまう事なく、クッション代わりになれました。

「氣いつけるよ、獅子。それに蒼風とやら。ここの床は良く滑るからなア」

その一言で、山口さんがなにをしたか把握しました。でも、僕はなにもできません。臆病風に吹かれ、喧嘩してもどうせ負けるだけだ、なら早くここから去つた方が良く、と言いつつ、睨む事すらしませんでした。そんな自分を不甲斐無く、悔しく思いながら、赤羽さんを抱き起こします。そして、山口さんたちに背を向けてレジへ進みます。背後で舌打ちをされましたが、泣き寝入りするしかできない自分が、本当に嫌になりました。怯懦を恥じつつも、それだけで終わってしまう自分が。

申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。自分のせいです。自分が無力だったばかりに、あなたに不快な思いをさせてしまいました。いくら謝っても足りないでしょう。

でも、謝る事しかできません。申し訳、ありませんでした。

お店を出た僕らは、ひとまず落ち着ける場所を探しました。その間は共に無言です。なんて声をかけたら良いのか、それすらもわかりませんでした。大丈夫だよ、気にしない方が良いよ。そんな陳腐で、ありきたりで、廃棄物のような言葉ばかりが頭を巡ります。どうしようもないほど僕は軟弱な男だった、と改めて知り、慨嘆します。

歩くこと数分で、少し大きめの公園を発見しました。帰る前、疲れたらここで休憩しようと思っていた場所なので、迷わずに来れました。けど、まさかこんな形で足を運ぶ事になるとは、流石に思っていますでした。

適当なベンチに赤羽さんを座らせ、隣に僕も失礼します。

時折頬を撫でる冷たい風が、針のように痛々しく、重厚な門のように重く感じました。

「悪かった」

無言の壁を破ったのは赤羽さんでした。

彼女の声は、聞きたくないほど弱々しく、こちらが泣きたくなりそうでした。

「そんな事、ありません。もっと僕がしっかりしていれば、あんな風にいわれる事はありませんでした。本当に申し訳ありません」

「本当にそう思ってるのか」

「当然です」

あれはどう考えても僕の判断ミスでした。なにをいわれても言い返せないのは最初からわかっていた事。なら、赤羽さんの様子がおかしくなった時に行動を起こし、あの場を離れていたなら、こんな

思いはせずに済んだかもしれません。重大な過失です。

頭を下げよう、と僕は腰を浮かして立ち上がるうとしました。しかし、それより早く、赤羽さんが叫びました。

「どこがだ！ 全部あたしのせいじゃねエか！ いえよ！ お前のせいで僕は嫌な思いをしたんだつてよオ！」

大気が震えるのを感じました。木々の葉が揺れ、風を裂きまします。けど、どれでも僕は今の赤羽さんを怖いとは思いませんでした。赤い髪の間隙から覗く切れ長の眼は、頼りない僕の身体を射抜くように睨んでいます。それでも怖くありません。まだ十七歳の女の子が、必死にもがいて、もがいて、自分を殻で覆い、涙を堪えて、それでも自己主張をする、幼子に見えてなりませんでした。

天を仰ぎます。

どうしてこんな子が、こんなにも苦しい思いをしないといけないのか。どうして、癒しを与えないのか。

神様がいるとしたら、地獄に落とされようとも、咎めたくありません。ですが、蒼い空はなにもいいません。

いつもと変わらず、のんびりと雲を漂わせる空。一体、この空になんの力があるんだ。

そこまで思つて、僕は軽くなった腰を上げました。

顔だけ赤羽さん向けます。

「少し、ほんの少しだけここで待っていて下さい。すぐに戻ります」  
そういい残して僕は走ります。

日ごろの運動不足が祟つて、すぐに息が切れました。けど、休むわけにはいきません。後ろでは、一人の女の子が僕を待つてくれているはずなのです。他人に頼る術を知らず、媚びるを邪と考える、強く、夢い女の子が。その子がくれたネックレスが首元で鳴ります。気のせいでも、勘違いでもなく、僕を応援しています。頑張れ、と。音を聞くだけで、僕の脚は止まる事を知りません。

ふと思いつ出した麒麟さんの言葉。あの方は、獅子さんが自分の意志を捻じ曲げ欲しいと願っているような事をいいました。きつと、

それはこの事だったんでしよう。殻の内側から、出たい、と叫ぶ本来の彼女を外に出す事。今しかチャンスはありません。

そう思うと、なお身体が軽くなりました。

公園の出口で、目的の物を見つけました。急いで手に持ち、帰ります。

ほんの数日前までは面識もなかった。けど、この数日で大切な人になった赤羽 獅子の元へ。

「お待たせしました、赤羽さん」

戻ると、赤羽さんは俯いていました。声をかけても顔を上げてくれません。反応もしません。ですが、これだけは渡さないといけないので、赤羽さんの手を取り、無理やり握らせました。嫌がるでも受け入れるでもなく、ただ握っただけの赤羽さんを確認して、僕は再び隣に座ります。そして、赤羽さんに持たせた物と同じ物のキャップを開けます。ラベルには、レモンティーと描かれている飲み物です。

「飲時。風が穏やかで天気が良い日。こんもりとした林、すらっとした竹藪を見ている時。気分がいらいらしている時。茶疏引用。一度に三つも噛み締めながら紅茶を頂きます。百五十円の安物ですが、赤羽さんの部屋で喫した紅茶よりも美味しいはずですよ。けど、それだけじゃありません。赤羽さん以上に僕は美味しく飲む自信があります。なぜだかわかりますか」

返事を期待したわけではありません。なので、赤羽さんがなにもいつて来ないのは、織り込み済みです。ただ、僅かに赤羽さんの方から、あの真つ赤な炎のような髪が擦れあつた音が聞こえました。横を見て確認したわけではありませんが、視界の隅に見えていた赤羽さんの手も揺れました。

声はなくとも、僕に反応してくれる。それがわかっただけで僕は笑顔になれます。

「飲時の一つ、良い客や可愛い女性という時。これで僕は赤羽さんより一つ増えます。あの時を百の良さとしたら、三倍と四倍の差は



大きいですよ」

完全にいつてから、僕はレモンティーを口に含み、喉を通しました。

二口、三口、と喫し、口から離します。走って、息が切れている喉には、最高の潤いでした。

「うん、やっぱり美味しいです。それでいて、心が落ち着きます。公園の緑、空の蒼、紅茶のオレンジ。なんとも綺麗だとは思いませんか。って、なんか臭い事いつてますね。鼻に付いたらすすみません」

「なんでだよ」

赤羽さんが口を開いてくれました。あとは待つだけです。僕にできるとしたらここまで。なにもできないのなら、せめて聞いてあげたいのです。

「なんで、玲央はあたしに構うんだよ。良い事なんてなにもねエのに。嫌な思いをさせちまつたし、これからも続くかもしんねエのに」

「わかりません。けど、嫌な事ばかりじゃありませんよ。少なくとも、赤羽さんといった時間はいつも刺激的で楽しかったですし、退屈しませんでした」

「自分勝手な事ばかりいつて、玲央に散々迷惑かけた。学校もサボらせちまつた」

「あれはあれで、僕にとって希少な体験でした。親にこっぴどく怒られちゃいましたしね。けど、それ以上に赤羽さんと話した事が面白くて、その日の晩、つい顔を緩ませちゃいましたよ」

「無理やり買いもんに付き合わせちまつた」

「僕が勝手についてきただけです。赤羽さんと一緒にお買い物をするのが楽しそうって理由で」

「なんで玲央はそうなんだよ」

「僕はこうなんです。もう治りませんね」

「玲央は、なんで玲央は」

赤羽さんの声質が変わってきました。語尾に力がありません。その代わり、僕の服の裾を掴む彼女の手は、とても力強いのです。

肩に心地良い重みがかかりました。視線は公園の木々から離さず、その重みを支えます。首に触れる柔らかい髪の毛の感触は、本来の彼女のように思えました。心で聞く彼女の嗚咽は、どんなオーケストラですら永遠に奏でる事の出来ない、悲しみと我慢の洪水でした。

子供じゃないんだから。何度そう思い、瞼を固く閉ざした事でしょう。

弱い奴だから、自分は弱くないから。何度そう自分に言い聞かせた事でしょう。

自分は強いから誰にも頼らない。何度そう決意したでしょう。それがこつも簡単に崩れてしまうとは、なんとも情けない話です。けど、胸を張ります。

天を駆ける籠に届くほど声を張り上げましょう。

海中に眠る神々が起きるように唄いましょう。

私は、あたしはもう一人じゃない。

どのくらい時間が経ったでしょうか。泣き止んだ赤羽さんは、僕の肩から離れ、小さな声で、悪イ、と呟きました。

「恥ずかしいとこ見せちまったな。肩、大丈夫か。痺れてないか」

「僕はこれでも男ですよ。なんて事ありません」

はい、強がりです。実は、腕の感覚がありません。徐々に血が流れて感覚が戻っています。一ミリも動かしたくありません。関係ない頭も、動かしたら叫びそうです。

「嘘ついてんじゃないやねエよ。なんなら、一回叩いて確認してやろうか」「すみません。嘘です。だから止めて下さい。僕のただでさえ短い寿命が埃みたいになってしまいます」

顔を動かせないで、赤羽さんの顔が見えません。だからどこまでが本気か半信半疑で、眼隠しをしているように、変な恐怖と緊張

感があります。

「正直に白状したため、罰は免除してやるよ」

ほっと脱力してしまいました。肩が下がってしまったのです。つまり、肩の先にある腕も動いたという事で、表現し難い痛みが襲ってきました。

背筋を伸ばして、顔をひきつらせる僕を見て、赤羽さんは声高々に笑いました。こちらとしては、笑い話ではありません。

「もう少しここにいるか。玲央の腕が治るまでよ」

「面目ありません」

「玲央に面目なんてあつたか」

「流石に、人の前には普通に出られるような顔の作りをしているつもりです」

「妖怪、小人としてか」

「平均より少し、ほんの少し小さいだけです。妖怪になったつもりはありません。それに、小人は妖精だった気がします」

「おっと、これは失敬。じゃあ妖精って訂正しておくぜ」

「いや、そこは人間にして下さいよ。せめてもの情けで」

しょうがねエナア、という赤羽さんは、カカカッ、と笑います。

なんかやけに毒舌になった気がします、そこはご愛嬌といったところでしよう。

「そつだ。退屈だから一つ昔話でもしてやるよ」

返事を少し遅らせている間に僕は考えて、断ります。かぶりを振ると腕が爆発するので声だけです。

「いえ、今日は遠慮しておきます。また明日。駄目なら明後日。それでも駄目ならずっと待ちます。赤羽さんが気が向いた時、また一緒に紅茶でも飲みながら」

「そつか。うん。玲央がそついうんなら、また今度にするか」

そういつて赤羽さんは立ち上がりました。ついでに、僕の腕を叩きました。

なぜ。

ベンチの上で悶える僕を笑う赤羽さんが、なんだか悪魔に見えます。天使みたいな、可愛らしい小悪魔と思う僕は、きっと病気なんでしょう。治す気が起こらないのは、まあ、そういう事なのだろう、と自覚します。

「ほれ、早く立て。帰んぞ。いつまで面白い動きして喜んでんだ」  
「僕側からすると、面白くも喜んでいませんが。ついでに、楽しんでません」

一度強烈な劇薬を投入された僕の腕は、なんとか通常に戻りました。若干の違和感もすぐになくなるでしょう。一瞬とはいえ、対価が大き過ぎたように思えるのは、勘違いだ、と自己暗示します。

ともかく、赤羽さんはもう大丈夫でしょう。これからは恐らく毎日会うでしょうし、僕も彼女の重みを支えるお手伝いができます。なにかあっても、微力ながら肩を貸しましょう。

その前に、ジムにでも通おうかな。そうだ、赤羽さんと一緒に通ったら面白そうだ。電車の中でその話でもしてみよう。

自分の中で明日からの計画を立て、先に行ってしまった赤羽さんを追いかけました。腕が重いのは気のせい気のせい。

今日もまた一波乱ありましたが、なにはともあれ、あとは帰るだけです。駅に着いたのは、ちょうどひとつ前の電車が出発する時刻で、一生懸命走ったんですが、間に合いませんでした。ええ、ええ、そうですよ。僕のせいです。言い訳はしません。余裕で走っていた赤羽さんは、歩いている人に抜かれそうな速度で走っている僕に、わざわざ合わせてくれました。頭を下げる他なく、今度紅茶の茶葉を持って行くという事で治まりました。勘違いしそうな人のためにいっておきませんが、提案を持ちかけたのは僕で、あくまで赤羽さんは遠慮していました。

閑話休題。現在は、あと少しで電車が来るといった感じですが。僕たちはベストタイミングで逃したため、最前線で待機しています。

振り返れば、街全体の人が、戦争が起こるから移動しているんじゃないか、と思えるほどいます。もちろんこれは比喻で、僕が見慣れてないだけです。

「ここも人が多いな。なんだ、祭りでもやってんのか。それとも戦争で避難すんのか」

田舎者の考えは、以外と似通うみたいです。

「本当にそんな気がしますよね。僕たちに家から近い駅なんて、十人いれば多いって思うほどですし」

「五人だな。あたしは最高で八人しか見た事がねエ。ちなみに、八人の半分はあたしと愉快的仲間たちだ」

要するに、麒麟さんやお父さん、それと、まだ見た事がないお母さんの三人ですね。若干わかり難かったです。

「ま、またしばらくは来ねエだろうし、関係ねエけどな」

「そうですね。今度は行き過ぎるか、地元でなにかしましょう。そうそう、今度ジムにでも通ってみようかなあ、と思っているんですが、赤羽さんもどうですか」

「ジムか。悪くはねエな。けど、毎日は無理だ。気が向いた時限定で了承しておく」

「充分です。では、また調べて、都合の良さそうな場所が見つかったら教えますね」

「そいつは良いけどよ、調べんのは場所と設備、それから金額ぐらいにしておけ。お前の調べるは、法に触れそうだ」

そんな事はないと思うんですが。

お役御免となっっている数枚の紙を、ショルダーバック越しに見つめます。今日一日頑張った彼らに、労いの声をかけたい気分です。

それにしても、よっぽど詳しく書いちゃったんだろう、と赤羽さんの様子を見て思います。肩を竦めて、明らかに呆れています。今度からはもう少し程々にしてみましよう。

そんな事を考えていると、アナウンスが響き、電車の到着を呼びかけました。線路奥に向けて顔を覗かせてみましたが、残念ながら

まだ見えません。

「見えたか」

僕の肩に腕を置きながら、赤羽さんも黄色い線より顔を前に出しました。と、電車の顔が見えてきました。銀色を基調に、太いオレンジの線とその上に細い同色の線が窓下に伸びている電車です。

着々と距離を縮めてくる電車が見えた赤羽さんは、待つてましたとばかりにいいいます。

「やっとときやがったな。もう少し遅かったら、悪ふざけで飛び降りるところだったぜ」

物騒な事いわないで下さい。そういおうとした瞬間、赤羽さんは前屈みになっていました。揺れる髪から覗く横顔は、驚きと呆然で固まっています。

バランスを崩している彼女は、なおも前に進み、ホームの端ギリギリまで行ってしまいました。

電車はもう間近です。なぜかそれを冷静に確認できるほど、僕の意識は鋭くなっていました。周りがすべてスローに見えます。もちろん、僕の動きも。

一步踏み出して、僕は腕を伸ばします。届け、と静かに叫びました。

指先が、赤羽さんの衣服に絡みました。あとは引つ張るだけです。全身の力を込めて、赤羽さんをこちらに戻そうとします。僕が、逆に線路側へ向かっているのなんて、瑣末な事です。そう、ほんの、ほんの些細な事。

呆けている赤羽さんの顔が見えました。切れ長の眼を大きく、丸く見開いています。

このような状況で、こんな事を考える僕はおかしいのでしょうか。麒麟さんに似て、とても可愛い顔だ、って。

横眼で見る電車は、もう数メートルもありませんでした。身体は重力に逆らわず、落ちて行きます。時間の感覚が、相変わらずゆっくりにある事が救いです。相対性理論をなんとなく思い出しつつ、

これが走馬灯を視る人の感覚か、と思います。

僕の身体が下になるにつれ、赤羽さんの表情があまり見たくないもの変わっていきます。

笑って下さい、赤羽さん。僕は、僕の親と、あなたのくるくる変わる笑顔を思い浮かべて逝きます。だから、どうか笑ってやって下さい。約束もろくに守れない、この道化師を。

そう思って、僕は眼を瞑ります。

痛くないと良いなあ

あんな事、いわなければ良かった。冗談で言っただけ。本当に線路に飛び降りるつもりなんてありませんでした。でも、私の身体は線路に進んでいました。なにが起きたか、今でも思い出せません。ただ、はつきりと覚えている事があります。あなたが、玲央が気づいたら私と向き合っていました。そして、背中から線路に落ちそうになっていました。

私はその時の記憶を、永久に忘れる事はないと思います。

絶望と切望の記憶を。

チャラっと、ネックレスが鳴りました。それと同時に、頭が後ろに曲がります。首が凄く痛いです。身体が前に引つ張られるような気もしました。電車に轢かれると、こんな感じになるのですね。想像していたよりも痛くはありませんでした。

いえ、むしろ抱きとめられているような気がします。天使が僕の魂を連れて行ってくれているのでしょうか。それとも、もう女神様に抱かれているのでしょうか。

そんな事を思っていると、背後で電車のブレーキ音が聞こえました。

恐る恐る眼を開けてみると、そこには、見知らぬ女性がいました。

根元が黒い、金髪の女性です。耳たぶには、髑髏のピアスがついており、女神にしてはアウトローな印象でした。誰かに似ているような気がしますが、はて、誰でしたっけ。というより、僕は助かったのでしょうか。

「よう、少年。あたしのバカ娘助けてくれてあんがとな。ちっさいのに良くやった」

「あの、あなたは誰でしょうか」

「あたしか。あたしは、いや、自己紹介はあとだな」

そういつて、女性は僕の腕に巻いていた腕を解放しました。この時、ようやく彼女に抱き締められていたんだ、と気づきました。さらに、女性はネックレスから手を離しました。どうやら、ネックレスを掴んで、僕を引っ張り上げてくれたようです。感謝の言葉がありません。が、それを口にするより早く、タックルを喰らいました。人間、マンガみたいに身体が横に折れるんだ、と知りました。

「なにやってやがんだボケ！ 死ぬところだったんだぞ！ わかってんのか！」

「あ、赤羽さん」

咳き込みながら、マウントポジションをとっている赤羽さんを見ます。今にもタコ殴りにしそうな形相をしていました。恐ろし過ぎです。ですが、鬼の眼にも涙。透明な雫を流す彼女をみると、心が痛みます。

「すみません、ご心配おかけしました」

「本当だ、アホ。今度やってみやがれ。テメエの死体、高層ビルの屋上から数十回投げ落して、ミンチにやるからな」

そういつた赤羽さんは、僕の薄っぺらい胸に額を当てて呟きます。

「本当に、良かった」

「本当に申し訳ありませんでした」

ここで普通なら抱き締めるところなんだろうが、小心者の僕には無理でした。代わりになるかわかりませんが、頭を撫でます。硬そうな見た目とは反対に、綿に触れているかのように柔らかかった



です。公園で感じた感触と同じです。

「感動の九死に一生おめでとうさん、少年。これをネタに、テレビ局にシナリオ持ち込まないか。きっと人気出るぞ」

感動もへつたくれもない、軽快な口調で先程の女性は笑っています。

止む事を知らない笑い声に、赤羽さんの震えは止まりました。逆に僕が震えそうです。爪が胸に刺さって涙が出そう。

ゆらりと顔を上げた赤羽さんは、迷う事なく女性を睨みました。

「助けんなら助けんで、さっさと助ける、クソババア」

「おやおや、このクソガキは礼儀がなつてないな。元はといえば、アタがこんなもやしに突き落とされそうになるのが悪いんじゃないか」

「んだと。耄碌筋肉年増の分際でいつてくれるじゃねエか、アア」

「乳臭い脳筋がなにいつても悔しくないね。ほれ、もつといつてみ」

彼女たちのやり取りから、女性が母親である事が判明しました。よくよく思い出してみると、すでにバカ娘といていた気もしますし、間違いなさそうです。

それより、お母さんが襟首を掴んで、気絶している人物は、確か

「あの、お話中申し訳ありません。お母さん、その手に持っている方って」

「ああ、いった通り、獅子を突き落とした奴だよ。逃がさないように落とした。見覚えあるのかい」

「ええ、今日会った人で、山口さんっていいいます。赤羽さんと一応

お知り合いみたいで」

「んなわけねエ。こんなゴミなんて知らねエよ」

「ま、そこんとも、このあとすぐに話す事になるさね」

お母さんが顎をしゃくった先には、駅員が人込みをわけて進んでいました。事情徴収というものを受けなければならぬでしょう。か。何一つ悪い事をしていないのに、なぜか罪悪感に苛まれます。赤羽さんも、心底嫌そうな顔していました。

唯一、飄々しているお母さんだけは変わらずにいます。今にも口笛を吹きそうなほど、気楽です。

眼が合うと、お母さんは僕の肩を抱き、小さく耳打ちをしてくれました。

「アンタの事は旦那から聞いてるよ。素直で義理の厚い、岳雲みたいな奴ってね。獅子を助けずに犯人捕まえたのだって、アンタがいたからだ。そして、アンタは自分の仕事をきっちりこなした。合格だよ、玲央」

いい終わると、お母さんは背中を軽く叩いてくれました。

褒められているのだとわかり、嬉しくもほっと一息吐いてしまいました。それがいけませんでした。今頃腰が抜けてしまったのですから、最後まで格好がつきません。とほほ。

本当に色々大変な一日でした。楽しんで、悲しんで、泣いて、喜んで、泣いて、怒って。喜怒哀楽が行ったり来たりしました。これほどまで精神的に疲れたのは、初めてじゃないでしょうか。

そうでした。ゴミ（山口）の件について少し記載しておきます。前にも少し書いてある上に、思い出したくないゴミの記憶なので、短く纏めます。

ゴミとの出逢いは中学校です。小学校からすでにこんな感じだった私は、一クラスにいくつもあるグループのどれからも外されていきました。私が好き好んで外れていた、といった方が正しいでしょう。そんな私に目をつけたのがゴミです。

持ち前のいけすかない顔を遺憾なく遣うゴミは、女子たちの間でカリスマの存在となっていました。そんなゴミが私に目をつけたのは、単なるコレクター根性からでしょう。真相は知りませんが、とにかく最初から気に喰わなかったもので、拳で答えを返しました。それから始まった陰険ないじめ。首謀者は当然ゴミです。しかも、ゴミの陰湿な粘着力は、今も続いていたようです。俺を振った事を後

悔させる、なんて理由で、ここまで粘る奴というわけです。よって強酸性腐敗物に改名しましょう。地球にとつても不必要な存在、というわけです。

とにかく、その延長上で今回の件が発生しました。強酸性腐敗物の言い訳は書きません。ゴミより価値がないので。よって、今日の日記はこれでおしまいにします。

追伸。

私の母親が、えらく玲央の事を気に入ってしまいました。はつきりいって気に入くわねエ。

私は一年前、偶然玲央を見てから一目惚れし、ずっと片思いをしていたつていうのに、です。あんなババア、妖怪親父と一生べたべたしてたら良いんだ。

まあ良いでしょう。明日はまた玲央とお出かけなのですから。ついて来ないように、縄で家に縛りつけて行きます。あくまで、念のためです。今回も玲央を見たいがために尾行していたのでしようし。

追伸。母上バージョン。

明日なのかい。楽しみに有給を行使しておくよ。

それより聞いたよ、獅子。アンタ、初めて玲央と話した日に、胸触らしたんだつて。下品にもほどがあるよ。あたしゃ、恥ずかしくつて玲央に悪戯しちゃうたじゃないか。

まったく、どうやったたらそんな風に育っちゃうのかねえ。

追伸二。

テメエの方がよっぽどじゃねエか。娘の日記に汚エ落書きすんな。それより、玲央になにしやがった。あたしに隠れて、こそこそ書いてねエで姿を見せる。タコ殴りにしてやる。

追伸二。母様バージョン。

おつおつ、面白そうだね。久しぶりにやろうか、母娘デスマッチをさ。

これ書いてると血が疼いてきたよ。さあ、次の文字が公開死刑の始まりだ。

お母様に逆らう者には、死、あるのみ。

「なに見てんだ、玲央。早く片付けちまおうぜ」

「あ、すみません。これを読んでいたもので」

そういつて、僕は素直に手帳を差し出しました。これは、彼女の本棚の裏に隠されていた物でした。そして、これには僕と彼女が初めて出逢った日の事が、綿密に書かれています。読んでいて、懐かしさと恥ずかしさで複雑な気分になりました。

「また懐かしいもんを見つけやがったな」

「勝手に見て、怒らないのですか」

「玲央に見られて恥ずかしいもんなんて、もうねエよ」

その言い方が僕には恥ずかしいです。

今の彼女を見つめると、変わらないなあ、僕たちは、と思います。先程読んでいた日記の日から、早数年経っていますのに、彼女のらしさは損なわれないどころか、輝きを増すばかりです。彼女の髪は凄く伸びて、あの時の麒麟さんのように腰まであります。色も、赤が抜けて黒に戻っています。毛先が跳ねている癖っ毛は、以前のまままで、それがまた彼女に良く似合っています。眼が隠れるくらいの前髪も変わりません。大変お気に召されたようです。性格も丸くなっています。僕は尻にひかれる毎日です。今日もまた、彼女のお手伝いとして、召喚されていますから。

そうそう、朗報です。なんと、あの麒麟さんがご結婚なさるので。お相手は、そう、ウエイトレスをしていた美琴さん。長きご幸福を、心からお祈りします。

麒麟さんは、美琴さんとの赤羽さん宅で暮らす事になりました。それをきっかけに、彼女は引っ越しを始めたわけです。大学も残すところ卒業だけとなり、社会人一年目は、一人暮らしで始めるようです。もちろん、麒麟さんと美琴さんを考えての、彼女らしい優しさです。

ちなみに、今は荷造りの最中。初めてここで紅茶を頂いた時と変わらない部屋ですが、服がたくさん出てきました。ここ数年で増えに増えた、努力の結果です。男性用が大半ですが、中には可愛らしい物もあり、僕の心の日記に、彼女とセットで残っています。

そんな服の山で見つけたのが彼女の日記だった、という事です。いえ、本当に懐かしかった。

「ニヤけてねエで、ここ押さえてくれ。ガムテープが貼れねエ」  
「わかりました」

服がぎゅうぎゅうに詰まった段ボールの上で、僕は全体重をかけます。思えば、あの時と僕の体重は変わっていません。それ以上は口が裂けてもいいませんが。

考えたくない事を考えてしまった僕は、気分を一新するために、あの時見た、あの時と同じ場所で、あの時と同じ蒼い空を眺めます。「これが終わったら、お出かけしませんか」

「どこにだよ」  
「そうですね。近くの河川敷で一休みをするのにちょうど良い丘があります。ほら、夏初めにお花が二輪咲いていたところです」

「ああ、あそこか」  
「はい、そこで紅茶でも飲みましょう。百五十円のペットボトルの奴ですが。それで、帰りにでもお花屋に寄って麒麟さんたちにお祝のお花でも買いたいのですが、構いませんか」

「そうだな、そうすっか。あの丘の帰り道だと、嘘つきな花屋があるしな」

「はい。偶には昔を語りながら紅茶を喫するのも、悪くないと思いますので」

茶疏、飲時。僕オリジナル。

過去を慈しみ、獅子を愛している時。

## 紅茶の日記（後書き）

お疲れさまでした。誰もお疲れにならない事を祈って。

象の一鳴き(前書き)

パオーン

## 象の一鳴き

幼稚園の頃、少年は一人の女の子に憧れていた。顔が可愛い、仕草が大人っぽいなどと言う理由ではない。通っていた幼稚園でただ一人、自分の家の車で送られ、そして帰って行っていったからだ。

普通の子供たちのほとんどは、送迎のバスで通っていた。なかには、家が近いと言う理由で、親に自転車で送り向かいをしてもらって少数の子供もいた。少年は少数派の一人で、特に少女の事を羨ましく思っていた。

いいなあ。きっとお金持ちなんだ。

子供らしい好奇心に身を任せ、少年はその少女に話しかけ、友達になった。そして、それから何年かの月日が流れ、高校生になっていた少年は、図書館内にある一室の隅に座って本を読んでいた。

入口から一番離れたここは、人の行き来もなく、他人の眼を気にする事もないので、少年のお気に入りの場所であった。椅子や机などはないので、床に座るしかないが、構わない。それをマイナスにしても、利益は大きいからだ。ただ一つの問題を除いて。

「パオーン」

象が少年の隣で鳴いた。

気にせず、少年は本のページをめくる。

「パオーン」

無視され、少し気分を害したのか、灰色の長い鼻をブラブラと、同色の大きな耳をバサバサと、先ほどより若干低い声で鳴いた。

それもまた少年は無視する。彼の視界には、文字しか目に入っていない。

「パオーン。パオーン」

音量を上げ、連続で鳴いた。耳が切る風の音も大きくなった。

そこでやっと少年は溜め息と言う反応を見せた。少し長い前髪がかかっている眼を瞑り、本を閉じる。



「うるさい。静かにしろって、馬鹿」

肩を竦めて、少年は隣に顔を向ける。

短い黒髪の少女がいた。学校指定のブレザーの制服を着ている少年と同じように、紺と白の二色の制服を着た少女。普通と違うのは、象の鼻を模っているマスクと、耳の力チューシャをしているところだ。手にも象の脚に似た手袋をしている。

「パオーンパオーンパオーン」

三連続で少女が鳴き、少年は頭が痛くなった。眉間を指でつまむ。今日は象、昨日は鰐、一昨日は驢馬、その前はクワガタ。それからあとは頭痛が激しくなってきたので、思い出すのをやめた。

これが高校に入ってから毎日続いているのか、と思うと、少年に無慈悲な疲労が押し寄せてきた。こいつはいつたいたいながしたいんだ、と。

もう一度溜め息を吐き、わかっているけど、と少年は頭を垂れた。

「……もつと騒げ」

少年の一言で、少女は鳴くのをやめた。

やっぱりと思いながら、少年は何度目かの確信をする。こいつは自分の嫌がらせのためだけに生きているんだ。

中学校に入学し、少年は違う小学校へ通うためにわかれた少女と再び出逢った。幼い頃と同じように腰まである長い黒髪、昔と変わらない大きな瞳、身長こそ成長のため大きくなっていたが、成長しているように見えない童顔。一度見ただけで、昔一緒に遊んだ少女だと気づいた。少女も少年に気づいていた。

それが失敗だったのだと少年はつくづく後悔する事となった。

顔を合わせるたびに、少女は少年に嫌がらせをしたのだ。間接的に。

友人との会話で、どんな女の子がタイプかと聞かれ、髪の長い子と少年が答えた次の日、少女は長かった髪をバツサリと切って、ショートカットで登校した。同じクラスだったため、すぐに気づいた。同じように友人との会話で、流行っている小説の主人公の少女が、

一人称をボクと言っており、現実じゃあり得ない、と否定して笑った次の休み時間、少女は突然ボクっ娘になった。

偶然かと最初は思っていたが、そうではなかった。同じクラスだったため、時折聞こえて来る少女の会話は、少年を全否定するものばかりだったからだ。

小説なんかより漫画。野球よりサッカーだよ。山より海に行く方が断然良い。和食より洋食に決まってる。

そうだった少女は、一言一言、丁寧に付け足す。

文字だけなんてなにが楽しいんだろう。野球をやっている人で、良いと思えるところなんてお金と身長だけじゃない。山なんて夏は虫がウジャウジャいるし、冬は無駄に寒いし、ロマンチックの欠片もない。朝はトーストに目玉焼きとハム。みそ汁と納豆なんてナンセンス。

他にも多数。少女と話していた女の子たちも多めに同意していた。本気で、なにが悪いんだと叫びたくなった事を少年はよく覚えていた。

思い出すと眉間にしわが寄った。直接言うのではなく、間接的に言っただけ少年を苦しめているのも少女の計算の内だろう。女の子の集まりへ下手に突っ込むわけにもいかず、悶える以外選択肢がないと言っ。

高校に入り、やっと別れられると喜々として袖を通したブレザー。その日のうちに脱ぎ捨てたくなった。人生をやり直したいと思ったその日から早一カ月強、少年は頭を抱える。

「パオパオ？」

体育座りをして丸くなった少年の情けない呻き声を不思議に思い、少女は彼女なりの象語でなにかを聞いてきた。

意味は当然伝わらず、少年は頭から手を離す。頭を少し上げ、本棚に並んでいる本を呆然と眺めた。そこには小説の類は置かれておらず、専門的な物が置かれていた。

これからどうしようかと考えると、不意に一冊の本のタイトルが

眼に入った。

「……なあ、お前のイデオロギーってなんだ？」

「パオ？」

「お前だけの世界観って言うか、価値観って言うか……。そんなのはないのか？」

パオンと語尾を弱めて一鳴きした少女は、腕を組んで考え始めた。少しして、元気良く自分の意見を言い始める。

「パパパオ。パオン。パパオオン！」

身振り手振りをしながら象語で話す少女。

「パオパオパオン。パオオ、パパオオン！」

「……」

「ゴゴゴ、パオン、ゴパオー」

変な鳴き声と共に、変な格好で変な踊りまで始めた少女を少し眺めたあと、もう良いと一言呟き、少年は立ち上がった。

「俺と日本語で話したくないほど嫌いなら関わってくんな。……鬱陶しい」

読んでいた本を手に、少年は少女の前を通る。

「子供の頃、俺がなにしたか覚えてないけど、そこまであからさまに嫌がらせを受けて平常を保っていられるほど、人が良くないんだよ」

少女を通り過ぎ、少年は本棚の間に出てくる道を通るために右に曲がる。と、久しぶりに少女の人間らしい声が耳に届いて来た。

高校に入学して以来　いや、それよりもっと前から聞いていない気がした。

「ボクの世界はいつもここさ」

振り向いてみると、象の鼻や耳、足などの身につけていた物を全部外し、右手を胸に当てている少女が真っ直ぐ少年を見つめていた。小道具はすべて足もとに転がっている。

「楽しい事をする。楽しい事を話す。それがボクの世界。つまらない事なんてしたくないし、やる意味なんてない。ただ楽しければそ

れで良いんだ」

「……良かったな、能天気な脳みそを持ってて。悪い意味で羨ましい」

「じゃあな、と言う代わりに背を向け、一歩進んだ少年は、すぐに足を止めた。

「能天気だよ。それが楽しいんだからさ。で、キミのイデオロギーってなに？」

背中から聞こえてきた問い。少年は視線をわずかに上げ、均等に貼られた天井のタイルに眼を向けた。

「……普通。どんなやつとも変わらない普通。それが俺の世界」

「それって楽しい？」

「つまらないに決まってる。けど変わるわけがない。中学や高校で優等生やっていても、不良になっても、いずれは社会人。そこに個人の経歴なんて関係ない。必要なのはその会社が利益となる人材。

そのなかにはいるために努力する。親もいずれ死んで、自分だけで生きていかないといけなくなる。誰もが通る道だ」

「ふーん」

「ニートなんてのも、いつかは働く事を強制される。好きな事ができる職でも、いつかは飽きて嫌になる。生まれた瞬間に決められた義務だ。幼稚園、小学校、中学校、高校、大学……。なにをしようとも他人と違う人生なんてない。結局ゴールは一緒。なら最初からそれが普通であって、それ以外はあり得ない、と思いついていた方が良い」

「宝くじで億万長者になったら働かなくても生きていける。他の国はよく知らないけど、日本なら最低限の生活を保障してくれる。これって普通じゃないのかな？」

「宝くじを買うにしても金がある。日本の保証なんてのも信用できない。現に餓死者だっている国だからな」

だから働かないといけない。それは当たり前であって普通なんだ、と少年は言い終えた。

「満足か、これで？」

視線を動かさず、抑揚のない声で少女に言う。

沈黙の時間が訪れた。図書館では当然な事だが、重苦しい、静かな空気だった。

「……それってさ、キミのイデオロギーじゃなくて、キミの世界が終ったんじゃないの？」

「……」

「普通は確かに良いと思うよ。うん、悪くはないよ。けど、それじゃあみんなと同じって事でしょ？ キミだけの世界じゃないわけだとなれば答えは一つ。キミのイデオロギーは終焉を迎えたと言うわけだ。おかしな話だよね。始まってもないのに終わるなんてさ」

先程の問いは、意図的に無視した。くだらない、とさえ少年は思った。しかし、後者には答える事すらできなかった。その通りかも知れない、と自分のなかにいる自分が答えた。

「それとも始まっていたのかな、キミ自身も気づかないうちに」

「知るかよ。それにお前はどうなんだよ。楽しい事をしたなんて、それこそ誰もが思っている事じゃないか」

少年の声に色がついていた。冷静になろうと赤に深い青をぶちまけたような色だった。それでも燃えるような、反抗したいと言う赤が増し、さらに青をかぶせて良くわからなくなる。

反対に少女の声は空のように透き通った綺麗な水色の声を出す。

「ボクが楽しい事だよ。他の人なんか知らない。いつつもつまらなさそうにしているキミを脅かしたり、怒らしたりしてさ」

「なんで俺限定なんだよ」

「決まってるじゃん」

声を弾ませる少女は、足もとにある象の耳がついているカチューシャを拾い上げ、軽い足取りで少年の背後に回った。

「ボクが楽しいからさ」

嬉しいからさとぼそつと呟き、声が聞こえないように大きな音を立てながら手に持っているカチューシャを少年の頭につけた。

「……どうしてこれを俺の頭につけた」

「うん、良く似合っているよ」

「そうじゃなくてだな……」

溜め息を一つ、少年は諦めた。そうだった、こいつは俺に嫌がらせするためだけに生きているんだ、と思いつながら。

振り返ると、昔と変わらない幼い顔で小さな子供のように無邪気に笑っている少女がいた。少年が初めて少女を見た時であった、つまらなさそうな表情の影など欠片もなく。

「さて、じゃあ今日の仕上げに入りますか」

少女は少年の横を通り過ぎ、左前の位置で立ち止まった。

今度はなにをするんだと少年が不安を覚えていると、少女は大きく息を吸ってそのすべてを吐き出した。

「パオーン！」

耳を塞がないといけないほどの音量で少女が鳴いた。脳の奥の奥にまで響いた、とても良い声。おかげで少年の頭は酷くダメージを受けた。

奥から慌ただしい足音が二人に伝わる。

どうしたものか、と少年が少女を見ると、彼女は嬉しそうな声で、「おっと、これからボクたちはお説教タイムだ。どうしようか？」

「たちをつけるな。怒られるのはお前だけにしろ」

そう言ったものの、少年はすでに覚悟を決めていた。もうどうする事もできない、と。

無理な相談だね、と笑う少女。幼稚園の頃、みんなから仲間外れにされていた。一人だけ違う通い方をしていると云う些細な事で。

なにも面白くなかった。つまらないのが普通だと思っていた。

そんな時に話しかけて来た少年。お金持なの？ と話しかけられた時は流石に困ったが、それ以上に嬉しかった。初めて友達ができた。理由がどうであれ、少女は喜んだ。世界が明るくなった気がし

た。

その少年が今つまらなさそうにしている。つまらないのが普通の世界だ、と思い込んでいる。

少年の世界を面白くするため、教えて貰った世界はこんなに色取り取りなんだ、と教えるため、少女は今日も嫌がらせをする。

「そう言えばさ」

「なんだよ。こっちはお前のせいで疲れているんだ」

館長の清く正しいお説教を受け、図書館を出た少年の表情はやつれていた。同じ話を聞いていたはずの少女は、ニコニコと笑い一言。「キミ、中学の時は意外と嘔吐きだったよね。すぐにわかったよ。女の子の好みとかは特だね」

象グッズが入っている袋を手につ少女の顔は、夜になっているのに、夕日が射しているかのようにほのかに赤かった。

象の一鳴き（後書き）

お疲れさまでした



## 五円（前書き）

以前書いたものです。おそらくここには投稿してなかったかなと思いつつ、投稿します。御目汚しにしかならないので、戻った方がいいでしょう。

## 五円

五円玉。

これだけでなにができるか、歩きながら考えてみた。

駄菓子屋で買える菓子と交換する。コンビニで募金。適当な場所に向かつて全力で投げつける。どれも無理だと結論が出た。自分の問いを、即答で否定するのなんだか変な話だ。まあ、近くに駄菓子屋やコンビニなんてないし、住宅街のど真ん中でこんな硬貨を投げたらどうなるか、小さな子供でもそうそうしない。

なかにはいるだろうが、と思いつつ、雨で濡れた髪が張りついている頬をほころばした。

結局、なんの使い道も思い浮かばなかった五円玉を指で弾かせながら、新鮮で居心地の悪い道を歩く。見覚えのあるはずがない町並み。細い道を走って来る鬱陶しい車。見えない自然。この街から見れば、ジャングルとも思える田舎を出て来たばかりの私には、抵抗があり過ぎた。一週間後、就職先である会社へ赴かないといけないが、今から億劫になる。

しかし、現在進行形での気分は良い。やっぱり雨はどこも一緒だと安心できた。

肌に当たる冷たい雫。いくつもの小さな水滴が奏でる無限のメモデイ。なにより、匂いが落ち着く。雨を嫌う者でも、この匂いが嫌いな人間なんて、いや、生き物なんているはずがない、と常々思っている。胸を張って、声高々に謡っても良いとすら思っている。音痴だから謡う気はないが。

適当に角を曲がりつつ、五円玉を親指で弾く。と、少し先に小さな鳥居があった。

「こんなところに」

口が勝手に動いて、声を出してしまった。大きさもさる事ながら、場所が場所で、違和感しか覚えられない。住宅と住宅に挟まれてい

るその姿は、惨めを通り超えて、滑稽な気がした。神主やその家族、いるかどうかもわからない巫女に聞かれたら怒鳴られそうだ。

足がすんなりそちらへ動いた。どうせ通り道なんだ、横を通り過ぎるぐらい当たり前だろう、と自分に言いわけをしている私自身の方が滑稽だな。

濡れて纏まった前髪で見辛いが、それでも目的地をはつきりと視野に入れる。この期に及んで、どうせ暇なんだ、と自分を上手く誘惑している私自身に、自嘲するほかはない。

所々傷つきながらも朱を失わない鳥居の前に立つと、二、三十メートルほど先に神社とはつきりわかる建物があった。そこでもう一度五円玉を弾き、ここならと足を動かす。

目指すは賽銭箱。募金箱も良いが、やっぱり自分に得がある方が良い。まあ、神や仏などいるわけがない、と無神論を謳っている自分に、どれだけの恩恵が下るかなんてわかり切っているが。

目的の物の数歩手前に辿り着いた私は、なんとなく五円玉を弾いた。今までで一番高く飛んだそれを顔の前で掴み、強く握り締める。そして、指をゆっくりと解きつつ、古ぼけた賽銭箱へと適当に放った。力加減を間違えて、危うく賽銭箱を超えてしまいそうになった。棒に当たって上手く納まってくれた。それだけの事に安堵した私を、誰かが知ったらどう思うかと考え、知人なら、わかるわかる、と言いたいそうだなと口端を持ち上げる。

確か、神社で賽銭を投げる時になんらかの作法があったはずだが、まあ最初から間違えているだろう。持っていた五円玉ですら、合羽代わりに着ている革のジャンパーのポケットに入っていたやつだ。礼儀もなにもないと手を合わせて、願い事を頭に浮かべた。

面白いなにかがありますように。

手を離して、これからどうしようかと考えるなり、短い参道の脇にある、一脚の青いベンチが視界に入った。雨も知らないうちに霧雨となつている。

休みながら考えるか。一瞬先の行動が決定した私は、迷いなくそ

ちらへと進む。安っぽい構造のベンチは、至るところが色褪せ、メツキと言つ名の皮が剥がれていたが、お構いなしに腰を落とす。こつと言つ無頓着なところを女友達に見られると、いつも怒られる。別に汚れなど洗えば良いのに、と頭の中で浮かべる。下に履いている布に浸透してきた新たな水が尻を冷やした。鳥肌が立った気がしたが、すぐに慣れた。すでに身体中濡れているのだから、そう変わりはしない。

空を見上げると、気分が晴れやかになる鉛色の厚い雲。どうしてみんなは雨を嫌うんだろう。こんなにも心を綺麗に流してくれる天からの恵みなのに。生命の雫なのに。

頭に浮かぶは、地元に残っている友人の顔。離れてまだ三日だが、もうホームシックになったようだ。慣れない場所に来るものじゃないと今更後悔する。が、ここで生きると決めた以上、弱音ばかりは吐けられない。さっきまでアパートに引き籠っていた、なんて口が裂けても言えない。

まあ、なるようになるか。考えなしが私の売りだ。それだけは曲げないようにしないと。背もたれに両肘を乗せ、天を仰ぎながら眼を瞑ると、やっぱり気持が安らかになった。雨音以外、なにも聞こえない自分の世界へと誘われる。

「お兄ちゃん？」

少しして、世界にノイズが割り込んだ。子供の声だと言つのはすぐにわかった。足音に気づかなかつたのは私の不注意だ。だが、気に食わない。私だけの大切な世界が崩されたんだ。子供だからと言って、自分の感情を隠すほど私は大人ではなかった。髪で隠れて見えないと思うが、口端を下げ、開いた眼を鋭くさせながら音源へと顔を向けた。そこには、合羽に長靴、その上に傘を持った少年がいた。ハイネックで、長袖のジャンパーを着ているしか防雨対策をしていない私とは正反対に完全武装だ。付け加えて、少年の合羽などは全て黄色で、この距離で見ると眼がチカチカする。

「私に用か」

普通に話しても低い声だが、気分によってさらに低くなった。若干大人げないが、最高の気分を害された今、罪悪感は一切湧かない。老若男女問わず、私は私を変えるつもりなど毛頭ないが。

しかし、少年は動じた素振りを見せず、子供らしい無垢な笑みを浮かべて、身体全体で頷く。続いて、変な事を訊ねて来た。

「ねえ、かさはどうしたの？ かぜひいちゃうよ？」

「雨に打たれるのが好きなだけだ。傘を差す必要なんてない」

それ以外にどんな理由があるのか、こつちが聞きたい。見知らぬ未来の恋人にフラれた時か？ 就職するはずの会社を、初出勤の前にクビになつて途方に暮れている時か？ 馬鹿らしい。この少年がそこまで考えていない事ぐらい理解しているが、それでも私はベントの背もたれより低い子供を心のなかで嘲笑う。くだらない、と。

ふと鳥居の方に目を向ければ、少年の親らしき女性が立っていた。彼女も私の視線に気づいたようで、お辞儀をして来た。

礼儀には礼儀を。私もだらけていた姿勢を正し、小さく頭を下げる。

「でもでも、びょうきになっちゃうんだよ！ おいしやさんにいかないといけなくなるんだよ！」

音量を上げて、律儀に病気の怖さを語ってくれる少年へと顔を戻す。声変わりのしていない男児の声は天使の歌声などと歌の世界で言われているようだが、それは年齢の下限があるのだと再度認識した。高くて大き過ぎる。少し耳触りだ。

「体調管理は万全だ。これでも来週からは社会人。それぐらいは考えている」

体調管理と言う言葉がわからなかったのか、少年は首を傾げたあと、もう一度、でもでもと言って来た。母親はなにをしているんだ。自分の子供が見ず知らずの人間と話しているのに、なぜ止めない。

いい加減、質問ばかりして来る少年が鬱陶しくなってきた私は、もう一度女性に顔を向ける。だが、彼女は微笑んでいるだけで、なんのアクションを起こす気配もない。

溜め息を一つ、私は静かに口を開く。

「なあ、お前はなぜ私に話しかけて来た？」

親が私と話す事を認めていると言う事は、なんらかの理由があるのだろう。だから、その用件をさっさと済ませる。それがこの場での適切な処置だ。

少年は、そうだった、と言って、はいと両手をのばして来た。持っている物は黄色い傘。

それはなんだと聞くだけ野暮。もう一度溜め息を吐き、だから子供は嫌いだと心のなかで呟いた。

「母親がそれを私に渡せと言ったのか？」

念のために口にした問い。だが、答えはわかり切っている。

頷いた時と同様に、身体全体でかぶりを振る少年。水浴びをした犬のように大粒の水滴が私に向かって飛んで来たが、まあ、良いとしよう。濡れるのは嫌いじゃない。

「ぼくからだよ。だってぼく、カップもきてるし。お母さんにきいたら、いいよって」

そうか、とそっけなく呟いた。それ以外になにも言う事がなかったのもあるが、これ以上相手にしたくなかった方が強い。あとはこの申し出を断るだけだ、と強制的に軽くさせられた腰を上げる。と、さらに少年は口を開いた。

「それにね。ぼくも雨ってすきなんだ。お兄ちゃんといっしょだね」

身体が反応してしまった。一瞬、固まった隙を逃すかとばかりに、少年は言葉を続ける。

「おとがいいよね。あつ、それとね。いちばんすきなのは、においなんだ。はながスーってするかんじ」

ダメだと言いつ聞かせる。誰でもない、自分自身に。だが、脳の指令を無視して、身体が勝手に反応する。人生のなかで、一番素直な年頃である少年の言葉。それは私のなかに、見事に侵入して来た。嬉しくないわけがなかった。

礼儀には礼儀を。私は顔を隠していた前髪を右手で掻き上げ、自

分の顔を見せた。些細な事ですら包み隠さない少年に対して応えるために。髪をすべて後ろに流した私の顔がどれだけ崩れているのか、鏡を見たくなくなってしまった。

「へえ〜。お兄ちゃん、きれいなおめめだね」

「そう思うか？」

「うん！ けどなんだろう……あつ、そうだ！ お月さまだ！」

お月様とはこの子供もなかなか変な感性だ。月で餅をついていると言われる兔のように白眼が見えず、その上、人間とは思えない黄色い目を見て、そんな言葉が出て来るとは想像していなかった。なにより、この眼にはロクな記憶がない。前髪で顔を隠しているのも、本来はこの眼を隠すためでもある。

まったく、だから子供は苦手なんだ。

「そうか。お前にはそう見えるのか」

「うん」

「そうか……。傘は要らない。雨はもう止んでいるしな」

少年と話している間に、身体への微かな刺激すら消えていた。見上げると、薄くなった雲の隙間から、水色の空がこちらを窺っていた。本当だ、と言って少年も私に向けていた傘を下ろす。

「そう言うわけだ。じゃあな」

これ以上話す事はないと私は一歩進んだ。もう外に用はない、帰って部屋でシャワーでも浴びるか少年の横を通り過ぎようとす。しかし、彼は高い声を上げて呼び止めて来た。

「あつ、ちよつとまって！」

立ち止まった私を見ようとせず、少年は合羽についているポケットを漁り始める。そして、はいと言って私にある物を差し出して来た。

「お母さんがついでにこれをあげてきてって。おねがいがかなうらしいよ」

確かに叶いそうだと少年の掌を見つめる。そこにあるのは五円玉。少年の母親へ顔を向けると、彼女はやっぱり微笑んでいた。断ろう

とも考えたが、ここは素直に受け取っておこう。先程の願いは、一応叶ったからな。最後の最後だけだが、一応少年とのやり取りが面白かった、と思っている自分がいた。

「ありがとう」

少年の手の温もりを一瞬、感じながら五円玉を手にとると、彼は満面の笑みを向けて来た。

「それじゃあ、またね、お兄ちゃん」

大きく手を振りながら、少年は母親の方へ向かって行った。水溜りを踏み締め、大きな音を立てながら走っている様子を眺めていると、先にいる母親が私にお辞儀をした。私も小さく頭を下げ、それをきっかけに二人から目を離す。

「バイバイ！」

少年の大きな声が聞こえ、顔も向けなまま小さく手を振る。二、三回振ってから、手を下ろし、見つめていた神社に向かって足を進めた。

なるほど、これが信仰集めの効果か。ここにいる神もなかなかやるもんだ。再び賽銭箱の前に立ちながら、私はそう思った。確かに願い事は通じた。あの少年との出逢いを、少なからず面白かったと私は感じている。そして、もう一度賽銭を入れたくなった。してやられたと言っわけだ

今度はどんな願いにしようか悩みながら、貰った五円玉を一度親指で弾いたあと、放り投げる。底板に落ちた音を聞いて、そうだと私は手を合わせた。

「今度は初対面の人間に、私は女だと気づいて貰えるように」

口ではそう言いつつ、初出勤日には男物のスーツを着て行こう、と計画を立てている天邪鬼な私がいた。目の方だけは、いくら万能な神としてもどうする事もできないだろう。それこそ五円の願いとしては、欲張り過ぎだとまた自分に言いわけをしながら。



「ねえねえ、お母さん。ほんとうにあのお兄ちゃんにお金、あげてもよかったの？」

「信仰は御縁からってね。さあ、もう少し散歩してからお家に帰りましょ。そのあと、境内のお掃除、手伝ってくれる？ 放って置くと湿度で凄い事になっちゃうから」

「うん！」

五円（後書き）

お疲れさまでした。

独りの鴉（前書き）

カーカー（読んでも良い事ないよ）

## 独りの鴉

今は一人じゃない。

謙斗はニヤケている少年たちへ、今までできなかつた強い視線を向ける。

独りなんだ。

長い前髪で隠しつつ、鋭く尖らせた眼に宿る決意。しかし、映るは少年たちの姿ではない。いつか見た理想の後姿。それだけを見据え、彼は右手で魂を握り締めた。

公園で謙斗は顔を洗っていた。蛇口から流れる水を受け止める手や腕には、擦り傷や痣があり、着ている制服も土まみれとなっている。

何度目か、顔に水を流す謙斗は、悲痛な声を小さくもらした。だが、さらにもう一度、手に持った水を顔にぶつける。

「……こんなものかな」

顔を擦った手を見つめて、大丈夫そうだと呟いた。先ほどまで掌全体を染めていた紅が、ある程度消えていたからだ。しかし、それでもまだ溢れている紅い液体の元を断つため、湧き出ている場所を濡らしたハンカチで押さえる。腕の傷などは洗う事もせず、平気だろうと蛇口を閉めて顔を上げた。湿って纏まった長い前髪が、押さえている右眼やその上の額以外を覆う。隠れた彼の左眼に映った景色は、いつもとほとんど変わってなかった。

この場所を囲うように植えられている木々や砂場、子供用の遊具や二脚のベンチ。ハトに餌を与えるおじいさんはいないが、ベンチの上には恋人のように見える男女が一組座っていた。犬の散歩ついでに買い物に行ったらしく、スーパールの袋を片手に持つ中年女性も公園内を歩いている。が、痛々しい姿の謙斗の近くにいるにもかか

わらず、彼らは声をかけるところか、視線を向ける素振りも見せない。

くだらない会話で盛り上がっている男女に、家庭での不満をブツブツと呟く女性。自分たちの世界に入っており、謙斗の存在など、その辺の石となんら変わらないのだろう。

当たり前か。

左眼と同じく、黒い前髪で隠れている口端をわずかに持ち上げた。そして嗤った、自分自身を。心の中で、大きな声で。なんて小さな命なんだろう、と。

自分の存在の大きさを頭の中で想像して、さらに嗤う。

微生物は顕微鏡を削ってまで人々に見られ、確認されている。だが、自分はどうか。誰の眼にも映る大きさで、確認できる形で立っている。それでも気づかれる事はない。

例えば気づかれたとしても、それは彼を彼だと見ていない者だ。ただの玩具。

先ほどできた傷が痛み、塞がりかけていた口の傷が開いた。しかし、顎から血が滴ろうとも謙斗は嗤う。

小さ過ぎるよ……。

自身を嘲笑い、一人で涙を溜める少年は、こぼすもんかと空を見上げた。この世界でもっとも大きな存在である蒼天を見つめる。もう、感情を抑える術が無くなってしまった。惨めな己を呪い、頬に雨水が伝った。

雲一つない空は、彼の心を表し、酷く歪んでいた。

「……帰るかな」

誰もいない家。ただ建っているだけの寢床に向い、彼は顔を、身体を向けた。ここにいってもなにもする事はなく、どこにいってもわびしい気持ちになるのなら、一人の空間が良いと一歩進む。と、上空が少し騒がしくなった。

なんだろうと顔を押さえていた手を離しながら、再び空を見上げようとした瞬間、謙斗の前で小さな茶色い物体が落下してきた。自

然とそちらに眼が行き、落ちてきたモノを見ると、それは傷ついたスズメだった。

なにが起きたんだともう一度顔を上げようとするが、それより早く、今度は黒い物体が彼の前に降り立ってきた。

大きな翼の羽が一枚、謙斗の鼻先で舞う。古代から人々に忌み嫌われる漆黒の身体の主は、まさに理想の姿であったと脳内に深く刻まれた瞬間だった。

謙斗の足もとに降りた鴉は、落ちてきたスズメに目がけて、鋭く尖ったくちばしを最短距離でのばす。落下した痛みからか、それ以前に鴉の攻撃で受けた傷からか、逃げられなかったスズメは、その身体に黒のくちばしを受け入れさせられた。

小さな身体から噴き出た人間と同じ赤い血が、見事な放物線を描きながら謙斗の学生ズボンに染み込んでいった。くちばしを引き抜かれ、首もとから血を流しつつ小刻みに震えるスズメ。もう死んだのか、まだ一応生きているのか、謙斗には判断がつかなかった。だが、口内に溜まっている言葉だけは理解していた。躊躇いがあり、それを音声に変える事はしなかったが。

完全に身動きが取れなくなったスズメを、血が滴るくちばしでくわえた鴉は翼を広げる。そして、飛び立った瞬間、スズメの仲間が鴉の周りを取り囲んだ。返せと、仲間を返せと鴉を追い回しながら叫んでいるように見える。一対一なら身体の大きさもあって、鴉が断然有利だが、今は十数羽に攻撃されてなす術もない。謙斗の頭上で旋回しながら逃げ回っているのがやつとなのだろう。

「あら、可哀想に……」

「カラスってやつぱり凶暴なんだね」

「みたいだな。ちょっととした衝撃映像だったぜ」

声が聞こえた。心の底から腹立たしい言葉となつて耳に届いた音源へ、謙斗は左眼だけを動かした。先程と変わらない場所にいた若い男女と中年の女性。謙斗には見向きもなかった彼らは今、謙斗がいる場所と上空の鴉たちを交互に眺めていた。

視線を向けたは良いが、やはり苛立たされるだけで、すぐに鴉たちへ戻す。

違うじゃんか。お前たちはなにを言っているんだ。

歯を食い縛り、眉間にしわを寄せる。赤膨ている右眼に痛みが走ったが、お構いなく顔に、身体に力を込めた。

そんな言葉じゃない。貴方たちはなにを見ているんだ。

喉が干切れるほど声を張り上げたかった。しかし、公園から離れて行き始めた鴉たちに気づき、自然と足が動く。このまま見失いたくなかったのだ。

つまらない人間たちを糾弾する時間も惜しい、と謙斗は駆けた。

自分の希望を追うために。

追い駆けながら謙斗は思った。あのスズメたちは人間なんだ、と仲間が殺され、持って行かれる。憎く、返して欲しいと言う気持ちにはわからなくもなかった。生きているかもしれない、仲間を救いたいんだと言う思考も、わずかながら理解している。が、謙斗はスズメに腹が立っていた。

一羽だけで戦ったら簡単に殺される癖に、逃げる癖に。束になった途端、攻撃するなんておかしいだろう。彼は独りだったんだぞ。食べ物を手に入れるために、独りで頑張ったんだ。お前らの行動はおかしい。

謙斗にいつも暴力を振るって来る時、相手はいつも多人数だった。道を歩いていても、バカ騒ぎをするのはいつも二人以上のグループ。公園で家族への愚痴をこぼしていた中年の女性も、家に帰れば大半は言わなくなるだろう。家族全員を敵に回さないために。その癖、同じ環境の者が集まれば大声で陰口。

そんなやつらが、と謙斗は奥歯を噛みしめる。公園で聞いた言葉が、頭の中でリピートされた。

可哀想？ 凶暴？ 衝撃映像？

ふざけるな！

見てしまった三人の姿が脳裏に浮かんだ。頭の血管が切れそうになるのを必死で耐える。

良かったねじゃないか。彼は自分のご飯を、自分の力だけで手に入れられたんだ。たった独りでやって見せたんだ。お前たちにそれができるのかよ！ 集まらないとなにもできない、僕と同じちっぽけな人間が！

悔しくて、謙斗は涙を流した。思っていたのに、彼らに向かって吠えられなかった事が、悔しくて仕方がなかった。

鴉を見失いたくなかったのは本当だ。だが、一言二言叫ぶ時間があった。が、なにも言えなかった。

誰よりも臆病で、なにモノよりも小さな自分が、本当に嫌になった。

いつもそうだと思いながら、謙斗は鴉たちを追う。

親も家族もおらず、誰にも守られない悲劇の主人公。金だけは親が死んだ時に手に入れていた。家もあった。生きる分には困らない。保護者は信用できる者がいないため、必要がなかった。孤児院にも行く気がなかった。誰にも、なにも言わず、首を横に振っていたら普通に生活はできる。影の一人として。

学校で虐められても、仕返しや反論さえしなければ良い。身体と心を殴られるだけだ。別に自分がどうなるうとどうでも良い。そう思っていた。そう、言いわけをしていた。

謙斗も気づいてはいた。新しい環境を受け入れる心が、他人を信用し、受け入れて貰う勇気が、虐めに抗う力がなかった事を知っていた。一人では無理だと決めつけて。

そんな僕が、彼を追いかけても良いのか？

小さくなって行く鴉たちを見つめながら、謙斗は足を止めた。同時に、どうしようもない不安が押し寄せてきた。

追ってどうなる？

追いついてどうする？



どうせなにも変わらないんじゃないか？

無駄な体力を使うだけなら、このまま家に帰った方が良いだろ？  
思考の世界に足を踏み入れ、謙斗は自問した。答えは出て来ない  
いや、出てはいた。すべて、見なかった事にすると言う答えが。

しかし、なぜか踏ん切りがつかない。いつもならここで投げ出す  
はずが、今日に限って、いたずらに抵抗する。どうしても、それが  
正解だとは思えなかった。

鴉たちの姿は、様々な建物の反対側に消えて見えなくなっている。  
これから探し出すのはもう無理だと自分に言い聞かせる。だが、な  
にかが諦めなかった。

初めての感覚だった。その上、嫌な感覚じゃなかった。むしろ、  
望んでいたような錯覚も覚える。そして、どうせならと自分に言い  
聞かせた。

「家には誰もいないんだ。何時に帰ったって一緒だし、探してみよ  
う」

下手な嘘だと笑った。声に出して、ようやく自分の気持ちに気づ  
く事ができた。

今動かなければ、一生今のまま。そんなのは嫌だ。

殺したい。彼を見つけて、自分を殺したい。

小さく一步を踏み締める。地面の感触が一步前までと変わってい  
た。それだけで心地良くなり、頬が緩んだ。もう一步踏み込んだ。  
これが切っ掛けとなり、謙斗の心に深く突き刺さっていた楔が抜け  
る。そして、もう止まる事はなくなった。心も、身体も。

見えなくなった鴉を探すのは至難の業だった。相手は鳥。地上を  
歩く事しかできない人間とは違い、風になれるのだ。どこにどう向  
かったのかなんて、わかるわけがなかった。

しかし、想像する事はできた。

消えて行った方向へ向かいながら、自分ならどう逃げるかを考え

る。スズメたちの攻撃も同時にシミュレートした。その時に、電線や高めの建物などの障害物も考慮する。鴉の大きさも忘れずに、脳内でその場その場の環境を想定した。

あとは勘でひたすら進んだ。元々ボロボロだった身体は、すぐに悲鳴を上げて走れなくなつた。黄昏もだいぶ前に済んでいた。大きな道を歩いているが、人の姿など影もない。だが、暗くなるうと、なにがあるうと、なにもなかるうとゆっくり前に向かう。静かな空間に、足音を響かせながら。

一晩中歩き続け、それでも鴉は見つからなかった。藍色の空となり黎明の時が訪れる。体力もだいぶ前に限界を超えており、壁に寄りかかりながら進まないといわれてしまっそうだ。

「もうすぐ……。きつと、もう少しで……」  
何時間前から呪文のように口に行っている言葉。諦めたらダメだと自分に言い聞かせて進む。身体が痛もうとも、疲れ果てていようとも、心だけは折れていなかった。

「絶対に見つけるんだ」  
どれだけ時間が経つてもと続けようとしたが、言葉はそこで途切れた。なにもない場所ですまづき、転んでしまったのだ。視界は、まるで落とし穴に落ちたかのように急降下。倒れたと気づくまで、数十秒以上の時間を要した。

起き上がるうとアスファルトに手を突き、腕に力を込めた。乾燥し、かさぶたとなった傷口が引つ張られ、新しい血が震えている腕を流れる。足もすでに感覚がなく、自分の物かと疑問を覚える。

「今までずっと休んでいたんだ。こんな時ぐらい動いても良いだろ、僕の身体」

主人の声に応えようと、腕や足に少しだけ力が入った。

身体が持ち上がると、良い子だとペットでも褒めるように呟いた彼は、再び壁に寄りかかって進む。と、謙斗の耳に物音が聞えて来

た。なにかが暴れている音。もしかしてと思い、音源へと向かう。ほんのわずかな希望が見え、同じくらい足が軽くなった。

五十メートルも進んでいないのに、どれだけ時間がかかったんだと音のする場所を視界に入れつつ苦笑した。音源は、煉瓦をコの字型に積み上げてできているゴミ捨て場からだ。そして、その場所の前に落ちていたモノを、前髪に隠れている左眼で見た瞬間、昂揚のあまり、雄叫びを上げてしまいそうになった。体力さえわずかでも残っていたら実際に叫んでいただろう。それだけ謙斗は歓喜していた。漆黒の羽とスズメの亡骸があった事で。

ゴミ捨て場にやっとの思いで到着した彼は、急いで中を覗き込んだ。

やはりここだった。生に縋りついて、懸命に暴れ続ける鴉の姿がここにあった。

「大丈夫かい？」

鴉防止の網に引つ掛かり身動きができない希望へ、謙斗は笑顔を向け、ゆっくりと中に入った。また転げてしまいそうになったが、自分の体重で潰しては元も子もないと最後の力を振り絞る。

「安心して、すぐに自由にしてあげるから」

ジツとしてねと話しかける謙斗だが、人間を警戒して、鴉はより一層大きな動作で暴れ始める。足に絡みついている網に触れようとした時には、スズメを突き殺した硬いくちばしで手を噛まれた。しかも、食い千切ろうとして首を何度も左右に傾ける。が、肉が潰れようと、血が大量に垂れようと、謙斗は笑みを崩さなかった。右手を犠牲にしつつ、左手で優しく解いていく。そして、最後の糸が外れた瞬間、鴉は勢いよく飛び立つ。姿が見えなくなるまでの時間は、あまり必要としなかった。

「うん、それでこそキミだよ。僕の希望……僕の理想……」

心臓が働くたびに痛む右手を、公園で使ったハンカチできつく巻きつけた。なお溢れ出て来る血に少し呆れながら、短い袖を引き裂いて手首に巻きつける。心臓より高い位置まで傷口を上げて、病院

に行かないと、と苦笑した。

ふと眼に入った鴉の羽。地面に散らばっている漆黒の羽を手に持った。頭を出した太陽の光に当てると、微かに紫がかかった色となり、光沢のある一枚の宝になった。謙斗の命と同価値の宝物として。

「これ、貰うね」

すでに姿が消えた鴉に向かって言った謙斗は、羽を大切に胸ポケツトに入れた。必要な時に使うからと心の中で呟いて。

「さて、じゃあ帰ろうかな。あつ、それよりも病院に行かないと」赤膨れて見えない右眼。傷や痣だらけの顔や腕。土色となってロボロの制服。足下で息絶えているスズメの血で、形容し難い触り心地になっているズボン。極めつけは、先ほど食い千切られそうになった右手の怪我。誰が見てもロボロボロで、情けない姿だった。

しかし、それでも前髪で隠れている謙斗の表情は明るかった。誰も見た事がない、本物の彼は、清々しい気持ちでこの場を後にした。

鴉に傷つけられた怪我の抜糸を終えた一週間後、謙斗はいつものメンバーに呼び出され、公園に立っていた。

まだ包帯が取れない右拳に握るは鴉の羽。今日のために大切に持っていた宝を　魂を潰し、彼は自分を殺した。いや、すでに死んでいた。鴉を助けた時に、一人であった謙斗と言う人格は死んでいたのだ。今回やったのは別れの儀式だろう。永遠にさようなら、と。そして、これからよろしく、と心の中で言った。独りとなった自分に向かって。

不意に、引き締めていた表情を緩めてしまった。彼はいつたい、どこでなにをしているんだろうと少年たちの後ろの、さらに奥を見つめた。

独りの鴉（後書き）

お疲れさまでした

## 思い出から今へ（前書き）

お久しぶりです。私です。前口上なんかも少々入れようかなと思  
ったのですが、止めます。それより気になる事があります。それは  
と言うと、更新もろくすっぽしていないのに、毎日数人ほど覗いて  
くれている方がいますね。その方々に一言……出て来い！なんで  
もいいから連絡よこせ！ 土下座しに行くから！ こんな粗末な愚  
作を読む事に時間を費やすな！ もっと有効な使い方をして下さい  
！ ……ふう

## 思い出から今へ

「今日は雲の調子も良いし。うん、良い日だ」

夜天を彩る星々を眺めた貴幸は、嬉しそうに歩を進める。

嬉しくて仕方がなかった。久しぶりに幼馴染と逢えるのだ。

田畑が周りを占める田舎道をスキップしそうなほど軽快に歩く。

辺りは街灯が少なく、薄暗いが、真丸の月のほのかな光によって空からライトアップされているため、進むべき道ははっきりと見えていた。思い出の詰まる小さな公園への道を。

アスファルトの道路を一步一步踏み締めながら歩くと、目的地を示すモノが視界に入った。

場違いとも思える一本の木。田畑に囲まれるなか、一本だけそびえ立つ大樹を視界に入れ、自然と足の回転が速くなった。駆け出しそうになった。だが、貴幸は立ち止まり、一度大きく深呼吸をする。「落ち着け、僕。もう良い年なんだ。みっともないところを見せるわけにはいかない」

自分に言い聞かせ、もう一度深呼吸。息を吐き切ったあと、良しと呟いて大樹を、それを囲う公園を見据えた。

顔が勝手にほころんだ。こればかりはどうしようもないと再び歩き始める。

公園に着くまで、まだまだかなりの距離があった。

小さな公園。ブランコや滑り台、鉄棒などの遊具なんて一切ない。あるのは古びたベンチと、この場に不釣り合いな大樹があるだけの小さな小さな公園。

貴幸は、このなにもない公園で、幼い頃からよく遊んでいた。幼稚園からの幼馴染たちといつも集まっていた。

くだらない遊び、暇つぶしのおしゃべり、大ゲンカ。  
なにかあるとすればいつもここだったと思いつながら、貴幸は公園  
を見渡す。

いた。

大人が三人ほど手を繋いでも囲えないほど太い木の幹の前に、青  
年はいた。

持って来たのか、ゆったりとできる折り畳みのイスに腰を落とす  
ている青年の後姿を見つけた貴幸の鼓動が早くなった。見忘れるは  
ずもない幼馴染の姿を。

足が地についていない錯覚を覚えながら、ゆっくりと進む。地面  
を踏むたびに公園内の土が微かに鳴った。あと数歩で青年まで辿り  
着きそうだった時、彼は貴幸の存在に気づいた。

振り返られ、静かに近づいていた貴幸の方が驚く。が、すぐに落  
ち着きを取り戻した。青年の変わらない声音を聞いた瞬間に。

「よう。三年と数カ月ぶりだな、ユキ。元気だったか？」

「僕はいつも通り平凡に過ごしてるよ、マサ君」

そりゃああなたによりと雅貴は笑った。貴幸も落ち着いた笑みを浮か  
べる。

子供の頃となにも変わらない笑みを作り合ったあと、雅貴はイス  
から立ち上がった。貴幸は彼に歩み寄る。

「相変わらずちっせえな、ユキは」

「平均より少し低いだけだよ。マサ君の身長が高過ぎるだけ」

「そうか？ でもよ、女のユウのより低いのはどうかと思うけどな」  
長めに伸ばした金髪を遠慮がちに風で揺らしながら、雅貴は意地  
悪な表情を浮かべた。向けられた貴幸は、ユウちゃんがおかしいん  
だよと不貞腐れながら短めの黒髪を同じように揺らす。

「そう言えばさ、向こうでユウちゃんと逢ってる？」

「うんや。俺はイギリス、あいつはフランス。世界地図で見れば近  
いけどよ、実際逢うとなると結構めんどくせえんだ。それによ、留  
学決めてから俺もあいつも逢う気どころか話す気だつてサラサラな



かったしな。ある程度実力がつくまでは、な。手紙にも書いてたろ？」

一応聞いてみただけと貴幸は大樹を見上げた。雄々しい姿とは裏腹に、満月に重なっている青々しい葉は、山岳に囲まれた湖のように碧く澄んでいる。だが、貴幸の心中は暗く濁っていた。

「……いつも一緒だったんだけどね」

言葉にするつもりはなかった。音声に変換するつもりなどなかった。

しかし、自然と口からこぼれた。

時の流れを止める事などできない。いつまでも子供のままでいられるはずがない。

わかっているさ、そんな事。

頭では理解している。貴幸ももう成人。今は就職活動をしており、来年からは社会人の仲間入りだ。それでも、三年以上経っても踏ん切りがつかない女々しい自分が嫌になった。

なにより、散り散りになった幼馴染たちは、それぞれの夢を追いかけて真っ直ぐ進んでいる。振り向く事などしていない。ただただ、一直線に。

置いて行かれたと感じずにはいられなかった。

絵でイギリスに留学した雅貴。有名な画家のもとで日々充実した日々を過ごしていると貴幸は送られた手紙で知った。高校生の頃に英語をサボっていた事を後悔したと最初の手紙にはあったが、一カ月も過ぎればなくなった。絵だけに集中できる最高の環境だ、と。

もう一人の幼馴染、夕貴。彼女は、アポを取ったり、交渉をしたりと一から始めた雅貴の留学とは違い、スカウトされてフランスに飛んだ。高校生活最後のピアノのコンクール。入賞こそしなかったものの、偶然見学に来ていた関係者の目に留まったのだ。そして、彼女から送られて来る手紙も雅貴とほとんど同じだった。最後には必ず、留学して良かった、と。

心から羨ましいと貴幸は思った。

努力と才能に満ち溢れた幼馴染たち。彼らと同じだけの努力をしているのかと聞かれたら、貴幸は間違いなく、やっていないと答える。ならどうしてだと聞かれたら、わからないとしか言えない。なにか一つに対して、心から専念できないのだ。

夢が、僕にはない。

やりたい事ならたくさんある。雅貴のように上手な絵を描きたい。夕貴のようにピアノで綺麗な音色を奏でたい。読んでいる小説のような物語を書きたい。プロのスポーツ選手のように華やかな舞台上で走り回りたい。

だが、できない。それらはあくまで妄想。宝くじが当たって欲しいと言う言葉と同意義の欲望。夢などではない。かと言って、自分から一步を踏み出す勇気を貴幸は持っていなかった。

普通に学校へ行き、普通に勉強して、そこそこ良い成績を残し、就職して……。

なんてありきたりな人生なんだろうと貴幸は思わず自嘲してしまった。隣にいる雅貴やこの場にはいない夕貴には見せられない、酷く歪んだ笑みだった。酷く、寂しそうな笑みだった。

隣でなにやら音がしたが、貴幸は大樹を見上げているだけだった。「なあ、ユキ。お前、これ覚えてるか？」

貴幸はゆっくりと彼の持つているモノへ顔を動す。とても懐かしいモノだった。

「それって、昔マサ君が使ってた……」

「おう、よく覚えてたな。これ見つけた時は感動したぜ」

二人の視線の先にあるモノ。それは、端が擦り切れ、泥だらけの表紙にまさしく汚い字で書かれたノートと色鉛筆だった。雅貴の愛用だった物だ。

「それをどこで？」

嬉しそうに雅貴が顎をしゃくった場所は、大樹の根元だった。上ばかりを見ていた貴幸は気づかなかったが、その場所には大きく掘り返された跡があり、土の色が変わっていた。視線を戻してボロ

ボロのノートと色鉛筆に目を向けると、それらを持つている雅貴の手に土汚れが残っていた。そして、なるほどと納得する。

「驚いてるって事は、お前も忘れてたんだな、優等生の貴幸君」

意地悪な笑みを浮かべる雅貴の皮肉に、貴幸は子供のように拗ねた。

「小学生の頃に埋めたタイムカプセルなんて、覚えてるわけないじゃないか。それも低学年の頃なんだよ。覚えてたマサ君がおかしい」

「まっ、覚えてたってのは少し違うけどな」

どう言う事と貴幸が訊ねると、今度は落ち着いた、大人びた表情で雅貴は公園を見回した。なにもない、彼ら思い出だけが詰まっている小さな公園を。

「……この場所に来た時に思い出したんだ。ああ、ここが俺が俺であった場所なんだ。ここがユキやユウと一緒にいた場所だったんだなあって思ってたら、な」

場所がわからなくて掘んの大変だったけどよと苦笑しながら雅貴はつけ足した。お疲れ様と貴幸も同じような表情を浮かべる。

「ところで、僕やユウちゃんのは？」

「お前のは一応出しておいたぜ。あいつのはまた埋めた。この場どころか、日本にもいねえやつを持つてるわけにもいかねえしな」

それもそうだねと言う貴幸の声を聞きながら、雅貴はイスの横側についている大きめのポケットに手をつ込み、封筒のような物を取り出した。それを、昔埋めた本人に返す。

受け取った貴幸は、何色かの折り紙の端をノリで貼り付けて封筒に似立てた物を眺める。表を見つめ、裏に返すと、ゆきと自分の名前が書かれていた。

昔の自分の字に少し恥ずかしがりながら中身を取り出す。

「……これ、本当に懐かしいね」

手に持っているのは一枚の写真と折り置まれた二色の折り紙。写真には、顔を赤くして真ん中で体操座りをしている貴幸。彼の背中に抱きついてピースサインをしている夕貴。写真の右端で、ピンボ

ケしながらもドアアップで映っている雅貴。皆幼く、楽しそうだった。未来なんて関係なく、今を精一杯楽しんでいる頃の写真。眺めているだけで穏やかな気持ちになった。

「そっちの紙つてなんだ？」

「これ？ 内容は覚えてないけど、マサ君やユウちゃんに宛てた手紙だったと思う」

手に持ち続けてボロボロにならないように写真を封筒に戻し、最初に水色の折り紙を開く。雅貴宛の手紙だった。ぜんぶ平仮名で、字も汚く、読むのに苦労する。読み切ると、苦笑するしかなかった。ユウちゃんにはなんて書いてあったんだっけともう一つの方も開き、勢いよく畳んだ。

「どした？」

「な、なんでもない！ うん、なんでもないから気にしないで！  
と言うよりマサ君、これ、読んだ？」

「人のもんを勝手に見るような、無粋な人間に育ったつもりはないぜ？ 俺は」

信用して良いんだねと念を押すと、清々しい返事が即答で返って来た。

どっちとも取り難い答えに顔をしかめながらも、わかったとだけ呟いた。

昔の僕はなに考えているんだよと思いつながら折り紙も手作りの封筒にしまう。と、雅貴が、そうだったと小さく声を上げた。

「俺の絵がどれだけ上達したか見せてやるよ」

どうやってと貴幸が訊ねる前に、雅貴は座っていたイスを持ち上げ、木のそばで反転させて置いた。そして、イスの背もたれの上を二度叩く。

「ここに座りな。久しぶりにお前の絵を描いてやんよ」

「いや、僕は良いよ。と言うより、暗くて描けないんじゃない？」

「こんぐらいなら平気だって。手元はペンライト当てながら描くしよ。なにより今日は満月。むしろ月明かりで綺麗な絵が描けるって

もんだ」

道具もあるしなと雅貴は、古いノートと色鉛筆を貴幸に見せた。準備万端だねと呟いた声に、おうと再び気持ちの良い返事が返って来た。

「……まあ、時間も十分あるし、お願いしようかな」

「そうこなくちゃユキじゃねえや」

「マサ君のなかの僕の印象が気になって来たよ」

「言ってみようか？」

遠慮しておくと言いつつも息を吐きながらも、まんざらでもなさそうな、むしろ嬉しそうな表情で貴幸はイスに座った。それを確認した雅貴は彼以上に明るく笑みを作り、近くのベンチに向かった。

マサくんは絵を描いてもらうのも久しぶりだなあ　いや、当たり前か。

日本にいなかったんだからとすぐ後ろにある木の幹に頭を当てた。ゴツゴツとした樹皮は、枕代わりになりそうもなかった。だが、いつも使っている枕よりも貴幸の心は落ち着いた。この木の根に頭を置いて何度昼寝をしただろう、と。

「うっし。んじゃ、描くからジツとしてくれよ。瞼も動かすなよ」

「それって、僕に失明しろって言ってる？」

「できれば呼吸も」

「死ねと？」

冗談が通じねえやつだなあと言う声を、貴幸は聞えなかった事にした。

雅貴が絵を描き始めると、二人はわかれてからの事を話し始めた。大体は手紙に書かれていた内容だが、本人の声で聞くとまた違う感覚が沸き上がる。まるで、同じゲームの進行具合をお互いに確認しているような、昨日まで同じ事を話していたような、不思議な気分となった。

時間が経つにつれ、話しの内容が変わった。高校時代、中学生時代と、昔の事を二人は語り合う。

「ユキは覚えてるか？ この公園の怪談話」

「怪談……？ ああ、この木の下に誰かが埋められているって話だね。ここでマサ君とユウちゃんが落とし穴掘って、僕をハメた時に聞かされた」

「そうそう。穴掘っただけなのに、知らねえおっちゃんに怒られた時の」

「落とされただけの僕も怒られたからね。はつきりと覚えてるよ」

あの時の恨みはと目を細めて雅貴を睨んだが、彼の視線は手元のノートに向けられていた。少しの間続けたが、顔を上げる様子がなく、貴幸が折れる。すると、見計らっていたかのように雅貴が顔を上げた。顔には不敵な笑みが張りついていた。

やられたと肩を竦める。

「……こう言う時、幼馴染って損だなあって思うよ」

「お前が諦めるタイミングなんて、何年経とうと忘れねえよ」

「至極光栄です」

勝者の笑い声が公園中に響いた。敗者は溜め息を吐くしかできない。

「まっ、ユキが俺に勝つ事はこの先もないとして……実はな、あの怪談って本当だったらしいぜ」

「へへ、そうなんだ。ビックリな事実だね、うん。思わず棒読みになっちゃったよ」

信じてねえなと今度は雅貴が顔をしかめた。それに対して貴幸は、うんとはつきり頷く。

「だってさ、マサ君たちがいくら穴掘っても骨なんて出て来なかったじゃないか。タイムカプセル埋めた時だって、二人が無駄に張り切って深い穴掘ったけど、なにも出なかったし」

「いやいや、骨ごとこの木に吸収されちゃったんだ、きつと。でなきゃこんなとこに一本だけこんな大木が残ってるわけねえじゃん」

ふーんと貴幸は正直に聞き流した。この反応が常識だと言うように。彼の反応を見た雅貴は微かに舌打ちをする。

「つまんね。昔のお前だったらもつと怖がつてたのによ。良いぜ良  
いぜ。お前がもし死者の霊に襲われても、俺は助けてやんねえかん  
な」

「いつからマサ君は怪談好きになつたんだよ……」

「ふん、可愛げのなくなつたユキには教えてやんね」

可愛げつてと貴幸はどう反応すれば良いかわからず、とりあえず  
乾いた笑い声を発した。聞こえたのか、雅貴はもう一度鼻を鳴らす。  
そんな彼を見て、変わらないなあと心のなかで呟く。と、足元から  
音が鳴った。土のなかでなにかが動いている音。

モグラかなと貴幸は掘り返され、柔かくなつた地面に視線をずら  
す。だが、特に変わった様子はなかった。イスの下、右側左側と一  
応確認したが、それでもなにもなかった。

やっぱりモグラかと視線を雅貴に戻した瞬間、もう一度地面から  
音がした。今度のは、先程より遥かに大きい。

慌てて貴幸は顔を下に向けた貴幸は、目を大きく見開いた。口を  
魚のようにパクパクさせ、顔を青に染める。

足もとの右側から、土色をした二本の腕が飛び出して来ていた。  
やせ細り、肉が抉れている腕。薄暗い場所でもはつきりと見える、  
手の形をした土にまみれの骨。張り付いている筋肉や肌は紫色に変  
色していた。

声を上げる事もできず、貴幸は息を呑んだ。雅貴が用意した玩具  
だと思おうとするも、その腕は滑らかに動く。そして、貴幸は足首  
を掴まれた。

白骨となつている手に掴まれた貴幸は、混乱のあまりイスから倒  
れ落ちる。が、足から手は離れなかった。声を上げようとするが、  
喉が凍りついて動かない。助けを求めるために雅貴に視線を向ける  
が、彼はノートから目を離さなかった。先程のやり取りで相当機嫌  
が悪くなつたのか、周りの空気だけでそれがわかった。

もう一度声を出そうとした瞬間、地面に埋まっている腕の先が盛  
り上がった。身体が動かず、冷たい汗が額に溜まる。そして、現れ

た。地面から長い黒髪の頭が。

溜まった汗が頬を流れた。顎先から滴り落ちる。思考がほとんど停止した。

頭が完全にその姿を現す。顔は髪に隠れてほとんど見えなかった。だが、一部だけ見えた。抉れた頬まで大きく伸びる口が、楽しそうに、嬉しそうに嗤っている口だけははつきりと見えた。刹那、貴幸は無我夢中で暴れる。声が出せない代わりに必死に暴れた。雅貴に気づいてほしい一心で。だが、聞き覚えがあり過ぎる声によって、動きが止まる。

「痛っ！ 痛いって！ 暴れるんじゃないわよ！」

「えっ……？」

声が聞こえた方を貴幸は見つめる。間違いなく、地面から現れたモノからだった。

信じられなかった。その人物は、彼女はここにいるはずがないから。だが、彼女はそこにいた。足首から離れた手で髪を掻き上げた彼女の口元は、異形その物だったが、貴幸は誰であるかわかなくはなかった。

「もう、痛いじゃない、バカユキ！ 世界遺産とも言われるこの私の腕を蹴っ飛ばすなんて、なに考えてんの！」

「誰の腕が世界遺産だ、アホ女。自分から蹴られるような事したくせによ」

雅貴の声を聞き、貴幸は彼の方を向いた。そこには、口調とは反対に、身体を小刻みに震わして笑いを堪えている幼馴染の姿があった。

「ど、どう言う事……？ え？ なんでユウちゃんがここに？」

動揺を隠せない貴幸の問いを聞きながら、夕貴は地面から抜き出た。そして、貴幸の前に立ち、決まってるじゃないと成熟している胸を張って言い切った。

「サプライズよ」

「いや、サプライズって……。それに、なんで水着姿？」



「だって、服着たまま地面のなかに潜ったら汚れるじゃない。その点、水着なら汚れてもこのまま身体ごと洗えるし。一石二鳥」

そうなんだと放心状態のまま貴幸が呟いていると、やれやれと言いながら雅貴が歩み寄って来た。

「こんなやんちゃ娘が、向こうじゃ清纯ピアニストとか呼ばれてんだぜ？ 世も末だよなあ」

「うっさいわねえ。猫被ってんの大変なんだから、地元に戻った時ぐらい羽目外させてよ。それに、あんだだつてノリノリで私の腕や顔に色塗ってたじゃない」

骨そつくりを描かれた彼女の腕や手、そして陥没したように見せている顔を呆然と見つめる貴幸をよそに、まあなと雅貴は肯定した。「ユキを脅かせんの楽しいしよ。いや、にしても迫真の演技だったな。あの怯えようとか」

笑い声を噛み殺し切れない雅貴は、クククツと笑う。近くでは、私は痛かったけどねと夕貴が愚痴をこぼした。

「そ、そうだった！ ユウちゃん、腕大丈夫！」

急いで立ち上がった貴幸は、ごめんねと謝りながら無理やり夕貴の腕を手にとって傷の具合を診た。ペイントや土汚れのせいでわかり難かったが、幸いにも血は出てないようで胸を撫で下ろす。そして、ティーシャツの上に来ていた上着を脱ぎ、夕貴の肩にかけた。

「いくら夏だつて言っても夜中にそんな薄着じゃ風邪を引いちゃうよ。それでも着てて。汚れても良いから」

急に腕を掴まれ、さらに心配されながら服をかけられた夕貴は、先程と立場が逆転してしまい、どもりながら礼を口にする。戸惑っている彼女の声が聞こえた貴幸は、どういたしましてと言いつつ二人を見つめた。

「変だと思っただよ。いきなりマサ君が怪談の話しなんかするから」

まったく肩を竦める貴幸は、もう落ち着きを取り戻していた。そんな彼に、幼馴染の二人は感心したような、驚いたようなと言っ

た感じで丸くなった目を向けていた。

「どうしたの、二人共？」

「いや、なあ？」

「そう、よね？」

お互い顔を見合せ、もう一度貴幸を見る。見られた貴幸は、不思議そうに首を傾る。

「お前も知らねえうちに成長してんだなあって思ってたな」

「これが親の心境なのね。勉強になったわ」

「……マサ君は二度目になるけどさ、二人のなかの僕の印象が知りたいよ。いや、言わないで。予想できるから」

「泣き虫だろ、弱虫だろ」

「臆病も足した方が良いわね。それで、全部ひっくりくるめて……子供？」

指を折って数えながら勝手に答える二人に、言わないでって言ったのにと貴幸は頭を垂れた。だが、否定はできなかった。

高校卒業記念に三人で行った遊園地ではお化け屋敷で悲鳴を上げ続け、ジェットコースターで気絶した。だが、観覧車では三人のなかで一番はしゃいだ。卒業式や最後わかれる時には泣きながら見送った。思い出せば出すほど、自身で認めてしまう。とても恥ずかしく、とても情けないと大樹を見上げ、自嘲してしまった。暗闇で自分の醜い顔に二人が気づかないようにと祈って。

僕も成長したつもりだった。二人に認めて貰いたかった。胸を張って言いたかった。二人がいない間に僕もこれだけ成長できたんだ。やっと二人に追いつけたんだ、って。

雅貴と夕貴が飛行機に乗り込んで天に飛び立った時、貴幸は二人にそう報告できる人間になりたいと心から願った。だが、現実はこれだ。

なにも変わっていない。彼らから贈られた手紙を見ては羨ましいと思ひ、自分からはなにも行動を起こさず、ただ平凡な学生生活を送るのみ。探している就職先も、エリートが務めるような場所では

なく、極々平凡な一般業。少し背伸びをして、上っ面だけ成長した自分を見て貰おうとこの公園まで歩んだ自分を貴幸は恥じる。うっすら浮かべていた笑みが酷く歪んだ。と、おもちゃの音色が貴幸の耳に入ってきた。

これも懐かしいなと音源へ振り向くと、そこには小さなピンク色をしたおもちゃのピアノを弾いている、泥だらけな幼い夕貴の姿があった。隣では、彼女と同じように汚れ、彼女とは違い絵の具まみれの服を着た雅貴が、地べたに胡坐を搔いて絵を描いている。

自分の目を疑い、両手で擦る。ゆっくり瞼を上げると、時間は今へと戻った。

「懐かしいでしょ？ これ、私が埋めてたやつなんだよ」

本物と比べ物にならないほど いや、比べるだけ損なほど稚拙な音色。最後に聞いたグランドピアノの音とは、海を越えて送られて来たCDに収められた音とは、それほどまでの差があった。しかし、貴幸は世界一のメロディだと思った。今見ている、誰にも描けない一時の絵を、世界一の絵画だと思った。

頭を小刻みに揺らしながら器用に小さなピアノの鍵盤を弾いて、幼い笑みを浮かべる夕貴。耳に色鉛筆を挟みながら同じように昔と同じ笑みを浮かべつつ、なにかの絵を描く雅貴。

ああ、そうか。そうだったんだ。だからなんだね。

やっと貴幸もわかった。二人が今こんなに大きく見える理由が。

彼らと出逢い、十数年以上経ってようやく知る事ができた。

変わらない二人。変わろうと闇雲に足掻いた自分。この差が、今ある大きな壁なんだ、と。

気づいて貴幸は笑った。とても簡単な事だったんだと思いながら、幼い笑みを浮かべる。

「ほれ、ユキは唄えよ。いつも唄ってたろ？」

「弾き辛いのを頑張ってるんだから早くしなさいよね」

向けられる視線。答えるように貴幸は胸に右手を添えた。大きく息を吸う。

上手に唄う必要なんてない。ただ楽しめれば良いんだ。今を。

口を開き、奏でられているメロディに声を混ぜ合わせた。歌詞なんて存在しない。昔からそうだった。その日、その時の気分や天気、空気を想いながら言葉を連ねる。めっちゃくちゃな時があれば、貴幸自身が驚くほど歌詞として成立した時もあった。そして、今は前者だ。声質もだいたい低くなっている。ミュージックとしては成り立っていない。だが、絆としては十分だと思えた。二人との大切な糸としては。

中盤から雅貴の口笛が混ざり、貴幸たちは絆を奏で続けた。

「よし、でき上がりっ」と

終わる事のない演奏に終止符を打った雅貴の声。聞いた貴幸と夕貴は、共に彼の絵を覗き込んだ。

「やっぱり上手だね、マサ君は。それにこの絵……」

「あんたの記憶力を時々感心するわよ」  
「嫌味にしか聞こえねえけど、真摯に賛美として受け取っておいてやる」

「僕は嫌味を言ったわけじゃないけど。けど、どうしてこの絵を？」

わかってるってと言う雅貴の絵は、幼稚園に通っていた頃の三人が、さつきと同じように唄い、弾き、描いている絵だった。太陽の光が葉を通り緑色に輝く影のもと、三人がそれぞれの役目を楽しそうに果たしているところだ。

「なんかさ、お前らを見ながら描いても頭に浮かんだのは、こんな情景ばっかだったんだよな」

顔を合わせたのが久しぶりだったからかもなど雅貴は恥ずかしげもなく笑う。それに、残りの二人も同意し、貴幸は驚いた。

「ユウちゃんも？」

「まあね。と言うより、ユキもなんだ」

「みんな考える事は一緒って事か。ガキの頃からのくされ縁っての

も雑草みてえにしぶといもんだな」

雑草だからでしょと貴幸と夕貴が八モると、それもそうかと雅貴が頷き、三人で声高々に笑った。貴幸の声は一番大きく響き渡る。可笑し過ぎて涙が止まらないほど笑った。笑いが止まりそうになっても、止まる事を知らない涙を誤魔化すために声を上げ続けた。

「じゃあ、今日はこのぐらいにして解散しようか。二人とも、しばらくこっちにいるんだよね？」

涙が止まった貴幸は、三人で少しばかり昔話をしたあと、そう切り出した。頷く二人を見てまた泣きそうになる。だが、これは歯を食い縛って耐えた。ここは泣いて良い時ではないと自分に言い聞かせながら。

「けど、解散するのはちょっと早いわね。まあ、マサとはここでわかるけど」

昔話をする前に隠していた服に着替えた夕貴は、横目で雅貴を見た。顔や腕に描かれていた生臭いペイントも、身体に付着していた土を落とす時に使用したタオルにアルコールをしみ込ませて落としていた。

そうだなと雅貴が同意する。

「こっからはお前ら二人の時間だ。邪魔な俺はとっとと去ろうかね。遠くで待ってる彼女に電話しねえとなんねえしな」

彼女つてと貴幸が訊ねる前に、雅貴は描き終えたページを本体から切り離して手渡す。受け取った貴幸は、背中越しに手を振り、公園の近くに停めていた車へと消えた彼を半分呆けながら見送った。

「あいつ、イギリスで金髪の女を手に入れたんだって。嬉しそうに電話で言ってた」

相変わらず女好きなんだからと肩を竦めながら夕貴がぼやく。それに、貴幸が喰いついた。

「電話？ けど、手紙じゃ連絡は取ってないって……」

「一回だけ、ね。今回の帰国であいつから電話がかかって来たのよ。」

ユキと一緒に脅かさねえかって」

その時に聞いたのと言う彼女の答えを、貴幸は納得できた。だから二人はあんな企画を立てられたんだ、と。

「まっ、そんな事はどうでもいいから、さっさとあんたの家に行くわよ」

「なんで？」

「決まってるじゃない」

悪戯が思い浮かんだ子供のように、意地悪そうに口端を持ち上げる麗しき東洋のお姫様の顔を見た貴幸は、嫌な予感しかなかった。そして、その予想は的中する。

「息子さんを一生連れ回しますってね。差し当たって、まずは日本制覇ね」

視線が貴幸の顔から、ずっと手に持たれていた折り紙の封筒に向けられた。それに気づいた貴幸は、顔を真っ赤にして写真や二枚の折り紙の入っている封筒を背中に隠す。反対の手に持っていたノートの一ページも自然と後ろに回る。が、同時にもう遅すぎる事を理解してしまった。

気づかない方がどうかしていたのだ。タイムカプセルのなかに入っていた雅貴のノートと色鉛筆は掘り出されていた。どこに隠していたか不明だが、夕貴のピアノも地上にあった。そして、持ち主の貴幸よりも早く二人は折り紙の封筒を手にしていた。雅貴にしても、夕貴にしても、なにより二人が揃って中身を見ないはずがない。

「み、見たんだね？」

答えなど聞かずともわかり切っていた。だが、聞かずにはいられなかった。

返って来た返答は、想像通りだ。

彼女が、うんと声を発したわけではない。頷いたわけでもない。しかし、十分過ぎた。幼馴染の怒る気がうせるほどの清々しい笑みは。

「マサがショック受けてたわよ。俺のにはそんな事書いてねえのに

！ っ。 あいつはきつとホモセクシユアルね。 私とユキがケンカした時、いつもあんたの事庇ってたし」

その時の光景を思い出してクスクスと笑う夕貴に脱力するしかできなかつた。 が、座り込む事は許されなかつた。 それより早く彼女が貴幸の手を掴んだからだ。

「そんなわけで行くわよ、ユキの家。 大学も辞めたし、思う存分暴れるから」

「大学辞めたの！」

初耳だつた。 信じられなかつた。 うんと頷かれても驚くばかりだ。 なんてと声を荒げると、 堅つ 苦しいからと笑いながら答えられた。 「さつきも言つたけど、猫被り続けるのってしんどいのよ。 だから辞めた。 あそこつまんないし」

「で、でも手紙じゃ……」

「マサの方は手紙の内容も知らないし、どうか知らないけど、私が自分で決めて、自分から進んで向こうに行ったのに情けない事なんて書くと思う？」

私の性格忘れたのと反対に聞かれ、 そうだつたねと呟いた。

最初から最後まで風のように自由気ままだつた彼女が、 檻に閉じ込められて大人しくしているはずがなかつた。 困っているモノすべてを切り刻む性格をしているのだ。 その上、 気の強い身体の芯が邪魔して、 自分にも真実の内容が書けなかつたのだと理解できた。 今の今まで辞めずに帰って来なかつたのは、 意固地になつて、 納得できるまではと在留していた事も。

鼻を鳴らしてそっぽを向く彼女に、 苦笑する以外の手段を貴幸は持ち合わせていなかった。

「とにかく！ もうそんな事は過去の話し。 どうでもいい事なの。 わかつた？ ちなみにイエス以外の答えは認めません」

「横暴過ぎる……」

肩を竦めながら溜め息を吐きつつも、 けどと口端を持ち上げる。

「ユウちゃんらしいかな」

「あつ、それとこれからちゃんづけで呼ぶの禁止。私だっていつまでも子供じゃないんだから」

頬を膨らませて唇を尖らせる彼女は、貴幸の手を強く引き、返答を聞く前に一步を踏み出した。

急に歩かれて転びそうになったが、体勢と整え、隣に並んで歩を進める。

ふと振り返り、大樹を見上げた貴幸は、またねと心のなかで呟いた。そして、三人の絵が描かれた紙と彼お手製の封筒を持っている左手と、夕貴に握られている右手を強く握った。

これからもずっとよろしくねと言う代わりに。



思い出から今へ(後書き)

お疲れさまでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3094j/>

---

風吹くまま、のらりくらり

2010年11月13日17時28分発行